
十字架背負う花天使達・2

蓮千里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十字架背負う花天使達・2

【Nコード】

N4701A

【作者名】

蓮千里

【あらすじ】

空のどこかにプリメットと言う国がある。そこに住むのは、花天使という天使達。十字架を秘め、十字架を背負い人々に平和をもたらす天使達。先日第一戦を終えたばかりの彼等。だがそれもつかの間の休息だった。対の存在が遂に決まる第2部です。

NO・1 召集（前書き）

わかってる。

いつまでも一緒にはいられないってことは……

NO・1 召集

地上に異変が起きた時、その源を探し出し

『クレスト』（成仏）させるのが『花天使』。

ただし、どんなことがあっても彼等は相手を

『殺してはいけない』。

源である相手の罪を自分達が引き受け、源をクレストする。

それが『十字架背負う花天使達』の使命。

NO・0 影の対話

ミシ、ミシッミシッ……

はあっはあっ………

走る度に、軋む廊下。

どこまでも長く、脆い廊下をひとつの影が息を切らして、走っていた。

とても暗く、何も見えないのに影は何もかもわかっているような動き。

常人には区別のつかない闇の中で無駄のない動きをする影。

ひとつの部屋を通った時、影の手の中で光が生まれた。

『反応、あり!』

影は迷わず、その部屋を開ける

「そこまで!」

影は光り輝く十字架の石で、いたるものを淡いピンクに染めていく。

【闇に生まれし、花たちよ】

暗い部屋の中で誰かが詠唱していた。

男とも女ともつかない声。

【今、再度この世に降臨されるべし】

高々と逆十字の石を掲げ、影の詠唱は続く。

【この世に暗黒を広げたまえ！！】

詠唱と同時に部屋の闇は、濃くなっていく。

そして、この時間こえてきたのだ。

部屋を開けた影は。

「……一歩遅かったね」

勝ち誇った声。

「こんなに早く動くと思わなかった……」

息を切らし、絶望を感じさせる声。

「これから、よろしく」

どちらの声かわからない。

NO・1 再度、地上へ舞い戻れ

「『熱風200』!!」

ハンスの十字架から、恐ろしい温度の風が噴出される。

「『草ぐさの刃』!! つけえ!!」

セラフィンが周りの草木を集め巨大な刃をハンスに放つ。

「くっ……!!」

「ぐっ……!!」

風と刃が互いの中間で、くすぶっている。

どちらも一歩も譲らない。

まるで時間が止まったように、何も動かない。

「『紅乱剣』!!」

少年2人の声が重なり、紅く燃えた炎の三日月が刃を燃やし、熱風を包み込む。

時間が再度動きだす。

「セラ！ハンス！やりすぎだよ」

「あのままやってたら、どっちかがマジで殺られてるぜ」

ティアラとクリスがセラフィンを引きずりながら仲間の元へ運ぶ。

2人は完全に気を失っていた。

「俺とジルがいたから防げたけど……油断もすきもありやしない」

ディックが2人のリーナス（魔力）状況を調べながら、2人を小突く。

「全く、世話の焼ける双子だな」

苦笑しながらジルは言う。

「練習試合で死んだら洒落になんねえってのに」

クリスは交互に2人を見ながら、呆れた声音でそう言った。

「とにかく、クリスVSジル始め！！」

ディックが練習試合開始の合図を宣言した。

ここは空に浮かびし国、プリメット。

花天使達の母国。

年がら年中、咲き続ける花からは決まって『双子』の子供が生まれてくる。

この『双子』で生まれてくることを、プリメットでは『対の存在』という。

ある一定期間が経たないと、花天使は性別が決まらない。

『対の存在』は必ず『男』と『女』の一組で生まれてくる。

セラフィンとハンスは、プリメット初の『双子』。

この『双子』の意味は普通に考えてくれればいい。

この2人、『双子』だから『対の存在』もいれれば『四つ子』なのだから。

パタパタ2人を仰ぐティアラ。そんな彼女を抱きよせるディック。

「今はセラ達の看病中。離れて『兄さん』」

「邪魔してないじゃん。それに俺は、彼氏だし」

むくれるディックをよそに、冷たいタオルを額に置くティアラ。

「……『あたし』じゃなくて『イングル』に性別が決まったらどうするわけ？」

「俺の勘では、絶対ありえないと思うけど」

しれっと言うディックに頭が痛くなるティアラ。

イングルというのがティアラの『対の存在』の名前。

そして、彼女達とディックは血の繋がりが無い。

だから、ディックのことは『兄さん』と呼ぶ。

ディックは、対の存在を犠牲にしてプリメットにやってきた。

裏組織から抜け出すために。

そして、彼の対の存在は、もう、この世に存在しない。

彼等の手によってクレストされたのだから。

「……………なんで、彼氏にしたんだろ、あたし」

ティアラが遠い目をした瞬間、

彼女のペット、ランがアヤメをくわえながら彼女の元へ飛んできた。

「相変わらず上達しないわね……ソニカの奴」

笑いながら、ランからアヤメを受け取るティアラ。

同時にディックが『紅炎』をジル達に向けて発射する。

「お前等、ソニカからの連絡だ！降りて来い！」

そんな中、気持ちよく気絶していたセラフィンとハンスを、たたき起こすティアラの姿があった。

「静槍流……『一輪草』」

真っ二つに切れるアヤメ。切ったのは、セラフィン・カメラア。

ティアラに叩かれ、蹴られて気づいたひとりだ。

セラフィンとハンスだけが使える『静槍流』。

己の手だけが武器というのが信じられない技。

信じられない切れ味。

真っ二つになるとすぐに、ソニカ・アイリスの映像が映し出される。

『地上が異常なリーナスに包まれてる！！全員、すぐに来てくれ！』

映像のソニカが開口一番そう言った。

NO・1 召集（後書き）

十字架背負う花天使達2です。

今回のテーマは『対の存在』についてです。

序章も終わり、次回から本編へとうつります。

では、又お会いできるのを祈りながら……

R u e

NO・2 存在（前書き）

あなたは伝説を信用しますか？

NO・2 存在

緑ヶ丘大学・心理学1年の教室に1組の男女が壇上にあがっていた。

「はじめまして。あおがすみ じゅんか蒼霞純歌です」

「むかひ けい向日佳。よろしく」

担任が2人の名前と『振り仮名』を書いて紹介する。

「今、紹介があつたように、編入してきた蒼霞さんと向日君だ。仲良くしろよ?」

そう言つてHRを終わろうとする担任は、ひとりの少年を見て

「いろいろ、面倒を見てやってくれ、都」

そう告げると、担任は教室を出て行つた。

「俺は都遊。みやこ ゆう今日は次の講義は休講だから、今から大学内を案内するよ。蒼霞さん、向日君」

につこり笑つて手を差し出す都。

「よろしく」

純歌と佳は、口をそろえて挨拶をし、都の後を追っていく。

パタンとドアを閉めるなり、都が口を開いた。

「早く図書室に行こう。ティアラ、クリス」

それに逆らわず、歩くスピードを速める2人。

都は人間ながらにして、十字架背負う花天使となった人間。

この少年こそが、ティアラ達に助けを求めてきた人物だった。

約2時間前

「はあ？異常現象？？」

「……………これって普通の台風とかじゃないの？」

「ごめん。俺にも普通の自然現象にしか見えない」

ティアラ、セラフィン、ジルが意見を出し合う。

ここは季節館。

花天使達の家で、全国各地にこういった花天使の家はあるそうだ。

そのひとつに彼等は集まっている。

ティアラ達の意見に反する者はいない。他の面々も同じ気持ちのようだ。

プリントアウトされた紙には、彼等が動く意味のないような自然現象ばかり載せてある。

「……………こつちの映像をみたら、そうは言えなくなるさ」

そう言ったのは、ソニカ・アイリスこと、都遊。

彼はスクリーンに画像を映し出す。

ギューイイイイイイイン！！

ギューイイインギューイイイイイイン！！

常人には聞こえない音。常人にはないリーナスを感じる、花天使達。

「止め……止めて！！」

セラフィンの悲鳴で止められる映像、聞こえなくなった音。

「なんだっただよ……今のは……」

「あんなリーナス、感じたことないよね」

クリスとハンスが顔を見合わせながら呟く。

「新たな敵が出てきたようだな。しかも普通の花天使じゃない。違うか？ソニカ」

ディックが顔色一つ変えずに、ソニカに尋ねる。

「さっすがディック！そうなんだ。搜索してたらこのリーナスが聞こえた。どうだ？それでも自然現象か？」

ソニカは、耳を塞いだセラフィンやジルに問う。

「……………鬼ソニカ」

2人は同時に呟くので精一杯だった。

「あ、もうこんな時間？俺、学校だ」

時計を見たソニカが急いで部屋を出て行くとするのをディックが制する。

「ソニカ、一つ提案なんだが」

そう言つて、彼はティアラとクリスを流し目で見た。

「たくつディックの野郎……なあにが提案だ」

「絶対、面白がつてるんだわ」

向日佳という偽名のクリスと、蒼霞純歌と名乗っているティアラが悪態をつきまくる。

流し目で彼等を見たディックの提案が、まさにこの『編入』で、

こともあるうにディックは、犬猿の仲であるクリスとティアラを潜入させたのだ。

2人が文句ばかり言うのも無理はない。

しかし何故この2人なのか。

その答えは、単に彼等が視界に入る位置に居たからという単純明快な答えだ。

どうやって編入したか、ということは花天使達にとって、愚問。

今までに幾度、人間の記憶を消したり植えたりしたのか数え切れない

いほどあるのだから。

「セラの薬まで飲ませたみたいだから、後には引けない」

髪をかきむしるのはクリス。

セラことセラフィンは薬を作るのが趣味。

どんな薬も彼女の手によれば、あっという間に出来上がってしまう。

どんなに怪しげな薬でも、彼女は笑いながら作るであろう……。

「ソニカア。なんで心理学になんか入るのさ！『薬学部』ならセラが来たはずだ！『喜んで』！！」

「んなこと、俺の勝手だろ！」

怒鳴るティアラ、言い返すソニカ。

唸りながら、図書室の前まで到達する3人。

「そんなに大声で喚いていると、後が大変なんじゃないの？」

図書室の扉がゆっくり開けられると一緒に、少女の声がした。

「……あなた、誰？」

ティアラの目が点になる。

クリスもティアラも知らない少女。

でも、どこかで見覚えがあった。記憶をたどる2人に、蘇った記憶。

「ソニカの……お前のあの映像に映ってた……子？」

クリスが思わずソニカを見て声を出す。

一瞬だったが、確かに映像に映っていた少女だった。見間違えじゃない。

「え、えと。今は気にしないで下さい。『単なる馬鹿』の発言ですから……あなたは？」

ティアラが少女に笑いかけると、少女は苦笑しながら答えてくれた。

「そんなに必死にならなくても、敵じゃないですよ。蒼霞純歌さん……いえ本名は『ティアラ・ジプソフィラ』でしたね」

につこりと少女は言い、クリスのほうに目をやった。

「『クリス・サンフラワー』さんですね？」

思わず身構えるティアラとクリス。

敵じゃないと言われて、信用できる世界じゃない。

「敵か味方が……判断できないわ。どう信用しろと？」

ティアラの目が鋭く光る。

「こつちには知り合いが少ないもんで……味方なら俺達は覚えてるし、『見分けることが出来る』」

クリスも戦闘態勢を整えた。

少しでも少女が動けば2人は攻撃するであろう。

図書館の中の時間が止まる。

視線がぶつかりあう3人。

その時。

「だあ！2人とも、この人は敵じゃないって！！」

マジモードの2人にようやく気づき、慌ててソニカが少女を庇う。

「私の名前は、さきはら 崎原れんげ蓮華」

ソニカの後ろからでてくる少女。

「代々、あなた方『十字架背負う花天使達』の存在を知る『崎原家』、429代目当主です」

優雅にお辞儀をし、蓮華は微笑んだ。

「噂話には聞いていたが……本当に実在したとはな」

ディックがハーブティーを飲みながら、マジマジと蓮華を見た。

崎原蓮華が『十字架背負う花天使』を代々からしっている当主だと聞いたティアラ達。

そろいも揃って講義を抜け出し、季節館に緊急帰宅を決断。

レポートで季節館に舞い戻ってきた彼等を見て、ディック達は驚いたようだが、

何事もなかったように現在、話を聞いていた。

「ディックさんが、この中の最年長なんですよね？」

「まあ、そうなりますね。最も俺自身の年齢なんて覚えてないですけど」

蓮華の言葉に苦笑しながら答えるディック。

一口、ハーブティーを口にする蓮華。

肩まである黒い髪が、自然に揺れる。華奢な身体、静かな口調。

どこまでも自分達とは程遠い存在。

それら全てを感じさせる少女が『崎原蓮華』だった。

そんなことを考えていた一同の気を知ってか知らずか蓮華は話を再開する。

「確か……ティアラさんの婚約者」

口を離すや否や、蓮華は澄ました顔でいいのける。

「げほっげほげほ……崎原さん、あたしを殺す気？」

ティアラは、レモンパイを喉に詰まらせてしまった。

「言葉と裏腹に顔が赤いですよ？ティアラさん」

「いちいち指摘しないで下さい蓮華さん。ティアラが暴れると後始末が大変なんで！！」

セラフィンが真剣に言った。

「そうらしいですね。都君から聞いています。それに……知っています。」

この石が全てを、プリメットのことを教えてくれるんです」

胸元から取り出した物を見ると、蓮華を完全に信じることとなった。

緑ヶ丘大学。

「ん？都と崎原がないが、知らないか？」

出欠を取っていた教師が、目の前の女子生徒に尋ねる。

茶色いショートカットの髪が前後に揺れる。

いかにも運動大好き人間という感じの女子生徒だった。

「先生、崎原さんと都君は共に早退しました。……そうだったよね？」

女子生徒は隣の生徒達に話を振る。

「え、えと。どなたか分からないんですけど」

「俺達に振られても、答えようないんですよ」

申し訳なさそうな表情の女子生徒と頭を下げる男子生徒。

「ああ、君達がそうか。えっと……名前は」

教師が名簿を探している間に、2人は名乗る。

「蒼霞です」

「向日です」

立ち上がり、教師に礼をする2人。

「わかった。じゃあ授業を始めようか。楓さん、号令をお願いできるかな」

教師は目の前の女子生徒に目を向けた。

季節館

彼女が取り出したのは『十字架の石』。通称クロス。

『花天使』の存在を知り、サポートできる証の伝説化した石。

見たのは誰もが初めてだった。

一見普通の石に見えるが、花天使には分かる。

特殊だということが。

クロスは特殊なリーナスで作られた物。

誰が作ったかは不明だが、彼等はクロスと共鳴できる。

『十字架背負う花天使』なら誰でも共鳴できるのだ。

「……すごい……これが『クロス』とセラフィン。」

「リーナスの共鳴って、心地良いものだね」

セラフィンの双子の兄、ハンスの呟き。

「不思議な感じだな……蓮華さん、貴女はこれがあったから、ソニカ……じゃなく遊をサポートできたんですね？」

ジルが確かめながら問う。

蓮華は静かに笑いながら答える。

「どちらでも私には分かりますよ。ソニカ・アイリスも都遊も同一人物なんですから。」

ジルさん、仰るとおり『クロス』があるからサポートできました。でも」

「でも、何もできずじまいに終わった……そうですね?。」

暗くなる表情を見逃さないディックの声音が季節館に響きわたる。

ディックはゆつくりと席を立ち上がり、異常気象プリントの束を蓮華の前にドサリと置いた。

「俺達花天使には『対の存在』と言える『反逆者』がいる。同じように『クロス』にも『対の存在』は存在する」

ディックは蓮華の目の前に立つ。

「『リバー・ス・クロス』をご存知ですね？」

ディックの迫力に蓮華は、目を伏せるしかなかった。

緑ヶ丘大学・図書室（3F）

緑ヶ丘大学には、様々な本が置いてある。

心理学関係の本だけでなく、ごく普通のファンタジー、推理小説、漫画……

普通大学には置いていないような本が目映る。

時刻は午後5時をまわっていた。

窓から、夕日が差し込む。室内が紅く染まる。

そして、同じように紅く染まる3人の人影。

「よくもまあ……偽名中の偽名を名乗れるね」

ひとつの人影が動く。

「それしか方法はなかった。分かっているだろう？」

腰まである長い髪をひとつに結んだ影の主、純歌が答える。

「それに、任されたことだしね。悪いとは思わないわ」

右の額に十字架の傷を負った佳の声。

「もう、お芝居はしなくていいの。ここには私達しかいない」

そう言ってひとつの影の顔が見えた。

「はじめまして。私は『楓伊里』（かえで いさと）」

伊里はリバース・クロスを見せ付ける。

「『剥奪されし者』を闇から生み出した『リバース・クロス』の
429代目の主よ」

見せ付けられたとたんに、思うように身体が動かなくなる2人。

「……………そっちが本性出したんなら」

「こつちも本性、出すべきね」

純歌の髪が短くなっていく。

佳の頭にリボンがくくられていく。

「どうもティアラ・ジプソフィラの『対の存在』、

インゲル・ジプソフィラ。地上での名前はあおがすみ はるや蒼霞晴夜」

「クリス・サンフラワーの『対の存在』、レミ・サンフラワーこと、むかひ なつ向日奈津。」

貴女が持つてるリバーズ・クロスから感じるリーナスは普通じゃないわ」

レミが厳しい顔で伊里を見据える。

「あの映像から感じた異常なリーナスの正体はアンタだな？」

インゲルが問い詰める。

「なんのことかな……じゃ、確認済んだから私は帰るとするわ。」

よい学園生活を送りましょう」

そう言って伊里は窓から飛び降りて、完全に姿を消した。

NO・2 存在（後書き）

いきなり敵ができました。

こんなのできちゃんと話が成り立つのか……と考えたこともあります。

では、又お会いできることを祈りつつ……

R
u
e

NO・3 ……ハプニング?! (前書き)

己の意に反して、行動を取ったことはありませんか？

NO・3 ……ハプニング？！

「どーやら編入して正解だったようだ」

「あの『リバース・クロス』の気配……完全に私達のリーナスを封じた。身体も動かないから、静槍流も使えない」

セラフィンとハンスにリーナスを回復してもらいながら、イングルとレミは『リバース・クロス』の威力を報告する。

レミが言った『静槍流』とは、セラフィンとハンスだけが使える技。己の手だけが武器であるとは思えない切れ味を発揮する、難関流派。そのため、今では使い手が数人しかない。

イングルとレミの言葉を聞いたセラフィンとハンスは、思わず顔を見合わせる。

「俺達が地上に来ていることを予測していたのか、それとも俺達は、飛んで火にいる夏の虫。だったのか……」ジルの重い言葉に、はつとする花天使達。

もしも今回のことが『偶然』ではなく『必然』だったら？

今回のことが敵の『罠』だとしたら……？？

& a m p ; n b s p ; スベテガ シクマレタコトダトシタラ…

………？

& a m p ; n b s p ; 彼等は、地上に残った花天使、ソニカ・アイリスこと、都遊のSOSで再び地上に戻ってきた。そう思った、けれど。

「全く否定は出来ないことね……『反逆者』の勢力が強くなってるのは皆、知っているでしょう？」セラフィンの問いかけに頷く花天使達。

& nbsp; 『反逆者』とは『十字架を背負わない者達』のこと。彼等は色々な理由で花天使のシンボルである『十字架』をもてなくなつた者達。

『十字架』とは、目に見える『十字架』ではない。

『目に見えない十字架』……『人間達の罪』が『十字架』なのだ。

その『十字架』を背負わず、己の欲望などだけに走つたり、人間をクレストすることなく殺せば、

目に見える十字架は、即刻、破壊される。

このような者達を『反逆者』、または『剥奪されし者』と称しているのだ。

欲望に走つた者達の結末は、誰もが知っている。

だが『反逆者』が100%悪い、とはいえない。

彼等の心は、本当は繊細で、脆い。

そして、最初から濁つた心ではなく、周囲の視線や環境、愛する者の裏切り……それらが理性を奪い、独りでは耐えられない身体となつて、復讐などを誓つてしまう。

『他人がどうなるかと知つたこつちゃない』

こんな気持ちには、理性を奪われた者が思い、言つてしまうのだ。

彼等と対戦し、勝利したこと純歌達は鮮明に思い出すことが出来る。

ソニカやディックには、かなり応えたはずだ。

ソニカの最愛の妹、看夏。

彼女はギゼルによって引き寄せられ、操り人形とされてしまった。

だが、心を正常化する直前に、ギゼルが『闇の剣』で貫かれてしまった。

最後の最後で看夏は『心』を取り戻し、ソニカがクレスト……所謂、

成仏させたのだ。一体、どんな気持ちでクレストさせたのか、それは想像をはるかに超えているに違いない。

シーナ・クローバー！

ディックの対の存在。彼が裏街道から脱獄する際、代償として置いて来た少女。

彼女は置いて行かれたにもかかわらず、彼を愛し、独占心が増大していった。

ユザナ・H・ハーブと名前を変えてまで、ディックを我が物にするために、

罪のない人々の魂を抜き取ったことは、ディック以外の花天使達も良く知っている。

本当にユザナ……いや、シーナはディックを心から愛していた。しかし、ディックはシーナのことをそういう対象では見ていなかった。だからこそディックはティアラを愛し、だからこそシーナはティアラを心から憎み、執拗にふりまわしたのだ。

あの時の、戦いを誰が忘れるものだろうか。

走馬灯のように、彼等の頭の中で再生されるヴィジョン。

それは、本当に早く、それでいて、哀しい戦い。

血の匂いが漂っている錯覚までし始めた中、クリスが小さく左右に顔を振り、一同を見渡しながら会話を再開させた。

今、感傷に浸ってる暇はないのだ。

「と。反逆者が静かになったのは、短期間だけ。どうやら噂は本当だったようだな」プリメット中が噂してたこと。

 「反逆者の勢力が再び増し始めた。原因はリバース・クロスが関わっているらしい」と。 「伝説とされていた『クロス』。そして『リバース・クロス』が

自分達の目の前に姿を現した。

これで、黙っているわけにはいかない。

引きさがれば『負け』を意味するし、なにより『地上の未来』がかかっている。

なにもかも、彼等の行動ひとつで『未来』が開く。

「ま、もともと引き下がるつもりなんて無いけどね」

フツと笑い、右腕を素早く十字に切るティアラ。

普通だったら血が出る場面なのに、そんな気配は一切無い。

かわりに出てきたのは、取り出したのは十字架だった。

恐ろしく長く、細い十字架は彼女だけのもの。

他の面々も、ティアラ同様、十字架を取り出す。

 クリスは右の額から。 ジルは首の後ろ側。

セラフィンは右肩、ハンスは左肩。

それぞれが思い思いに取り出していく。

「ある意味、不気味な光景だよな」 「同意見……でも、気合入れるのに必要だよな」 デイックが左腕から十字架を取り出す。

続いてソニカが左胸から取り出した。

「相手にとって不足なし！全力で行くぞー！」

 カキン！！ デイックの言葉が合図となり、 花天使達は自分の十字架を高々と上げ、

先端を重ねる。

気持ち、ひとつになったという証として。

 「私の代であなの方、『花天使』に実際に会えるなんて思いもしませんでした」 静かに口を開いたのは、 崎原蓮華。

今の今まで、最近の異常現象のプリントとデータを調べていたのだ。 崎原家のデータと、ソニカのデータを比べるために。

気がつかなかったが、手にハンカチを持っているところを見ると、

手洗いに行っていたようだ。

「なにか進展があったんですか？」

蓮華が静かにセラフィンに問う。

どうやら、蓮華は一度集中すると周りのことが見えなくなるタイプらしい。

セラフィンは、イングル達に接触してきた伊里のことを簡単に説明する。

が、話が進むに連れて、蓮華の顔色が青ざめていった。

「ちょ、ちよつと崎原さん大丈夫？」

「だ、大丈夫です。時間が経てば」

もともと白い肌がいつそう白くなる。

セラフィンはすぐに、液状の薬を取り出し、無理やり蓮華の口に入れる。

それが、どんな薬かは誰も聞かない。

病気や傷の判断は、セラフィンがプリメットで最高（最強）なのだから。

「セラ、今、崎原さんと話せるか？」

傍観していたディックが問うと無言で小さく頷くセラフィン。

「何を聞きたいかはわかっています」蓮華の目は天井を見つめている。感情を押し殺したような声、表情。

「……リバース・クロスのこと、そして『楓伊里』のことでしょう？」しばらく無言だった蓮華だが、意を決したように話し出す。

目は天井を見たままだった。

「楓伊里は、私の妹にあたります」言葉を切る蓮華。

「簡単にいえば、あなた方でいう『対の存在』。そう、『闇』という名の『対の存在』なんです」

季節館に電流のような衝撃が走る & a m p ; n b s p ;

*** 古びた門をくぐりぬけ、どす黒く変色したドアを見つめる影があった。

グガゴン……

重い音をたてながら、影がドアを開け、中に入る。何もないと同じような部屋。

薄暗くてよく見えないが、広い部屋にあるものはベットにソファ、冷蔵庫に台所といった必要最低限の物ばかりだ。人は、見当たらない。

「帰った。食べるものは、ある？」

入るなりそういうと影、楓伊里はソファに横になる。

誰もいないはずの部屋に、伊里は確かにそう言った。

薄暗い部屋には楓の姿しか見えないのに。

「伊里、おかえり」

「丁度、買出しにいつてきたところだ」

いつの間に入ってきたのか。それとも、見逃していたのか……とにかく2人の少年がドアの前に立っていた。女のような顔立ちの少年と、野球帽を被った活発そうな少年。

二人とも買い物袋を持っていた。

「なあ、教えてくれよ。会ってきたんだろ？」

「入るなりいきなりそれ？ルーリ」

買い物袋を放り出し、駆け寄ってくる少年を見て苦笑する伊里。

「だつてきにな……！ってーな！フラム何すんだよ」後ろをガバツと振り向くルーリ。

目の前には2本の足があった。彼は視線を上に向ける。

「聞いてんのかよ？！フラム！」

立ち上がりながら怒鳴るルーリ。

「食べ物を取り捨てる奴に言われたくない」

ルーリの頭上から聞こえてくる声は、とても落ち着いていた。顔も声音も、少女と違っていいほどだ。

「上から落とす奴がいう台詞かよ」

「僕は知らないけど？」

「しらばつくれんな……！」

胸倉を掴もうとするルーリだが、それは叶わない夢。

彼の身長より20cmも高いのだから。

「ねえ、今日の報告聞きたくないの？」

虚しくルーリの手が空を掴んだ時、伊里が切り札を持ち出した。

「とにかく、今日はお腹減ったしさ」

「楓伊里は、私の『妹』ですが……もともと私達はひとりでした。ただし『闇』と『光』という対の心をもった『人間』ですが」

蓮華がようやく、こちらに目を向けて話した。

「『闇』と『光』の心……」ティアラが言葉を繰り返す。

「君は『光』の心の持ち主になるのかな」ハンスが確認する。先ほど、蓮華は確かに言った。『伊里は『闇』という対の存在』だとも、どうして急に分かれたりするのかわからない」

ソニカの意見にイングルとレミも頷いた。

「わかりません……ただ、崎原に生まれた者は必ず持っているそう。満15歳になると勝手に『闇の心』を持つ者は、楓家に引き取られるとか」

蓮華の表情が曇る。彼女は再び視線を天井へと移す。

「光の心を持つ貴女は、私達を……伊里さんは闇の心を持っているから反逆者をサポートできる……」レミとセラフィンが同じことを口にする。

「つまり、リバース・クロスは『楓伊里』が持っていて、今回の敵は彼女が作り出した……と思っ
ていいのかい？」ディックの問いに答えない蓮華。

それはYESを意味していた。

 nbsp;nbsp;*****ピロリロリン、ピロリロリンン……ピ！薄暗い部屋の中で奇妙な電子音が聞こえた。それは、とても短い音で、すぐに聞こえなくなった。

「朝、か」むくりと起きたのは楓伊里。

ショートカットの茶色い髪は乱れていない。

無表情な顔で着替える伊里。

生気の無い瞳は、どこをみているのだろうか。

「あ、いいこと思いついた」

無言、無表情で着替えていた伊里が言葉をこぼす。

よほど、嬉しいのだろうか。

彼女の表情に笑みが浮かぶ。瞳に不気味な生気が宿りだす

*****「大変なことになったね、ディック」

静かにディックの前に紅茶を置くセラフィン。

新聞を見ながら、カップを持つディック。

「これが俺達達の使命だ、仕方ない」

顔色一つ変えずに、ディックは紅茶を流し込む。

「俺達はそう言う存在なんだから」

そう言うてセラフィンを見上げるディック。

「そう言うのは口だけ。内心は、かなり焦ってるんだぜ？

セラ。なあ？ディック、そうだろ？」テーブルの下から声がした。

「……そこにいないと俺の思考は読めないのか？ジル」「どこに行つたのかと思えば」

セラフィンとディックは、これ以上、言葉が出なかった。

何が面白くて、テーブルの下なんかにいるのか……。 「失礼ね、私

もいるわ。忘れないでくれる？」

笑いながら出てきたジルの後ろから、クルルが頬を膨らませて抗議する。

緑ヶ丘大学屋上に2つの人影があった。

天気がいいので裏庭などにも自分たちと同じことをしている連中がいる。

つまりはサボリ。

聞こえはよくないが、クリスとティアラは講義どこじゃなかった。ちなみに、イングルとレミに代返を頼んだから講義に問題はない。「それにしても、だ。今回はクレストできるか心配だな」

屋上のフェンスに寄りかかりながら、クリスは空を見上げて呟いた。「崎原さんの話によれば、源は『楓伊里』に間違いはない、けど」ティアラがアスファルトに座り、歯切れの悪い言葉をだす。

「私達は、『人間』をクレストしてはいけない　　どんな理由があっても」そう言いながら、2人は昨日の会話を思い出していた。

「全ての始まりは、『クロス』の異常な気配から始まりました」蓮華が起き上がり、窓の外を見ながら話し始めていく。

彼等の知らない真実を　　当主となつてから常時、肌身離さず持っていた『クロス』。どこにあるか分からない『プリメット』の映像、人々の感情……様々な物を蓮華に教えてくれた『クロス』が、突然奇妙な音をたて始めたのだ。思わず耳を塞ぎなくなるような雑音。

その場にしゃがみこんだ時、自分がどこにいるか悟った。

『楓家』の前にいたのだ。

「私は、いつも通り帰り道を歩いていたはずなのに、知らない間に伊里の家に向かっていたようで……恐かったんですけどクロスが、もうひとつあるような気がして、忍び込んだんです」なんとか一度家に帰り、夜になるのを待つて行動を開始。クロスのおかげで、どんな構造になっているか手をとるようにわかった。

しかし、蓮華の胸騒ぎは消えない。

『一刻も早く止めなければいけない』

何を止めるべきで、何故、自分がこんなにも急いでいるのかわからない。

でも、鼓動は早くなつてく一方だった。
そして、ひとつの扉の前を通った時、クロスが淡いピンクの光を發したという。

「迷わず私は開けました。そして、全てを理解したのです。
伊里が、リバー・ス・クロスを使つて『花天使』を降臨させたという事実を」

『いつか再び闇の花天使は蘇る……忘れないでくれ』
いつだったか、死ぬ間際に祖母が言つた言葉。
それを蓮華は鮮明に思い出した。

「でも、早すぎました……当主になつて日が浅いのに。それは伊里も同じはずなのに……伊里は『闇の花天使』を降臨させた。何のためらいも無く、2人の花天使達を、この世に降臨させたのです」

「異常気象は全て伊里が降臨させた花天使達の仕業。これは問題ないとしても」

「伊里は人間。俺達にどう対処しろつてんだよ」

ティアラとクリスは同時にため息をついた。

青空の下、どこまでも暗くなる2人。

だが、こんなもので暗くなつてたら始まらないことを、この時の2人は想像もしなかった。

「ハンス、クラメック20リットルとスズラン24束とつて」

「えーと……ああ、これか。他には？」「クラメックを缶の中にぶちまけて、細火で、かき混ぜながら煮て」

「りょーかい」

季節館にある研究室は、熱気に包まれていた。薬草を作る、セラフィン・カメラリアとセラフィンの兄、ハンスの姿が映る。

セラフィンとハンスは双子の兄妹だから、ティアラとディックの関係とは全く違う。

スズランを丁寧に取り分けるセラフィンの横顔を見ながらハンスは思う。

『今度は何の薬を作ってたんだ』

兄として、非常に心配だった。セラフィンは妙な薬草作りが好きなのだ。

それで助かったこともあるが……味方でよかったとつくづく思う。

「文句あるなら、口で言ってるね？ハンス兄さん」
につこりセラフィンが笑う。

熱気が冷気変わったのは気のせいだ。

「おいこら！大丈夫か？！」

ジルがリビングで怒鳴り、相手の反応を待つ。

【……なんとか、ね】【死んじやいねえから、安心してくれ】

【レミとイ……ング……蓮華さんを………に】「おい、何言ってるんだ？」

【たの……だ………】& nbsp; それっきりで交信は絶たれた。リーナスを通して通信しようとしても無駄だった。

「……セラとハンスを呼んでくる！」ジルは言うなり研究室へと向かう。

何も分からない。

たった一つ分かるとすれば ティアラとクリス、ソニカが何らかの事故に巻き込まれたということ。「……事故か、畏か……」

ディックがポツリと言葉にした。

NO・3 …… ハプニング?! (後書き)

スズランは毒草です。

綺麗だけど毒草です。

セラはどんな薬を作っているのだろう……

つくづく思うRueでした。

では、またお会いできることを祈りつつ……

R
u
e

NO・4

死（前書き）

己の危険を顧みず、命を掛けて護ることができますか？

「…………あたた……ここどこだよ」人間ながらにして『ソニカ・アイリス』という花天使の称号を与えられた都遊。そんな彼が目覚めた場所は、明らかに季節館でも講義室でもない。

暗闇で、検討がつかないが手足が鎖で巻かれているのは実感できた。

闇に目が慣れ、ここがどこかわかる。

「外の体育倉庫か。どうりで変な臭いが……」そこで言葉を切る都。

カチツカチツカチツ……

規則正しく聞こえる時計の針の音。

勿論、普通の体育倉庫なんかには時計なんて置いていない。

「バがつく物騒な物じゃ……ないよな」渴いた声で笑う都。

「ねえ、じゃあ『それ』だったらどうすんだよ」

闇からの声。

シルエットしか見えないが誰が話し掛けてきたかは分かった。

「その声は……さっき職員室の場所を聞いた」「覚えてくれていたとは、光栄だな」

暗闇の中、宙に浮いていたのはルーリだった。

「大変ですね、2人とも。今頃、お2人で何してるんでしょうね」蓮華が純歌と佳の方に小さく呼びかける。

「シート。蓮華さん、そう言う発言はしないで下さい」

「俺達は出来る限りのことをするだけです」

慌てて蓮華の口を塞ごうとする佳。

冷静に対応する純歌。勿論、本物の彼等ではない。

佳として話すのはレミ・サンフラワーまたの名を『向日奈津』。

純歌と姿を変えているのは、イングル・ジプソフィラこと『蒼霞晴夜』。

知っての通り、本物の佳と純歌は屋上でサボリ中である。

「いつもなら、あの2人が揃えば喧嘩になってますよ。そう、いつもなら」

「でも、流石に今の2人はしなないと思いますよ？今回のケースのことでは皆、不安を隠しきれないから」

イングル、レミが順番にいう。

「今頃考えてるんだと思います、今後のこと」

レミが言くと、蓮華は浮かない顔をして『そうね』と言った。

「全ては、伊里がしたこと……いえ、私をもっと早くきづけば！」

蓮華は自分を責めた。

両拳を握る力が強いことは、白くなっていく指でわかる。

イングルとレミが声をかけようとしたとき、彼等は気がついた。

蓮華の目が腫れていることに。

「あんまり、自分を追い込まない方がいいです」

イングルが優しく言った。

「昨日、ひとりで悩んで、責め続けたんでしょう？女の子が瞼腫らして登校するもんじゃないですよ。美人が台無しです」

レミがハンカチを渡す。

「今出来ることは何か……そして今出来る最善の策をとっているだけですよ」レミは前向きな言葉を言いながらも、どこか淋しげだった。

ガラガラガラ……ドアを開ける音が響く。人間、条件反射で音のす

る方に顔が向く。

広い講義教室を堂々と遅れて入ってくる奴は誰だ？
皆、そう思ったに違いない。

「っ！！伊里！？」

思わず立ちあがり、声を出す蓮華。

伊里が蓮華のを見た時

「！！危ない！！！」イングルが蓮華をレミのほうへと押し倒す。

同時に蓮華がいた場所が見えない力で砕かれた。

「蓮華さん！じつとして！」

必死になって蓮華を守るレミ。

そんな騒ぎの中、逃げ出そうとする生徒達。

気持ちには分かる。

分かるんだが、イングルやレミは頭を抱えたかった。

蓮華を守るだけで今の彼等はいっぱいいっぱい。

これは、彼等が対の存在だということが関係してくるのだが。

「ああもう！全てが一瞬のことかよ！？」

イングルが騒ぎを起こした張本人を睨む。

ドアの前にいる、楓伊里を。その瞬間、彼は息を飲んだ。

「
なんてリーナス出してんだ」「リバース・クロスの力なの？！」

イングルは啞然とし、レミは叫んだ。

彼等の目に映る『楓伊里』は無表情で生気の無い目をし、その目は
どんな闇よりも深かった。顔色も土色に近い。

「『リバース・クロスを持つ者は何もかも思い通りになる』と聞いて
るけど」

頭を振りながら、レミは言う。

「……………まさか」レミの言葉で思い当たることがあるイングル。

『リバース・クロスを持つ者が自ら望めば、花天使のような力を得る』

そんな言い伝えがあるのだ。今まで、誰も信じなかったが。

「これ、が、その姿なのか？本人が望んだから楓伊里は花天使の力を得たのか？」

人間の心を差し出して……？！」

リバース・クロスを持つ者は望めば、花天使の力をえることが出来る。

ただし、『人間としての心』を差し出すことが条件なのだ。

「伊里……そこまでしてどうして『花天使』になりたかったの？」

涙声で伊里に問う蓮華。

この時、ようやく伊里は反応した。

「あんたを殺すため」

感情のない声が講義室に響き渡る。

「あんた、邪魔なの。死んで」

機械仕掛けの人形のように話す伊里。

言葉を失う蓮華。もはや蓮華の知っている伊里ではない。

2人を交互に見ながら、内心、レミ達は安心していた。

伊里から強大なリーナスは感じるが、完全に人間の心を失ってはないううだ。

「『底なしのリーナス』より性質悪いけどな」

イングルはそう呟くと蓮華を庇う位置に着く。

「死んでくれて言われて素直に『はい分かりました』って、死ぬ奴がいるとも思ってたのか？」

呆れ顔でイングルが伊里に問い掛けた時。

「『時空移動』……！」

「『太陽の光壁』……！」

ギャ スカピースカ五月蠅かった生徒達が消えた。自分達のことを温かい光が包み込む。

「イングル？！民間人を先に安全な場所に移動させなさいよ……！」

「レミ！お前は死にてえのか？！危険を察知しろよな！つーか、蓮華さんだけでも移動させる……！」

現れるなり文句を言い出すのは本物の蒼霞純歌こと『ティアラ』。

そして向日佳と名乗る『クリス』。

ティアラは生徒達を瞬時に自宅まで移動させ、クリスは自分達を守ってくれた。

闇に生まれし花達と契約した伊里にとって、光というものは最大の弱点。

「ぐっ……ぐっ……ガウ……！」
痙攣しながら顔をそむける伊里。

「死んでも守れ！伊里さんを！！」

「外に飛ばす！皆に伝えて！！」

クリスとティアラの叫び声が重なる。

「了解！」

イングル達がそう言った刹那
ガタガタガタガタ……

小さな軋み音が大きくなっていくのが分かった。音の正体も。

「!!!ティアラ!クリス!!!」

「「いっけ！！」
「爆風」！！」
& nbsp;

ドッゴーン!!!

イングルの叫び、ティアラとクリスの声は無常にも、地震という音によってかき消された。

「……俺、クリス……聞こえる……か」瓦礫の下からクリスが季節館に交信を試みる。

あっちの声は聞こえない。

「　　なんとか、ね」

「死んじやいねえから、安心してくれ」

声は聞こえないが、自分達のことを案じていることがよく分かった。

「レミとイ……ングル……は蓮華さんを……連れてそっちに」クリスが息絶え絶えに伝えるが、向こうに良く聞く聞こえないらしい。

「とにかく……く、たのん……」クリスはここで気を失った。
ティアラの瞼も閉じようとしていた。

『　あの、こ、傷ひとつ、負ってない……』の『ティアラの瞼も閉じられる。

最期に見えた人影は、楓伊里に間違いはなかった。

「今、なんてった？」

信じられないといった顔で都がルーリを凝視する。

「後、2回あるんだ。今以上の衝撃が」

ニヤリと笑うルーリ。

「俺にも、いつおきるかわかんねえ衝撃だ。

それまでに、ここからでねえと……お前はこの世にいないだろうな」ルーリは都に背中を向け、最後に付け足しといわんばかりにこう言った。

「最も、爆破スイッチを解除しないと、結果は同じだがな」

ルーリの笑い声は姿が見えなくなっただけから、都の耳に残っていた。

「『氷の竜巻』……!」

イングルの十字架から蒼白い光と共に大量の氷が相手にくつついていく。

前後左右の4方向からできた現れた氷の竜巻が途絶える様子は無い。

「レミ!このまま抜けろ!」

一点を見つめたまま、指揮を取るイングル。

「わかつて……!!」レミは承諾したが、叶わぬ夢に終わる。

みゅーらら、みゅーらら、みゅーらららー

みゅーみゅーらららああああああ……

見かけは可愛い兎のような動物スカビオサ。兎の背中にコウモリの羽が生えている動物といえばわかるだろうか。

スカビオサは外見は愛くるしいところがあるものの、ブリメツト裏通りにしかない動物。

「っ!!……身体が固まっちゃうよ……」蓮華の耳に入らないようにリーナスを使うレミの眉間にしわが出来る。

「噂以上の、リーナスだっつ」攻撃の手も休めず尚且つ、スカビオサの泣き声に気をとられないように努めるイングル。スカビオサの泣き声には、特殊なリーナスが含まれている。

聞いた者は身体等の自由がきかなくなると聞いたことがあったが……これは予想以上のものだった。

「ふうん……やっぱり対の存在の『裏』の存在はあつけないね」氷の竜巻の中から、声が聞こえた。

「……ようやくお出ましかよ」声をだすのも容易ではない。

イングルは攻撃していたものの、相手の顔などは全く見えなかった。

「と……つぜん攻撃してきて、よくいう」蓮華を抱きしめながら、ゆっくりレミが言葉にする。

幸い、蓮華には怪我などは無い。

「フフ……退屈だったからね。ずっと待ってたんだ大目に見てほしいな」氷の中から姿を現わす美少年が楽しそうに言う。

「僕の名前はフラム・ルドベギア。以後、お見知りおきを」

そう言って一礼すると、再度フラムは攻撃姿勢をとり……

っ！な、んで」イングルが胸に手を当てて崩れ落ちる。
信じられない、という顔で。

「うが……」背骨が見えるほど切り取られる肉。
そんな攻撃を受けながらも、レミは蓮華から離れない。
もしかしたら、そんな力に残っていないのかもしれないが。

「驚いた？でも、君達の中にも使い手はいるだろう？静槍龍の使い手は」

全てが一瞬のこと。

一瞬のうちにフラムは太陽の光壁を赤く染めあげた。
イングルとレミの血という絵の具で。

静槍流で2人に大きなダメージを食らわしたのだ。

「僕の考えはあっていたようだ……君達のような裏の存在は、やはり存在していても価値は無い」そう言ってフラムは蓮華を視界に入れる。

光の存在と言われる、もうひとりの伊里。

その顔はぐったりしているだけで、何も身体に異常は無い。

「いつまでもつだろう……光は生き残れるのかな」そう言つて蓮華に近づいた時、目の前を炎がマツハの速さで通過した。
よく見ると、それは炎の鎖。

イングルでも、レミからの攻撃でもない、第三者の攻撃。
覚えのある、リーナスの持ち主。

「そんなこと、答えは決まってる……考えるだけ無駄だと思わないか？」フラムは声のする右方向に顔だけ向ける。

「光が負けるという事実かい？ディック・クローバー」
フラムの目、そして口調はいやに挑戦的だった。

「いや、闇が負けると言う真実さ。フラム・ルドベキア」

フラムの瞳にディックが映る。

「……プリメット裏通りの英雄も骨抜きになるものだね」「俺は英雄になった覚えは無い。それに俺達は考え方が同じだったはずだ」

ガキン！！！！

十字架と逆十字架がぶつかり合う音。

一ヶ所から動かない2人。十字架と逆十字架はピクリとも動かない。「相変わらず、君の考えていることは手にとるようにわかるね」

フラムが微笑しながらディックに告げる。

「お互いさまだ……100年前の親友、フラム・ルドベキア」言うなり、2人は弾けるように後ろに飛ぶ。

この時、ディックの口元がわずかに緩むのを見たフラム。

脳裏に不吉な予感がよぎる。

そして、それは正しかった。

「『豪風』！！」

突如、フラムの耳に聞こえた声。

「……しまっ！！」

予想もしていなかった風に吹き飛ばされるフラム。

彼の瞳に映ったのは、フラムに負けなくらいの美少年と美少女。

「おっと。行かせはしないぜ？フラム」

フラムが追いかけようとするが、ディックが行く手を遮る。

十字架を正眼に構え、いつでも攻撃できる姿勢だった。

「君だけがここに来たのかと思ったよ」「そのつもりだったんだが…イングル達のリーナスの異変に気がついてな」不敵に笑うディック。

「俺が強くて、全部の難関はクリアできそうにもないからな」

「つまり、救助に向かったのか。花天使達は」

呆れたと言う感じで声に出すフラム。

「……お前の花を正しい方向に導いてやるよ……『正義』という花言葉通りに」

グワキイイン！！！！

「僕がしていることが『正義』だ！！やれるものなら、やってみればいい！」

フラムの逆十字架から『紅炎』が放たれる。

「そうくると、思ったぜ！」

対するディックも紅炎で迎え撃つ。

炎VS炎の空中対決が切つておとされた。

「ジル、大丈夫だね？」

「わからない。ただ、楓伊里が闇に生まれし花達と契約した以上、俺達は急がなくちゃいけないってのは確実だな」

セラフィンの問いに重い言葉を返すジル。

クリス達からの交信が途絶えた後、

全力を尽くして何が起きたかを正確に読んだジル。

彼を通して、全てを把握した花天使達は役割分担を決め、思い思いに行動を開始した。

「楓伊里と崎原蓮華は、ふたりでひとり。

誰もが持っている心の闇と光が分裂した人間。

楓伊里が人間の心を差し出したなら、当然、崎原蓮華にも何らかの

症状がでてくるはずだ。

崎原蓮華は楓伊里の片割れなんだから」

セラフィンが瞼を伏せながら小さく呟く。

「伊里も蓮華さんも2人でひとりの人間。伊里も完全な花天使じゃない。」

源の伊里対策だけの問題じゃなくなっちゃってわけか……で

も、私達は人間を殺しては……いけない」楓伊里は、花天使の力を得ただけで、人間に変わりない。

そして、対の存在といってもいい蓮華にも何らかの影響があるはずだ。

闇と光のどちらが勝ち、どんな結末が待っているかはこの時点では分からない。

「とにかく、緑ヶ丘大学に急ごう」

ジルの言葉にセラフィンは頷くしかできなかった。

「ねえ、いつまで死んだ振りしてるつもり？」

ティアラ・ジプソフィラ、クリス・サンフラワー」

冷酷な声が2人の耳に聞こえてきた。

しかし、ティアラもクリスも動く気配がしない。

伊里はフムと考えて、楽しそうに2人に告げる。

「ソニカ・アイリスが爆弾と一緒に過ごしてるって知らないんだ」

キャハハと笑う伊里。

その笑い声にも感情はこめられていない。

「キャハハ！キャハハッハハハハ！！」

伊里は笑う。ぜんまいを巻いたように、機械的に。

「普通のじゃないよ？後1回の地震の衝撃でドッガン！！キャハハハ！」

何故、伊里は後1回といったのか。

それは2回目の衝撃が突き上げるように来るから

ガタガタ……ガタガタガタ………ドツガ　　ン！！
！！& nbsp; 天井が落ちてくる。床の割れ目が広が
り、深くなっていく。伊里の笑い声が響き続ける。

「信じられないな。俺とセラ以外に静槍流の使い手がいたなんて」
セラフィン特製の傷薬を丁寧に塗るハンス・A・ポインセチア。そ
して対の存在、リリー。

蓮華は気を失っているだけなのでソファに寝かしている。

「実際に見た俺達がいるんだから、疑うなよ」

イングルが口を尖らせて訴える。

「見たというより、私達は被害にあってるの。日本語を正しく使
いなさい」

レミがイングルを馬鹿にしながら話す。

「てめーの言うことは、毎回毎回腹が立つ」

「単細胞のアンタに言われたくないわね」

ああいえばこういう。こういえば、ああいう。

「…………ティアラとクリスの関係にそっくりだよな」わざと多めに
傷薬を塗ってやるハンス。

もつと正確に言う『わざと多めに傷薬を傷口に注ぎこむ』。

「……………x……………」焼けるような痛みが傷口を襲う。

出したい声を出せないイングル。

床の上で死ぬ直前のゴキブリみたいな格好で手足をばたつかせる。

「あーごめん。間違えて注ぎ込んだ。あ、毒薬45%入りだ、これ」
あっけらかんというハンス。

口から泡を吹いているイングルを尻目に思うことはただひとつ。

『これで静かになる……………』

「『紅い台風』……」

フラムの逆十字架によって彼の周りの風に紅い色がついていき、

文字通り『台風』と化す。

ただの台風ではなく、炎の台風として。

「『紅つめ草の導』……」

ディックが巨大な紅つめ草を無数に宙に広げる。

そして、紅つめ草が自然に燃え出していく。少しずつ勢いを増して

「どうやら、互いに思いは同じようだな」

「ああ、これ以外で攻撃する気はね　よ」フラムの周りから次々と作られる『紅い台風』。

そして2人の間を隔てている『紅つめ草の導』。

どちらも『炎』のリーナスで作り出す技。

「　次は『紅乱剣』のようだね」「そーゆーお前は『紅月剣』だろ？」

この台詞をはいたときには、2人は怪我をしていた。

笑いながら、台詞をはきながら……2人は同時攻撃。あまりにも早い同時攻撃だった。

「別に『骨抜き』になったわけじゃないようだね。

この威力といい、速さ、正確さ……まさに100年前の君だ」フラムの右わき腹から流れ出る緑の血が、地上へと落ちていく。

紅月剣は、文字通り『赤い月のような剣』。炎のリーナスで造られた剣。

長さは使い手のリーナスによって毎回変わる。

現在の長さは1mとやや短いが三日月のように滑らかに反っている刃には赤い血がついていた。

ただでさえ、紅い剣がよりいっそう赤くなる。

「そう言うお前も……100年前とかわからないぜ、フラム」燃えている紅乱剣を持つ右手が妙に下がっている。

「左手で、紅乱剣を打つきかい？ディック」

紅月剣を肩に乗せながら静かに問うフラム。

フラムは紅月剣でディックの右肩を切り落とそうとしたのだ。

「……ここまで下がってたら、そうするしかないだろう?」
ブチッ!!

自らの紅乱剣で利き腕を切り落とすディック。

「お前と張り合うには、これくらいしかしないとな」

紅乱剣を左手に持ち替えながらディックは言う。

「
負けても、僕のせいにしないようにね」「お前こそな。100年前に死んだはずの亡霊フラム」
ディックの顔に微笑が浮かぶ。

「相変わらずな奴だよ、君は」

「お互いさまだ」

右腕を失ったディック、そして右わき腹をざっくり切られているフラム。

2人の間で火花が散った。燃え盛る炎中で。

その中を通るのは、緑の液体と赤い液体だけ。

「お前の花言葉は『正義』！今のお前には合わない言葉だ」
ディックが浮上する。

「『紅乱剣』!!!」

左手で紅乱剣を打ち出すディック。

フラムをまっぴたつにする一撃だった。

「はあっ!!」

勢いよく瓦礫から這い出し、すぐさま伊里に踵落しをくらわすティアラ。

「どういうこと?!ソニカをどこにやったの?!」

踵落しをくらわすと瞬時に間合いを詰め、伊里の背骨を肘打ちして足を払う。

バランスを崩した伊里は仰向けに倒れていく。

ドスッ！！

伊里の床に倒れるスピードが速くなる。
痛みも激しくなる。

その原因はクリスだった。

足の裏で踏み倒し、今も尚、足は離さず伊里の腹を力強く踏み台にしている。

「……たあ！何すんのよ！！」「それはこっちの台詞だ。ソニカの居場所、教えるよ」

伊里の罵声を冷たく突き放すクリス。

瓦礫で頭を切ったのだろう。

伊里の後頭部辺りから血がじわじわと出てきている。

「おい！教えるよ！！アイツはどこにいる？！」

「……天国か地獄かじゃない？最も地獄の可能性のほうが強いけど」
伊里がまた笑い出す。

キヤハハ！キヤハハハハハハ！

キヤハハハハハハ！キヤハハハハハハキヤハハハハハハ！！！

止まらない笑い声。

「狂ってる」

その眩きと同時にクリスの身体が素早く動いた。

「ぶっ殺す！！！」

「駄目！！！」

クリスの手には十字架が握られていた。

十字架の角度から推測するとクリスは目を狙っているらしい。

ティアラは懇親の力をこめてクリスの動きを止めた。

「離せつ！！！」

「だめ！あたし達は『人間を殺してはいけない』……わかってるで

しよ
「離したら、クリスは破ってしまう。花天使としての誇りを。」

「仲がいいことね……ひとつだけ教えてあげるわ次の地震は7分後……フフ、キャハハハ！まあ、頑張ればあ？」そう言って伊里はリバース・クロスに触り、姿を消した。
頭から血を流しながら。

それでも彼女の顔から笑みが途絶えることは無かった。
最後まで、笑っていた。

「イングルとレミの戦闘能力は、かなり長けてるはずよ？攻撃に關してだけ」

季節館のリビングでリリーがハンスに言う。

静槍流を使われたとしても、この2人がここまでやられるとは見たことが無い。

その答えはひとつし考えられない。それは、リリーも分かっているはず。

それでも、言葉にしたのは不安を隠しきれないからだろう。

気絶しているイングルとレミの寝顔を見ながら小さくため息をつくハンス。

「何を意味しているか、わかってるだろ？リリー」

口にしたくない言葉をハンスは、あえて口にした。

思ったとおり、リリーは首を縦に振る。

「何で俺達は、性別が決まらないんだろうね……何で、いつかは消えなくてはならないんだろう」ハンスの呟きは悲しげだった。

イングルとレミを見る2人。

「この2人の運命は決定しているのかもな」

リリーはもう一度、首を縦に振る。

「先程の言葉を撤回するよ。」

やはり君は骨抜きになったようだ。残念なことだね」
頭のとっぺんから、真つ二つにしたはずのフラムが、
何事もなかったように紅乱剣をディックに投げ返す。
それを無言で受け取るディック。

「フラム……お前何で」「さて、決着をつけようか！」
思考停止中のディックに紅月剣を手にしたフラムが現れる。

ガギン！！

紅月剣をなんとか紅乱剣で受け止めるディック。

「へえ、まだ抵抗できるのか……でも、見苦しいよ?」「悪いが、
負ける気さらさらないからな。何とでも言え」

口調は強気だが、ディックは内心かなり焦っていた。

利き腕の右腕が無い今、フラムをクレストすることはまず不可能だ
し、

その以前に、紅月剣から逃れることなんてできやしない。

フラムの紅月剣からは。

硬直状態が続く2人。が、数秒後に動きがあった。

バシユウツ！！

フラムが吹っ飛んだのだ。

己の意思で吹っ飛んで、紅月剣を振り落とす。

「『紅竜刃』!!」

紅月剣から紅い竜が現れ、真つ直ぐにディックに向かってくる。

「な!？」

ディックが地上へと向かっていく。

己の意思に反して、血を流しながら落ちていく

& a m p .

n b s p ; * * * * 「…………馬鹿力」「てめーが離さねーからだろーが」

伊里が消えた直後も、ティアラはクリスを止めるために羽交い絞めし続け、

クリスがティアラの腕をひっぱ返そうと試みてた七分後。

ようやく2人は離れたが。

「さつき地震起きたよね」すでに形を無くした緑ヶ丘大学の瓦礫の上にティアラが座り込む。

「あれが地震じゃなくてなんだ？ゴラの足音か？」ティアラを一発蹴り飛ばしてから、ドカツと背中合わせに座るクリス。

彼等の目に映る現実はあまりにも悲惨だった。

大学の『大』の字もつかない…………つけられない瓦礫の山。運動場も割れ目がひどく、まるで崖のような深さのひび割れ。

立派に立っていた木々も見事に折れていて、

中には根っこから倒れているのも見る事が出来る。

伊里が告げた7分後。本当に恐ろしい地震が起きた。

いきなり下から突き上げるような床を押す音。

その直後は、左右の大きな揺れが生じたのだ。

流石に、げんきんな2人でも硬直してしまい、どこかしらに怪我を負っていた。

「…………おい、それ以上頭悪くすんなよ？」「それ以上、顔に傷つけない方がいいわよ？恐いの通り越すから」

背中合わせで仲良く据わっている奴等が言う台詞ではない。

ティアラは後頭部から出血していて、クリスは左の額から血を流していた。

普通なら、倒れているところなのだが…………本当にげんきんな2人だ。

「クリスってさあ、言葉が悪いから素直になれないんだよね」

「てか、クリスにそんな器用なこと出来ると思うか？俺、出来ない方に1万円」

空から声が聞こえてきた。

「俺も出来ない方に20万」

聞きなれた声。

「私は絶対無理に60万円！！ってこれ賭けにならないよ？」

聞きなれすぎた声の上から雨のように降ってくる。

「6月の梅雨が真上から降ってきた……」ティアラがげんなりと呟いた。

「あのな……セラ、ソニカ、ジル。どうしてそういうこと」クリスがこめかみを抑えながら、仲間に食って掛かるうとした時。

「ソニカが生きてる……??」呆然とするクリス。

確かにティアラとクリスの目の前には、
ソニカ・アイリスを名乗る都遊の姿があった。特別怪我はなさそう
だ。

「早く助けに来いよな。ま、当てにしてなかったけど」

スウツと降りてくるソニカ。続いてセラフィン、ジルが瓦礫の山に足をつける。

「ティアラとクリスじゃ、来たとしても死んでたと思うし」

本当の事をサラリというソニカを見て脱力するクリス。

「あーあーそだろーとも。よおおおおおく分かってますとも」

「まあまあ、クリス。本当のことだから我慢しなよ」

『『火に油』ってこのことだよなあ』そっぽを向きながらジルが心
の中で呟く。

「お前等……言わせておけば」四つ角マークがグルグルと周りを駆け巡っているクリス。

「で?どうやって助けたんだ?」

「ディック!!」クリスとティアラの声が重なる。全く違

言葉、そして、声色。

「ティアラ？私達と一緒にディックはいない。ここにもいないし……！！！」セラフィンはここで何もいえなくなった。

セラフィンだけじゃない。ここにいる全員が理解した。

「おい……ディックのリーナス……感じる事が出来る、か？」ジルが全員に問う。

念のリーナスを得意とする彼でも感じる事が出来ないのだ。

彼等は何もいえなかった。

「兄さ………ディック、どこ！！」壊れたように泣き叫ぶティアラをセラフィンは抱きしめる。

「……まだ、決まったわけじゃないよ、ティアラ」瓦礫の上で泣き叫ぶ姿、それを抱きしめる姿……うつむいた姿。これを一部始終しっかりと傍観していた姿があった。

そして、その姿の下には、ディック・クローバーの姿が横たわっている。

「君の本来の居場所は、あそこではないよ。いや、あそこにはないさ、帰ろう僕達の居場所に」

姿は静かに消えた。

何事も無かったように風が吹く。木々がなびく……

ディックの右腕を残して

*****「そうか。俺達も気になったんだ……ついさっき気がついた」ハンスが声を押し殺しながら小さく答える。

重い沈黙がリビングを支配する。

花天使達の頭をよぎる言葉は、ひとつだけ。

“ディック・クローバーの死”

信じたくないが、何も見つからないし、あのディックのリーナスを感じない以上、この答えしかない。

「ねえ……ソニカはどこにいたの？」唐突に尋ねたのは、ティアラ・ジブソフィラ。

目はまだ腫れていて、声もかれている。

気がかりなのに、答えをいち早く知りたいはずなのに彼女は自ら話題を変えた。

「あ　それがさ」

ダッダッダッダッ！！

「大変大変大変！！」

ソニカが口を開くと、けたたましい足音を立てながら、

リリーがリビングにかけ込んできた。彼女がここまで慌てるのは珍しい。

「どうかしたか？」

ハンスが問うと、リリーは答えた。

「れ、蓮華さ、土気色……ひどくて……ぎゃ、逆十字架が額に……」ここまで聞いた彼等は、蓮華の寝ている部屋に向かう。

「あ！待って！！ティアラ、クリス……行つては、駄目　「リリーの叫びは届かなかった。

例え聞こえていても、花天使達は足をとめるような集団ではないが。

「　なんで、消えなきゃ、いけないの……？」リビングに取り残されたリリーは独り静かに涙を流した。

「ふーん……これが弱点なわけー？」少女がしげしげと、少年を見つめる。

闇の中で、少女は触ったり蹴ったりと、少年を観察する。

「100%そうだ。どこかの誰かならともかく、僕が読み間違えるわけが無い」

「ちよつと待て。それはどういう意味だ？」

「僕は『どこかの誰か』といっただけ」

ぐうの音も出させない威厳のある声は背の高い美少年。

絡みかかった小さな少年も、何もいえなかった。

「なあんか、つまらない男ね……お姉さまの好みを疑うわ」少女は、大げさに天を仰ぐ。

「でも、これで確実におびき寄せることが可能となった。違うかな？伊里」

少女の名は楓伊里。

そして、美少年はフラム・ルドベキア。

絡んだ少年はルーリ・アキレラ。

「そうね。フラム。花天使達を全滅させることが出来る。

お姉さまを死に追いやった奴等に……フッフ、キャハハハハキャハ！キャハハハハ！」伊里は笑う。笑い続ける。

そんな彼女を見ながら、フラムは後ろに掲げられている肖像画を見た。

「遺伝だね、君と顔がそっくりだ」肖像画に描かれている少女に問い掛けるフラム。

が、すぐに彼は向き直り、ひざまずく。

「さて、次はどうしますか？我等が主、シーナ・H・ハーブの血を引く楓伊里」

NO・4

死（後書き）

字体、本当に変えたいところがあります。
擬音語は、特に。

まあ、字体だけに頼ってはいけないんですけど……

またお会いできることを祈りつつ……

R
u
e

NO・5 定めと意志と（前書き）

自分の意志で、あなたは行動しますか？

NO・5 定めと意志と

「全てが、あの7分前が鍵」

信じられない、そんな顔をしながらティアラが呟く。

目は最大限に開かれ、乾いた声で彼女は呟いた。

ティアラだけじゃない、季節館リビングにいる全員がそう思っている。

その証拠に、皆の顔は青ざめていた。

突っ立ったままの奴、椅子に座ってる奴、寝転んでいる奴。

皆、表情はさえない。

「今考えると、俺は……布石だったんだな」ソニカが唐突に口にする。椅子に座って、頬づえをついたまま。

どこを見て彼は呟いたのだろうか。

その目には何が映っているのだろうか。

「じゃないと話が出来すぎてる」

「救出できると確実に、そして的確に読んだ行動……敵ながら天晴れ」立ったまま腕組するセラフィンとソファに座るジルの言葉。

「俺達は、あいつ等の手の平の上で踊らされていたんだ！」

悔しそうにクリスが大声を出し、拳で床を叩き割る。

彼等、花天使達の心を縛り付けている鎖の名は、『3回目の地震』。

地震が起こる7分前

「あ　　！！あいつ等おせーし！」

自由に動けないソニカは動かせる口を動かして、校舎にいるはずの仲間、ティアラとクリスに対して悪態をつくにしていた。

『リーナスを辿れば、嫌でもここがわかるだろうに』

ここまで考えた時、彼は気づいた。
重大な過ちに。

「あいつ等がここに来て、俺が死ぬ確率の方が高いじゃん！」「
クリスとティアラ。

2人がここに来たら『言い争いで終わる』気がする。というか、確
実に。

「『そして、俺は看夏の元へ逝きました』……なんて洒落になんね
え」

確かに洒落にならない。現実になる確率高すぎて。

看夏とはソニカの亡き妹の名前。
みなつ

ガチャガチャと、鎖を解こうとするソニカ。

少しでも、現実から逃れるために、今更自力で抜け出すことを思い
つく。

ガチャガチャ……ガチャガチャガチャ！！次第にソニカの力は強く
なる。

【後、7分になりました残り時間は7分になりました】

「げっ！これ、振動が強い程、時間がなくなってく仕組みかよ？！」
機械音が告げるタイムリミット。

ソニカは、もうどうしていいかわからなくなった。

目が慣れたとはいえ、どんな状態で爆弾が仕掛けられているかわか
らない。

下手すれば確実に死がまっている。

「……どうすりゃいいんだよ」ソニカが苛立ちながら言う。

「あーもう！あんの2人なんでこねーんだ?!」

怒鳴りながら何気なく天井を見て叫ぶソニカ。

その時だった。

……パカッ「は？」

間抜けな音を聞き、反射的にマヌケな声を出すソニカは、次の瞬間目をつぶった。

天井が真四角に切られ、そこから光が入ってくる。

闇が光によって姿を消していく……「みーっけ！ソニカ」まるでカクレンボで鬼が言うような口調をするセラフィンが降りてくる。

「ティアラとクリスはこれない。今助ける！」

続いて降りてきたのはジルだった。

光の中から聞こえる2つの声は素早く爆弾解除にとりかかる。

「静槍流『静切り』（じょうぎり）か。セラ」天井を見ながらセラフィンに問う。

「そだよー？ちよつと失敗したけどねー。ジル、アラクク33パス」

ソニカの鎖を一本一本、見ながら相手を見ずに手を差し出す。

「……セラ。あれ切らしたから新しく作ってくれて頼んどいたはず」「じゃあ切れないや」

のほほんというセラフィン。

「クレットもないしな……諦めるかソニカ」あっけらかんとジルが恐ろしいことを言い出す。

この2人、言ったことは『本気でやる』という性格だ。

ある意味、ティアラとクリスより性質が悪いのかもしれない。

ソニカが口を開きかけた時、

「でもまあ、方法が無いわけでもないよ。やってみる？」

ニツコリしながら、セラフィンが問い掛ける。

「ま、運試しになるけどな」

ジルの言葉、セラフィンの笑顔に恐怖を感じずに入られないソニカ。

「何するつもりだ？おい」

【残り時間30秒です】

親切に爆弾さんが教えてくれる。

「私達の運と、タイミングがあればOKだよ」

落ち着いたセラフィンが、落ち着いて言ってくれる。

「だから、どうやって！」

「まあ、落ち着け。変なところ切れっぞ？」

「はい?!」

ジルの言葉の意味が分からない。というか、考えたくない。

【15秒前14・13……】

「動かないでね」

「さあ、バクチの始まりだ」

2人の目つきが声が変わってく。いや、空気までもが違っている。
ものすごく集中していた。

「5秒前になつたらやるからな」

ジルの有無を言わせない声が耳に残る。

【8・7・6】

セラフィンの腕が動く。目は眠っているように閉じられたまま。

【5】

「静槍流……」 静かな声が、倉庫に響く。

【4】

ジルが十字架を取り出す。

【3】

ジルが爆弾に近づきながら十字架を空へ向ける。

【2】

十字架から紫の光が広がる。

【1】

「真槍！！（しんそう）」

「『魔術師の壁』！！」

2人の声が同時に響く。

セラフィンの目は見開かれ、ソニカの鎖が次々と砕け散っていく。
目にもとまらぬ速さで。

【0】

ズドッゴ

ン！！！！

「『空間移動』！！」

ジルの造った壁が円球になり瞬時に浮上。

地震と爆弾から3人は無事に逃れることが出来た。

「なんてことが起きてる時に、こっちはこっちで動きがあったんだ
よな」

ソニカが話し終わると視線をハンスに移した。

「ああ、あの地震の後すぐに、蓮華さんの体温が急激に下がって、
リリーがつきつきりで看病することに決まったんだ」

ハンスの声が小さくなっていく。

「同時に寝ていたイングルとレミが、消えかかってきた……だろ？」
クリスがハンスの後を継ぐ。

蓮華の体温は急激に下がり同時に、イングルとレミの姿が透けてきた。
た。

初めは目の錯覚だと思い、気にせず蓮華の看病をリリーに任せ、

リビングに戻ってきたハンス。

しかし、考えは甘かった。

イングル、レミの姿は透けていく一方。

蓮華はよくなるどころか、土気色の肌、額に逆十字架が見え出した。ジルが3人の時間を止めたが、蓮華だけは止まらない。

いまや、逆十字架ははっきりと見える。

「ソニカを殺そうとしたのも、緑ヶ丘大学を襲ったのも布石。

本当の狙いは蓮華さんだったんだ」

セラフィンが悔しそうに歯ざしりする。

「蓮華さんと伊里は、もとは『ひとり』の人間……『光』と『闇』の存在。離れることの出来ぬ存在」「その存在の『闇』……伊里が強い力をつけていると言う証拠は、蓮華さんの肌を見れば分かる」
ティアラに継ぎ、ハンスが言いながらジルを見る。

「ああ。伊里が蓮華さんからエネルギーを吸い取ってる。『光』が『闇』に負けかけてるんだ……蓮華さんの逆十字架が額から実体化した時……俺達は……俺達に何ができる？伊里と蓮華さんをクレストしろってか？！」

ジルの苦痛の叫びは花天使達の誰もが思っていること。

花天使は『人間』をクレストしてはならない。

どんな理由があろうとも。

彼等は引き受けるのみ。罪を引き受けるだけ。

なのに、今回は源が『人間』であり、『闇』の心の主は伊里。

『光』の心をもつ、蓮華だが彼女もクレストしなければならない。
蓮華と伊里。

2人で1人の人間。光だろうが闇だろうが、この場合関係ない。

「あつちが思うままに私達は動かされてた……ってティアラ？どこ行くの？」セラフィンの声が届いていないのかティアラは勢いよく玄関を開ける。

「立ちすくむティアラ。」

後姿だけしか見えない。

が、彼女が本気モードになりかけていることが分かった。
リーナスの上昇が早い。

「てい、ティアラ？」

恐る恐るセラフィンが口を開く。

「蓮華さんだけじゃないよ」

低い声でティアラはしゃべりながらしゃがみこむ。

「あいつ等の目的は、蓮華さんだけじゃない。あたし等をおびき出すためでもあるよ」

立ち上がるティアラ。

何かを抱えているようだが、振りかえようとしない。

直立不動で動かない。

「何を根拠に言えるんだ？大体、ここまでわかってんのにどうして俺達が、のこの行かなきゃ」

「ディックが捕らえられていても、その台詞言える？」

クリスの言葉に振り返るティアラ。

その手にはディックの右腕が抱えられていた。

「辿ってみた……この腕の記憶、3回目の地震を見届けてる」血まみれの右腕を抱きしめながら、機械のように話すティアラ。

「伊里達は『3回目の地震』に全ての標準を合わせてたんだよ。

あたし等は、動かされただけ。もう、後には引けない」

ティアラの目が青色を帯びていく。

いや、青い炎を宿した目、というべきだろうか。

「売られた喧嘩、買わせて貰うわ……カスミソウより生まれし花天使として」十字架を取り出すティアラ。

「そして、はつきりさせる。あたしとイングル。どちらが消えるのかも」

「来たな、この時が」夜空をばんやりと見ながら、ケインが元氣なく口にする。

「なんかあつという間というか……遅かったというか」「微妙だね」ケインに続き、リリーとクルルが同意を示す。

時刻は1時を回っている。

勿論、真夜中のだ。

ケイン達の他にいるとすれば、イングル、レミ、蓮華の眠っている姿。

「いつか来ると分かってた、だけど」

「やっぱり、嫌だよね。消えたくない……消えたくないよ」クルルとリリーが肩を震わせる。

「泣いても、仕方ないことだ……悔しいけど。十字架背負う花天使の超えなくちゃならない壁、なんだよ」ケインが立ち上がり窓の側に移動する。

今夜は満月。

恐ろしいほどの輝きを、いろんなところに差し出している。

おしみなく、照らし続けていく。

「花天使の性別は、突然決まる。

リーナスが高い方が本物の『十字架背負う花天使』の一員。そして」ケインが再度口を開いた後、クルルが悲しげに続きを声に出す。

「リーナスが低かった方……つまり、『敗者』は消えなければならぬ。逃れることが出来ない、敗者の運命」「今の段階で、私達はハンス達は『表の存在』に完全に負けてる。その証拠がイングルとレミの現在の姿」

クルルの言葉をリリーがポツリと呟く。

月の光が、彼女の涙を照らし出す。

「イングル、レミ。先に逝っちゃいだよ……」リリーが透けきろうとしている……もとい、先に逝こうとしている2人に小さな

声で訴える。「とにかく、今回の件が済めば、わかることだ」
ケインが2人に振り向く。

表情はわからないが彼も悲しんでいることは2人に伝わった。

「運命には、逆らえない」

月が隠れ、彼等の涙が輝きを失った。

「どこだ、ここ」暗い部屋に寝かされていたディックが目を開きます。

目をこするうと右手を動かそうとした、が。

「あー……そうか。俺、自分でぶった切ったつけ」今更、痛みなど
は感じない。

血も、止まっている。

命もとりとめたらしい。

だから喜ばなきゃいけないのかもしれないが。

「ここが季節館だったら嬉しかったんだけどな、フラム」
起用に片手だけで起き上がるディック。

ついでにランプに炎をとまず。

そこに浮かびあがった人物は、フラム・ルドベキア。

100年前に死んだはずのディックの友の姿。

「僕は、花言葉通り『正義』に反してなどいない。

それより、イングル・ジプソフィラが逝きかけてるぜ？君の『血の
つながりの無い』弟が」

ズゴッ！！

フラムの言葉に素早く反応し、体当たりを食らわすディック。
右手が無いのが今になって、苛つかせる。

「何したんだよ、フラム」「僕は手を下してない。忘れて
ないか？『対の存在の壁』のことを」

ディックの血走っていた目が、見開かれた。

左手でフラムを殴ろうとしていた態勢で固まる。

「お察しの通り、イングル・ジプソフィラは『敗者』になるのさ。

そして、勝者は『ティアラ・ジプソフィラ』……君にとつてはいい結果になったんじゃないか」笑みをうかべながら、フラムは立ち上がる。

ポンポンとほこりを叩きながら

「ねえ、『シーナ・クロバー』を忘れてないよね？」

意味ありげな笑みをみせ、フラムが歩きかける。

「……俺の『対の存在』だろうが。そして俺がクレストした。忘れるはずが」「じゃあ、会いに行かないかい？彼女に」手を差し伸べながら、フラムが静かに言った。

「ああ、もう！嫌がらせかつー！」

ドスッ

ティアラの拳が男の腹に食い込む。

背後からの殺気を感じ取り踵落しを食らわし、ティアラが2人の男に十字架を向ける。

「我、ティアラ・ジプソフィラ。汝等の罪、引き受ける！クレスト！」

男達の姿があつという間に消えていく。

「ね？やっぱり、これがあつたでしょ？」

セラフィンが、2つの奇妙な紙切れを特殊な袋に入れながらピラピラと見せる。

「この紙切れがリバース・クロスの子供とは……未だに信じられない」ティアラがそう発言すると

「ねえ、ティアラ。私、新しく作った薬品が」「さて、他には

いないのかなー？」

セラフィンの脅しを聞き流し、ティアラは再度、仕事に移った。

「これを見てくれ。蓮華さんの皮膚の成分を形だよ。」

ジルがそう言うときよく見えるように、光を当てて真ん中に置く。

「逆十字架……？」「リバース・クロス?!」

ハンスとクリスの声が重なる。

「どちらでも同じことだよ。蓮華さんのエネルギーは『これ』が奪
つてる。」

蓮華さんは、この逆十字架にむしばまれてるんだよ」

セラフィンの顔色が悪い。

きつと夜中、ひとり調べていたに違いない。

セラフィンなら、蓮華の皮膚をとること何ていつでも出来たことだ。

たとえ、何十人で蓮華の側に押しかけても、彼女は出来る。

だからこそ、彼女の薬は利くのだろう。

「ひとつひとは子供だけど、束になったら厄介なことになるの」

蓮華のことを言いたいのだろう。

口にはしなくても、全員にセラフィンの思いが伝わる。

「俺がこの成分を分析したところ、面倒なことになった事が
わかった」ジルは、一度言葉を切つて続けた。

「街の人々も、むしばまれてる。見つけ次第、クレストだ」

「！おい、俺達は………これ以上、被害を大きくさせる
気か？」ジルとクリスの言葉が交錯する。

彼等にとって、人間をクレストすることは重罪だ。

だが、ジルはそれを承知で判断を下した。

苦汁の想いで。

「俺達は、源をクレストするために……地上の人々に平和に暮らし
て貰うために、ここにいます」

「シーナは、俺がクレストした！なのに……なににお前は何でアイツと同じ顔をしてるんだ？楓伊里！！」ディックは伊里の胸倉を掴み睨みつける。

自分の対の存在と同じ顔、そして……リーナスまで似ている。何かの間違いであってくれたら、どんなに嬉しいだろう。

「お姉さまは、確かに貴方に殺されたわ……でも、私はお姉さまの血を継いでいる」伊里がディックの手を掴み取り、腹を蹴り飛ばす。「つてえ……」全身を打ったディックは思わず眉をひそめた。

片手がないと本当に不便だと心底思う。

「お前の姉は、蓮華さんだろーが」

苦痛に輪緒をゆがめ言うディックの腹にもう一発蹴りが入る。

「あいつが姉？キヤハハハ！本当にそう思ってるの？」

キヤハハハハ！アイツは姉なんかじゃない！別々に暮らし始めた時から、アタシはアイツの妹じゃないのさ！」

倒れているディックに屈みこみ伊里は、ゆっくり彼の耳に口を近づけ「あたしはねえ……シーナお姉さまの血を飲んだのよ……？」「シーナの血を……？どうやって！」痛みも忘れ、ディックは叫ぶ。飲めるはずが無い。

伊里とシーナの間交流があつたと思えない。

不可能としか、考えられない。

飲めたところで、飲んだからといって『シーナ』の血を上げるはずない。

「本当にそう思っているの？ディック・クローバー」

ディックの思考を読み取ったのだろう。

見事に会話が成り立っている。

「ねえ、ディック……『プレラ』を開発したのは、貴方よね？」この言葉にディックは声がでなかった。

「あいつは……シーナはプレラに残したのか？！お前を造るために！」ディックの額に汗が浮かぶ。

確かに開発したのはディック自身。

だが、危険性が予想以上に凄まじかったため、彼自身の手で封印したのだ。

彼しか知らない場所に。

彼だけが取り出せるところに。

「貴方にとつてシーナお姉さまは対の存在のはず……。だから、お姉さまにはお見通しだったのよ？ 貴方のことは、ね」クスクス笑うと伊里はディックの顎を強引に持ち上げ、話し続ける。

「私を『造る』？ 何を言つて？ 元々私は『ひとり』の人間……。『闇の心』を受け継いだ、人間」「もう、理解できただろう？ ディック。伊里がシーナの血を受け継いでいると言うことが。その影響は『光の心』を持つ者にも影響を与える」

伊里の後を継ぐフラム。

彼の表情は冷ややかなままだった。

「まあ、俺達がこの地上を新しくしてやるのを見てるんだな」

不意に横から声がして、ルーリ・アキレアが姿を現す。

「あんたら、十字架背負う花天使達は『人間を殺すこと』はどんなことがあつても『禁止』。それを破ることはできねえだろ」

ルーリが自信たつぷりに言い放つ。

「あ？ 何でだよ」

すぐさまディックが聞き返す。

「お前等は、とんでもない奴等を怒らせたんだ……。あいつ等はこの場所を突き止めるし、人間だろうがクレストするさ。つまり、楓伊里、崎原蓮華をクレストする覚悟は十分にあると思つぜ？」

根拠の無い発言だった。

ディックは現在の彼等の行動を知ること出来ないし、本当に彼等が『掟』を破るかも自信が無い。

でも、自分ならやるから、と言う理由で伊里に言つた。

はつたりだろうが、なんだろうが構わない。

彼は自分の思うままに行動するしか打つ手が無い。

「随分と余裕があるのね……。でも、運命には逆らえないということ

を覚えとくがいいわ」「悪いが、その台詞そっくりそのまま返してやるよ」

伊里とディックの間で火花が飛んだ。

ドゴツ!!!

伊里がディックのみぞおちを蹴り飛ばす。

「フラム。コイツをさっきの場所に。ルーリ、頼みたいことがあるんだけど」

伊里の目は無気味な色に輝いていた。

「かなりの人間をクレストしたね」

「セラ、そんな顔してたら、前に進めないよ？とりあえず、ご飯作って？」

神妙な顔をしているセラフィンに、のんきに要求する奴はただ1人。

「ティアアラ、少しは我慢できないのか？」見かねたソニカ・アイリスが頭を抱えながら問う。

「だって、ソニカ！考えても仕方ないじゃん？

あたし達は、もう大重罪を犯してる。それでも『この役目』ができるんだ。

できることは、出来る時にやらないと、後悔するよ」

ケロツという彼女も内心、穏やかではなかった。

本当は怖い。

この役目をいつまででき、自分はどうなるのだろう、と。

イングルは消えずに済むのか……いや、これは他の仲間にもいえること。「ね、セラ？何であたし達はどちらかしか生きることが出来ないんだろう」

「私は何で『対の存在』があるかというほうが不思議だよ」ティアアラとセラフィンは深いため息をついた。

ディックのこと、対の存在のこと。自分達の行いは正しいのかということ。

「対の存在ってさ……自分を磨くためにいるんじゃないのか？」ソニカがアツケラカンと発言する。

「……………行かなきゃ」1人の少女がベッドを抜け出す。

現在時刻、夜の12時12分。

外出時間には入らないと思われる時間帯。

少女を月が照らし続ける。

周りに人がいないのを確認して、季節館を去ろうとする足取りは夢遊病者といってよかった。

「早く、行かなきゃ……待ってる、待っている！」少女の額には逆十字架が、はつきりと浮かび上がっている。

「早く……きゃっ！」もう少しで出るというところで、少女の目の前に人影が飛び出してきた。

その人影も月は照らす 「こんな時間にどこに行くんですか？

崎原蓮華さん？『光の心』を持つ、『闇の心』の対の存在の貴女が」少女、蓮華の前に立ちふさがったのは、ジル・パーカリアだった。

NO・5 定めと意志と（後書き）

やっぱり都が捕まって、純歌と佳に探しに行かせれば面白かったかな……と思っている Rue です。

でも、それはそれで話がややこしくなるんですよ……

また、お会いできるのを祈りつつ……

Rue

NO・6 現在、過去、未来。 予言……？（前書き）

納得できないことがあったら、あなたはどうしますか？

闇の中へ足を運ぶものが近くにいたら、あなたはひきとめますか？

NO・6 現在、過去、未来。予言……？

今から100年前のプラメット裏通りにて
ガキイイイン！

紅剣がぶつかり合う音が、強風の中響き渡る。

「おい、ディック！腕が落ちたんじゃないか？」

長い髪が強風によって動かされる。

「フラムこそ、3秒ばかりスピードが遅いと思うけどな」
ニツと笑うディック。

強風が台風に変わる中でも、剣の響きは止まらない。

フラム・ルドベキアとディック・クローバーは当時、英雄といわれた2人組。

どちらかといえば、ディックの方が人気があり、

最強の英雄はディック・クローバーと誰もが口を揃えてたほど。

そんなディックが一時、薬品作りに熱中し、できたものがプレラ。

透明な円球で大きさも10円チョコほどで小さい。

この中に一滴でも生前のうちに血をとっておけば、何百年でも保存可能。

花はつきしど、天使に変わらない。

天使や悪魔といった生物は、人間の何十倍も生きることが出来るのだ。

死ぬ間際にで、再度、その者が血を飲めば、延命や蘇生が可能である。

これは裏通りで絶大な人気をよび、ディックの知名度は更に上がった。

「そこを、どいて……どいてよ！」

蓮華がボロボロの身体でジルに体当たりを食らわすが、

当然のように彼は簡単に攻撃を受け止める。

彼の花、タデの花言葉には『魔術師』という言葉もある。

ジル・パーシカリアは、まさにこの言葉通りの人物だ。

相手の思考を正確に読み取り、その対処法を確実にする者

「逆十字架が鮮明になりつつありますね。貴女は、闇に屈するので
すか？」

光が負けたらこの世はどうなると思います？」

優しく響く声に聞こえるだろうが、ジルの目は冷たい。

ジルが蓮華を解放する。

焦点の合っていない目でジルに抵抗していた蓮華が支えを失い、しり
もちをつく。

「

」

2人の間に冷気が漂い始める。

どちらとも、しゃべらない。しゃべることなんてないからだ。

彼が『魔術師』だからと言う理由だけではない。

最大の理由は

「これを、お忘れになっていますよ？」蓮華の手にクロスを握らせ
るジル。

次の瞬間、蓮華は本当に季節館を飛び出した。

そして、ジルはそれを見送った。

最大の理由は、蓮華がリバス・クロスの僕となっているから。

それを、蓮華は感じさせていたし、ジルも気がついた。

「伊里さんの所へいつても『光の心』を失わないで下さい」

ジルはそう呟くと自室へと姿を消した。

月明かりの下に、人影はもう見当たらない。

はあっはあっ……暗闇の中、ディックの息が乱れていた。汗もびっ
しりとかいて、気持ち悪い。

「なんつう夢を見るんだ、俺は……」

彼は100年前の自分の姿を夢に見ていた。

裏通りにいる頃犯した、自分の過ちとなった夢を。

「悔やんでも悔やみきれない……何で俺は」天井を暗闇の中見つめるディック。

「誰にでも、ひとつやふたつの過ちはあるよ」

「……俺の場合は気づくべきことだった」「でも僕は、君を恨んでない。自業自得だからね」

この言葉に、ようやく顔を左に向けるディック。

「着替え持ってきてくれたんなら、いい加減くれよ、フラム」
ため息をつきながらディックは、親友にそう言った。

100年前

「なあ、ディック。プレラに入った血を第三者が飲んだら、どうなるんだい？」

フラムの何気ない一言に、ディックは断言した。

『そんなことして、得は無い。だから、調べる必要など無い』と。

フラムはこの答えに納得がいかず、全く知らない者の血を飲んだ。自分自身の目で、確かめるために。

が、その瞬間、血相を変えたディックが飛び込んできたのだ。

『大変だ、フラム！』と言って。

「でも君の声は少し遅かった。

僕は僕ではなくなつて、3日後にあの世へと先に逝ってしまった……

…悪いなディック」

『ひとりにして……』とフラムは付け足した。しかし、それが逆にディックを苦しめた。

「お前に聞かれた時に調べなかったのが原因さ。」

俺は、お前が死んだのは俺のせいだと思い続けた。

1からやり直すために、裏通りを出たんだ…… お前と約束してただろ？」

悲しげな声でディックはフラムに問う。

フラムを見つけた時、ディックは答えを知っていた。

プレラに入れた血を第三者が飲むと、血が暴走を起こす、ということ。

その暴走が、『死ぬ』もしくは『クローン人間』となるということ。

クローン人間。

知つての通り、同じ遺伝子型を持つ、作られた存在。

『クローン人間』というのは伊里とシーナを例にとると……

『シーナ』がプレラに『血を入れる』そしてその血を『伊里』が飲む。

プレラに入った血を飲むことで、細胞などが変化してしまう。

結果。

『伊里』は細胞から顔立ちから『シーナのクローン』になったのだ。リーナスまでもが似ていたのは、これが原因だ。

「おい、フラム。何でお前ここに来たんだ？」

首を傾げるディック。そんなディックにフラムが耳元で答える。

「君のことはお見通し」

ここに来て、ディックは初めてフラムの笑顔を見た。

遠い昔の親友の笑顔。

「ジル……どこに行くか分かってたなら」

「何で、俺達呼ぶとか、後つけるとかしないわけ？」

ハンスとクリスが脱力しながらジルを問い詰める。

「俺がつけたところで居場所はわからないだろうよ。伊里は、簡単に攻略できる奴じゃない」

ひるまずビシッと言うジルの頭にビシイー！とハリセンが連打される。

「ティアラ……気持ち分かるけど。ハリセンはないだろ、ハリセンは……！」

特にお前のは痛いんだ……！」

涙声で訴えるジルは、まるでクリスのようだった。

「ひとつ聞いていい？」

無視して話を進めるティアラ。

「蓮華さんは、確かにクロスを握ったのね？」

彼女の声は落ち着いていた、不気味なほどに。

「ああ、握らせたけど、そのまま持つていった。

だから、俺等はその間に出来ることをすればいい」

ジルが十字架を取り出すと連鎖反応で、他の面々も十字架をとりだした。

刹那

「え……え……！」

「おい、なにが」

ティアラとクリスに異変が生じた。

十字架と共に。

ティアラは蒼い光に、クリスは黄色い光に包まれる。

その場で意識を失い、当然床に倒れこむ。

死んだかと思うほど、ピクリとも動かない……うめき声も聴こえな

い。

「脈も安定してるし、顔色も悪くない。原因がわからないよ。」

処置したいけれど、どんな処置をしていいのかさっぱりだ……」

2人の症状を素早く見たセラフィンの顔色が悪い。

助けたくても、助けることの出来ないことに苛立ちを覚えているのだ。

薬作りの天才として、とても歯がゆいに違いない。

「ジル、なんとかならないのか?!おい、ジル!」

ハンスが妹のセラフィンを引き離しながら賢明に呼びかけるが、とうの本人は目を見開き、一点から目を動かしていない。表情からすると相当驚いている。

「さま……キャロル・ヒソップさま?!」ジルのかすれた声で一同が、視線を辿る。

その先に見えたのは、花天使上幹部の『キャロル・ヒソップ』に間違いはない。

「はじめまして、というべきかな?私の名はキャロル・ヒソップ。ちょっとは話しておきたいことがあるのだけれど、いいかい?」

ニツコリ笑って彼は言う。

「ティアラ・ジプソフィラ、クリス・サンフラワーのことはまずおいてね」

ギイイイイ……

重い扉を蓮華は開けた。外も暗いが、中はもっと暗かった。足を一歩前に出す。

「あ、れ?ここは……どこ??」きょとんとした蓮華が足を慌てて戻す。

いつの間にかパジャマ姿で見知らぬところに来ていた事に気づく蓮華。

「なんか、記憶が途切れてるような……」本格的に思い出そうとした時、

【伊里さんの所へいっても『光の心』を失わないで下さい】

そう聞こえた。

ささやくような声で、蓮華の耳にジルの声が確かに聞こえた。

「そうだ、私は無理にここに来たんだ、伊里に呼ばれて」
蓮華の身体の、血が騒ぐ。

伊里と自分は、ふたりでひとりの人間。

だから、血が騒ぐ。

闇の心を持つ伊里の血が騒げば、光の心をもつ蓮華の血も同じように。

「それでも、私が正気に戻ったのは多分、ジルとクロスのおかげ」
逃げ出す際に、ジルが持たせたクロス。

静かに淡いピンクに輝く十字架と、持たせてくれたジルに感謝する
蓮華。

「ジルが本格的に止めなかったということとは……」

ダダダダダダ……ドッガラガッシャーーン……！！

凄まじい破壊音が季節館に響きわたる。

「……………」凍りつくジル達。言葉がでない。

内心ではかなり悪態をついているのだが……伏せておくことにしよう。

「いっつでえ　ん？誰だ？その人」

二階から転げ落ちたソニカがキャロル・ヒソップを指差してセラフィンに聞く。

全く悪意はなく、無邪気に聞いたソニカの口をセラフィンがつねった。

「ひいひゃい、でいだい（痛い、痛い）」

涙目で訴えるソニカに耳打ちするセラフィン。

「キャロル・ヒソップさま！十字架背負う花天使の上幹部！！貴方を『花天使』と認めた方よ！」

「！！！！！」

「セラフィン・カメリア、離して上げなさい。」

彼はまだ一度たりとも、プリメットに来たことがないし……

詳しく知る前に、私が認めたのだから……はじめまして、ソニカ・アイリス」

キャロルがにこりと笑う。

その笑顔に赤くなるソニカ。

『き、綺麗すぎる！！』

心臓がバクバクいつてる。

「は、初めましてっ！その節はどうもお世話になりましたっ」

「いやいや、君も大変だったねえ」

口を動かすことで精一杯のソニカ。

それを気にせず、やんわりと受け止めるキャロル。

そんな彼の笑顔を見て、ついソニカはいつてしまった。

「お名前の通り、美しい女性ですね…… キャロルさまは」

ソニカはジル、ハンス、セラフィンの総攻撃を受けることになる。

まあ、男の上官を『女』と言ったのだから失礼なのは失礼である。

キャロルが一番気にしている言葉だということもジル達は知っていた。

そして、笑顔を絶やさず、こめかみに青筋が立っているのも見逃さない。

「　　楽しい性格だね、ソニカ・アイリス。ところで、重要な話があつてここに転げ落ちてきたのでは？」依然として、にこにこしながら問うキャロル。

「例えば　　イングル・ジブソフィラとレミ・サンフラワーが一瞬のうちに姿をけたとか、ね」

「久しぶりね、蓮華」

「ええ、伊里」

暗闇の中に無数のランプが灯してある場所が連絵の目に入り、足を踏み入れる。

そこで、実妹……いや、『闇の心』を持つ伊里に会うことが出来た。伊里は蓮華を見るなり、冷たい視線で上から下まで観察する。

「光の心も容易く落ちるものねえ、蓮華」

満足そうに蓮華の額を見つめながら尋ねる伊里。

蓮華の額には、逆十字架が黒々と光っていた。

「じきにあなたの『リバー・クロス』も出来上がる。そうすれば、私達は無敵の力を手にすることが出来る」

赤い舌が伊里の口を舐め回す。

「クロスは弱い。貴女が持っていてもどうにもならなかった……」

血が貴女を呼び寄せたと言うのに」

蓮華の手からクロスをもぎ取るうとする伊里。

「……った……」

小さな声は蓮華ではなく伊里のもの。

ブシュウウウ……

右手が火傷した。クロスに触れた途端、炎にクロスは守られたのだ。蓮華は、どうもないらしい。

「こちらの手の中に落ちててもクロスはまだ力が残ってるってわけ？でも、いつまで持つかしらね」

キャッハハハ！キャハハハハハハ！！

伊里は突然笑い出す。

「光の心?! 笑わせてくれるわ。クロスは弱い! リバース・クロスは強い!」

伊里の言葉に何の反応も示さない蓮華。

今の蓮華は、自分の意思を持たない操り人形。

NO・6 現在、過去、未来。予言……？（後書き）

プレラの説明、これでわかったでしょうか。
ちよいと不安な Rue です。

実際にプレラみたいなものがあつたら、世の中はどんなになるでしょう。
では、又お会いできるのを祈りつつ……

Rue

NO・7 確信とこぼした言葉（前書き）

人は誰しも、自分の中にもうひとりいる……

それを、どう使い分けるかは、その人次第。

NO・7 確信とこぼした言葉

「……なんでご存知なのですか？」

がばつとソニカが顔を上げる。

ソニカがイングル、レミの様子を見に2階へとあがった時、それは起きた。

2人が瞬時に目の前から消えるのを。

駆け寄ろうとしても、強い電波が何かで近寄れなかった。

「ちよつといいか？ソニカ」

コツチへ来いと手招きするジル。

素直にジルに近づくとソニカは目を閉じ、映像を頭の中で鮮明にする。

少しでも早く詳しい映像を伝えるために。

ジルは一部始終の思考を読み終わると、ため息をついた。

「俺達がティアラ達の異変を見た時間と同一だ」

静かに告げるジルは、しっかりとキャロルを見て尋ねた。

確信をもった強い瞳で。

「キャロル・ヒソップさま……ティアラ達は『タムラソウ』の中に
行ってるんですね？」

貴方の手によって」

キャロル・ヒソップとジル・パーシカリアの視線がぶつかり合った。

「それにしても貴女も考えたものだ」

ディックがベッドに座りながら感心したように言う。目の前の蓮華に。

ここにきてから、ディックが使っていた部屋にルーリが突然現れた。
『仲良くやんな』

一言そう言つて、蓮華を突き飛ばして姿を消すルーリ。

蓮華の意志はなく、ただ動いているといった感じだったのでディックは焦った。

『このままでは確実に怪我をする』と思つて。

だが、要らぬ心配だった。

「お久しぶりですね、ディック・クローバー」

蓮華の態度は急変し、自分の意志で受身を取り、怪我をせず床に転がる。

「ちよつと、賭けをしてみたんです。演技、上手くいったようですね」

笑いながら蓮華はディックに話しかける。

「クロスが見てきたことを全てお見せします、ディック・クローバー」

そう言つて、蓮華が十字を空に切る

対の存在』。今まで何人の花天使達が疑問に思つたことだろう。

何故、『対の存在』などあるのか……

何百年もの間、答えを出せなかった者達が、一体、何人いたのか。

そして答えに辿り着こうとしているのは、きっとジル達が初めての花天使達だ。

こんなことをキャロルは季節館にくる直前に考えていた。

彼の花、ヒソップの花言葉は『浄化、清める』。『浄化』は『クレスト』と考えていい。

彼は文字通りのことをきちんとやっていた。

また、彼は性別も決める。彼が持つ、『タムラソウ』の花の中で、花天使の性別は確定する。

そして彼は浄化する。表に立つことを許されなくなった花天使を。

「ティアラ、イングル、レミそしてクリスを『タムラソウ』に閉じ込めてから、貴方はここに来たはず……違いますか？」

挑戦的に問うジルの視線は揺るぎない強さがあった。

彼は静かで何を考えているか分からない時が多い。

だが、仲間意識は強く、常に正確な判断を下す『魔術師』。

彼の視線を真正面から受け止めるキャロル。

2人のやりとりを見守る花天使達。静寂が彼等を飲み込む

「私の思考を読み取ったのかい？ ジル・パーシカリア」

やんわりと尋ねるキャロルに対し、ジルはきつく言い返す。

「花天使として生まれた以上、知るべき情報は読んでいます！」

それに貴方のことを知らない花天使はいないですよ！！」

「キャロルさま。貴方が性別を決めることは誰もが知っていること。隠せることではないはずですよ」

セラフィンがジル側につく。

「貴方が浄化……クレストするということも、『対の存在』を作った張本人が貴方だということも」

セラフィンの前に立ち、静かに発言するのはハンス。

「何故、対の存在を作ったのか、何故こんな時期にティアラ達の性別を決めようとしているのか……話していただきます」ジルが再度キャロルに真正面からぶつかっていく。

静寂仕切っていた季節館に、緊張と言う金縛りが張り巡らされた。

暗闇だった部屋が淡いピンク色に染まっていた。

その光に映るもの。

それは、ディックが居なくなっただけの花天使達の行動。

「あいつ等……マジで人間をクレストしたのか」ディックは、ただただ驚くしかなかった。

根拠なく言っただけの発言を思い出す。

『人間だろうがクレストするし、伊里も蓮華もクレストする覚悟があるさ』

現実になっていた。

彼の根拠のない一言が。

「嬉しいやら、悲しいやら……全く頼れる奴等だ」ディックは笑った。

隣に居た蓮華もつられて笑う。

2人は顔を見合わせた。

『どんな神経してるんだか』ディックはそう言おうとした。しかし、口にした言葉は全く違っていた。

「リバース・クロス?!」叫ぶと同時に蓮華は仰向けに倒れる。

額の逆十字架が今にも蓮華から離れようとしていた。

「蓮華さん!」

左手で蓮華を捕まえようとした時、クロスが蓮華に飛びつくようにポケットに収まり、

彼の目の前に白い煙をふきだしたリバース・クロスが立ちふさがる。そして 「『電撃・衝撃・落雷スマッシュ!』」

第三者の声がディックの耳に聴こえたと同時に攻撃回避をしたため、蓮華との距離が開いてしまった。

「伊里の言ったとおりだったな。しかもドンピシャなタイミングつてやつ」

野球帽を被った小さな少年、ルーリ・アキレアが宙に浮いていた。そうして静かに蓮華の元に下りてくる。

「さあ、来てもらおうか…… 崎原蓮華。 お前もさディック・クロバー」

ルーリは雷の鎖でディックと蓮華を縛り付けながら闇の廊下へと連れ出した。

「蓮華さん、蓮華さん！！しっかりしてくれ！」

ディックは蓮華に話しかけるが当の本人はまるで反応しない。ルーリに自分からついていつている気もする。

「もう、お前の知ってる崎原蓮華じゃないぜ？」

コイツがりバス・クロスを身体の中からとりだした時点だな」

「俺達をどうする気だ？」

笑いながら話すルーリを見て、ありきたりな質問をするディック。返答はないだろうと思っていたが

「儀式を行うのさ。ディック・クローバー。せいぜい、役に立ってくれよ？」

小さい少年ルーリの横顔は、ぞっとするほど不気味だった。

「『青い雷』！！！」

ガキン！

「『大地の怒り』！！！！」

ガキンッ

白い空間に4つの影があつた。

「『草ぐさのざわめき』！」

ガキン

「『水の反射』」

2つの影は息が荒く

「『風の鳥』！！」

カキンッ 『緑の砦』」

もう2つの影に疲労は見られない。むしろ、楽しんでいた。

ドゴッ！！「ったい……」

ズガッ！！「あいつ……手加減無しだな、マジで」

息が荒い影の正体は

「ねえ、いい加減本気になれば？」

恐ろしく細く長い十字架をもつイングル・ジプソフィラと

「じゃないと、ここで浄化しちゃうよ？ キャロルさまが言っていたでしょう？」

黄色い十字架を持つ、レミ・サンフラワーを前にした2人。

「だからって……できるわきやないでしょうが」

「お前等を、そう簡単に殺せる性格してねーよ……」

ティアラ・ジプソフィラとクリス・サンフラワ―の2人だった。

「『氷のパロス』!」

ティアラの十字架から、氷の矢が連射される。

標的は、彼女の対の存在、イングル。

寝転がりながら放つティアラの矢は真っ直ぐ真上にいるイングルに向かうが。

ガキンガキン……「だから、言ってるだろ？本気出せよ」

ティアラと揃いの細く長い十字架で、いとも簡単に全ての矢を砕くイングル。

彼の目は冷たい蒼い光を宿していた。

ズドゴオオオオオ………!!

白い世界の白い砂に直線を描く者がいる。

「ってえ……」 白い砂ボコリの中から聞こえた声は、クリス・サンフラワ―。

「このままだと、立場が本当に逆になるわよ？」

そついいながら、十字架を振り下ろすレミ。
「『太陽の刃』……！」

ドギユンッ……！！！！

熱い光の刃がクリスを真っ二つにしようとする。

「『守りの盾』……！」

ズシュウウウ……

間一髪で防ぐクリス。「なんで、こうなるんだよ……！！」
クリスとティアラは、元凶の人物を思い浮かべる。

その名、キャロル・ヒソップ。

「確かにジル、君の言う通り、私はティアラ達4人を閉じ込めてきた。

ただ、まだ性別は決めていない……いや『決まってる』というベキかな？セラフィン」

穏やかにキャロルが口を開く。

ジル、セラフィンの目を見てしっかりとキャロルは答えた。

「普段は、私がタムラソウの中に呼び寄せた時点で性別を決めているのだが……」

君達は難しくてね」苦笑しながら、キャロルは続ける。

「呼び寄せたのはいいけど、あまりにも絆が強くて……」

勝手に決めていいかわからなくなった。そこで私はゲームを思いついた。

公平な、ゲームをね」

キャロルはゆっくり窓辺に腰掛けて話し続ける。

口調は穏やかなまだった。

「絆というものは強いけど、脆い。絆は君達が思っているほど強くないんだ。」

ほとんどの絆は、壊れやすい……そして、必ず弱点はある。

闇のような、弱点と言う名の見えない印がね」窓の外をみながら、呟くようにキャロルは話す。

話しながら、彼は瞼を閉じた。

「君達はレミとイングルが消えると思っているだろうけど。」

もし、『第三者』が彼等に『助けの手』を差し伸べていたら、どうなると思う？」

キャロルの笑みは恐ろしいほど穏やかなまま。

その笑みに、ぞっとする花天使達。

今の話で、4人がどんな状況に陥っているか想像がついたのだ。

「おい、まさかティアラとクリスが消えるのか？」

ソニカの一言は、全員の考えを代表したもの。

ドクドクドク……

赤い血がどんどん身体から抜けていく。

片腕がないディック・クロバーは腹部を焼き切られ、己の血を伊里と蓮華のリバース・クロスに捧げていた。当然、不本意ながら。

「いい味の血ね、貴方の身体の血は」

伊里が満足げに呟く。

ディックの血で彼女の手は赤く染まっていた。

だが、伊里にとってはどうでもいいことらしい。

手についた血をとろうともせず、伊里はアイスクリームでも舐めるようにぺろぺろ舐める。

「リバース・クロスも嬉しそう。最高の血を吸えて満足してるわ」
伊里の隣で蓮華が発言する。

彼女は手をぬぐったり、綺麗に洗い落としていた。他人の血がついているのは我慢できないようだ。

ディックは固いベッドに縛り付けられ寝かされていた。

手足もしっかりと固定されて、動けない。

『マジで、全部の血を吸われそうだ』彼の思考はまともに働ける状態ではなかった。

『早く……来てくれ、ティアラ……皆……』何も知らない彼は、心底強く願う。

「何故です？！何故貴方はそこまでして彼等を消そうとするのですか？しかも、こんな時に！！」

ジルの声がいつそう大きくなる。静寂という金縛りが解かれた瞬間だ。

いつかくることは覚悟している。

それが『花天使』だから。

超えなきゃならない壁だから。

でも、あまりにも唐突過ぎる。彼等は、任務遂行中なのだ。

キャロルといえど、こんなやり方は好まないはず。

「プリメットの……花天使としての『運命』だ。ジル・パーシカリア」淡々と言うキャロル。

「でも、だからって、こんな時に！ディックがいない今、あの4人は欠かせない存在です！今すぐに、4人を」

「返すわけには、いかないんじゃないのか？」

あの4人だからこそ……違いますか？キャロルさま」

今まで発言しなかったソニカが静かに声を出す。

間髪いれずに尋ねるソニカに微笑むキャロルと納得のいかない花天使達。

「ティアラ、イングル、レミにクリス……戦闘能力が高いのはセラと同様、全員が認めてる」「だからこそ、力が必要なんですよ？！それに、私達は『仲間』だよ？！」

ソニカの腕を掴み揺さぶるセラフィン。

彼女の答えに、ソニカが悲しげに答える。

「4人がいつかは2人にならなきゃいけない……」

その時期が『今回の源をクレストした瞬間』だったら、どうなるんだ？」

「脈なし、呼吸なし、リーナス反応なし……ディック・クルーバーの死亡確定」

ルーリが伊里にそう告げる。

その瞳に『寂しさ、悲しさ』という感情は見えない。

むしろ、この状況を楽しんでいるように見えた。

「フラム、お前の親友、たいしたことねえじゃん」

「まさか、ディックもこんな形で攻めてくるとは思わなかったのだろっ。

……伊里、蓮華。最後の手向けとして」

「好きなようにすればいい」

伊里はフラムを見ずに、蓮華にふる。

蓮華は首を縦に動かしたただけだった。

「感謝するよ……今から行ってくる」そう言ってフラムはディックを抱えて静かに消えた。

『もう少し、頑張ってくれ……ディック！』フラムは消える直前に強く願う。

『まだ、僕達の決着は着いてない……死ぬな！』

フラムがどこに行こうとしているのか、分からない。

「リーナスの高い方が『生きる』、低い方は『消える』」。

だけどあの4人は、リーナスがほぼ同じ。

なのにクレストした瞬間、イングルとレミが出ていなかったら、確実にイングル達は消えることになる……ほぼ同じ力なのにタイミングが悪いがタメに」

「だから、貴方の一存ではきめることができない、ということですか？ キャロルさま」

ハンスの言葉に続くジルの声。

「だからって……闘わせなくてもいいじゃないですか？！ だいたい、いつか『消える』存在なら、どうして『対の存在』があるんですか？！」

キャロルに訴えるセラフィンの質問にキャロルは、昔話をするかのようにおっとり答える。

「私が……私の中に『もう1人の私』が生きている……と言ったら君はどう答えてくれる？」

セラフィン・カメラア」

「 キャロルさま、それはどういう 」

一瞬の間をおいてセラフィンが聞き返そうとするのをソニカが制する。

「 キャロルさま自身、まだ性別が決まっていなかったか……

もしくは、『自分自身と同じ苦しみを味わいさせるため』のどちらかだな」

ソニカの目はキャロルを見ていなかった。

彼は壁にもたれ、腕を組みながら目を閉じている。

だが、声には迫力があつた。

セラフィンをはじめ、誰もが耳を疑い、同時に疑問を抱く。

「ソニカ、100歩譲ってお前の仮説を信じるとしよう。

でも、何でお前がそこまで『的を射る』ような発言が出来る？」

代表して疑問をぶつけたのはハンス。

「彼方は花天使として日が浅い……それなのに何故」

「 なんてだろう」

ドビシイイイ！！！

間髪入れず答えたソニカは、やはり間髪入れずにある6人から、同時ハリセン攻撃を受けた。

正直に答えたソニカの目に涙が溜まる。

「 いたい……」ソニカは呟きながら顔を上げた。

その目に映った人影は、ケイン、リリー、クルルの3人。

「 ……なんででてくるのかな、ケイン」につこりしながらセラフィンが問う。

何気に静槍流の構えを取っていた。

「うげっ！『風槍』やめい！『真槍』も駄目！！」

「じゃあ、『炎槍』で」

「そう言う問題か！」

ケインとセラフィンの言い合い合戦が始まった。

ケインの顔は青ざめ、セラフィンから一歩ずつ後退。

セラフィンは、微笑しながら一歩ずつ前進する。

「『呼ぶまででてくるな』っていわれてたのに出てきて悪かったと思うけど！」

「私達、呼び出されたの。キャラルさまに」

すちゃっ！と、ケインを庇うようにリリーがセラフィンの前に出る。

その言葉に驚くセラフィンは反射的に後ろを向く。

「直に聞いたほうがいいと思ってね……」窓から離れセラフィン達に近づいてくるキャラル。

「ねえ、対の存在さえいなければ！と思ったことはないかい？」

そう尋ねるキャラルの顔は、彼等が知っている顔ではなかった。

「どわっ……！」

「がっ……！！」

ティアラ、クリスは共に『草木の戒め』で縛り上げられていた。

手足を動かすことは勿論、言葉を出すことさえ困難だ。

うめく事がやっと出来るといったところか。

白い世界に赤い鮮血が花のように咲いていた。

小さな池も何箇所もある。

白という世界に赤という色は、とても映えて見える色。

そんな奇妙な世界の真ん中で苦しむ2人。

「キャラルさまも手を貸してくれたのは嬉しいけど」

「ここまで差をつけなくても、ね」

レミとイングルが言葉を交わす。彼等には疲労も外傷も見られない。
唯一つ見れるとすれば 『失望』

「あーあ。つまらないなあ」

レミが心底がっかりしながらクリスに視線を落とす。

「こんな大差で殺せるとはね」

イングルがティアラに近づきながら十字架を首に当てた。

「生きるべき者は、俺とレミみたいだな」

イングルの言葉も失望からくるもの。

無言の時間が刻々と過ぎていく。

「クレスト!!!」

言うと同時にティアラとクリスの首を吹っ飛ばそうとする2人だったが

「お前達が第三者、キャロル・ヒソップの力を借りたというなら。

俺がティアラとクリスに力を貸してもいいはずだよな」

タムラソウを突き破った侵入者の声に思わず手を止めた2人。
瞳に映った人物は、ディック・クローバーだった。

対の存在が、いなくなったら

こんな気持ちにならずにすんだのに！

& a m p ; n b s

p . :

もう、何回思った台詞だろう

何度、『自分ひとりだったら』と思っただろう

「君達は確かに仲間意識や対の存在との絆は強いかもしれない。
でも、『本当に』離れたくないと思うのかい？」

キャロルの声が頭に響く。

何も考えられなくなるような声で彼は、ゆっくりと話しかてくる。
「本当は『自分だけ』が生きていたいと思うんじゃないかな」

もう、何回思った台詞だろう

「そして、それは私も同意見だ……だけど現実はそのはいかない」
何度、『自分ひとりだったら』と思っただろう

キャロルの声が次第に高くなっていく。

「プリメットを造った私、キャロル・ヒソップも、そう思い続けている。今も尚、その気持ちは変わらない」
キャロルが十字架を出す。

「私のもうひとつの人格が消えない限り、

『私だけ』にならない限り私は、『花天使』にも同じ思いをさせようと思っただのさ」

「キャロル、さま……？それと、も」朦朧とする意識の中、ジルが問う。

『今の貴方は誰なのか』と。

それだけ聞くと、ジルをはじめ皆バタバタとドミノ倒しのよう倒れていく。

「どちらなのだろう……ジル・パーシカリア。

光と闇……どちらの人格がでているかわからないな」

キャロルが気絶しているジルにささやく。

悪意のない穏やかな声で。

「まずは……君からだ。魔術師、ジル・パーシカリア。君の能力は少々厄介だからね」

ガキン！！ガキイン！！

「俺のこと、忘れてません？」

キャロルの十字架を受け止め、弾いたのはソニカ・アイリス。

「俺は、守られてたんです……ディックに」

そう言つて凝縮カプセルを取り出すソニカは、ジル達を守れる位置に素早く移動する。

転がり出てきたのは、ディック・クローバーの右腕。

「俺の推測が正しければ……貴方は429年間、闘つて来たはず。そして、429年前貴方はクロスとリバー・クロスを作ったはずだ。」

貴方自身の『それぞれの人格』を保つために」

「随分断言系で言うじゃないかソニカ・アイリス。」

そう、私がクロスとリバー・クロスを作ったのさ。

リバー・クロスは略して『リバ・クロ』でもいいけどね」

なんでここまで穏やかな笑みをたやせるのかわからない。

この場面で、すんなり認めたうえに何気に遊んでる……ソニカは理解に苦しんだ。

「私のことがわからなくなっているようだね。混乱してる中悪いけど、答えてくれるかな」

笑いながらキャロルが真つ直ぐソニカの目を見る。

それをつけとめたソニカは『今なら大丈夫』と判断した上で返答する。

『いいですよ』と。

「私は、どうやって使い分けられていると思う？
光の者は『クロス』を闇の者は『リバ・クロ』しか持つことは出来ないのに。」

私はどうやって使っていると思う？」

「『紅乱剣』！！」

ディックの両手から2本の紅乱剣が放たれる。

1本はイングル、レミを襲い、もう一本はクリス、ティアラを解放する。

シュパッ！

切れ味のいい紅乱剣が2本とも役目を果たし、ディックの元へとかえってきた。

「っな！！」

「なんで……？腕が」ディックを凝視するイングルとレミ。

「どうなってんだ？ディック。お前右腕ないはずじゃ」クリスも彼等に同意を示す。

「あゝやっぱ両腕あるといいわ……てか、イングル、レミ大丈夫か？」

返答せず、己の道に行くディックの言葉。

白い世界に光が入り、その光をもろ浴びる2人の姿にディックは話しかけた。

自分が傷を負わせたイングルとレミの姿に。

イングルの傷は右頬に、レミは左足に軽傷を負っていた。

自分達の方が傷は深いと言うのに駆けつけるティアラとクリス。

そんな2人に向かって放たれた言葉は

「……………いってえ……………ってここどこ」

「……はい？」「……啞然とするティアラとクリス。

ため息をつきながらディックが推測を口にする。

「一部、能をいじられたんだろっな。そして、解くには『傷つける』

つてのが条件だったんだろっ」

そう言うとは4人を促した。

「早く、戻ろっぜ？季節館に」

「どうやって……俺にわかるわけないじゃないですか！」

ズドッゴ ン！！

キャロルが『風弾』を打ち込んできたのを防ぐと、風弾はスピードを加速させて季節館に穴を空けてくれた。

『普通の風弾にみえるのに……威力が凄い』そんなことを思い、そして彼は見事に忘れていた。今、戦闘中だと言うことを。

「『紅月剣』！」

紅い刃がソニカに襲いかかる。

ソニカはとつさに横にとび右胸に十字を切る。

再度、紅月剣が襲い掛かるが

ガキイイイイン！

十字架同士が交差する。

「なっ……！」動揺するソニカの頭に、先ほどの答えが脳裏をよぎる。

「っぶね……」一瞬の動揺が、もう少しで彼を死に導くところだった。

ソニカは自らの意志で滑り落ちにいき、転がりながら移動する。

「貴方は、『その身一つ』でどちらかを持てる。分かりやすく言うとか、かなり重度な二重人格者……！」

ソニカが立ち上がりながらそう言った。そういうことなら説明がつく。

何故クロスとリバース・クロスを自在に操れるのかを。

何故、崎原家と楓家のような家が存在するのかも。

「全てが憎かった貴方は、地上をも憎んだ。最初から『性別が決ま
っている人間』が集まっているところだから。

でも、それは『闇の心』持つ貴方が望んだこと。

『光の心』も持つ貴方は、自分をコントロールすべく、クロスとリ
バース・クロスを作った」

ここでソニカは一度言葉を切る。

両者の目は瞬きもしないほど、互いを見ていた。

ソニカの十字架が光を増す。

言い忘れていたが、ソニカ・アイリスの十字架は『光を常に放つて
いる』

淡い紫の色の光。

タンッ

ソニカが宙を舞う。

十字架を空中で正眼に構えた。

「そして、崎原家には『光の心』を楓家には『闇の心』をサポート
できるように指示を出した……！地上を『監視できるように』。い
つでも復活できるように！」

急降下するソニカ。

そして

「『光の矢』！！『アヤメの鎖』！！」

ソニカ・アイリスの属性が今、決まった 彼の属性は『光』。
淡い紫の矢が、たった一言で何十本も放たれ

シユルシユルシユル……！！

アヤメが何本も絡みつき、キャロルの両腕に絡みつく。

「たったひとつの身体でプリメツト、裏街道そして地上……」

あんたは全てを監視していた！時には『善』を時には『悪』を「アヤメの鎖が太くなる 「この程度で、私の動きを封じたとしても？」

キャロルが『念』の技、『自在なエイル』でリバース・クロスをセラフィンに向けて投げつける。

ボスッ……

血が流れる……。赤い血が滝のように。低いうめき声も聞こえた。

キャロルは喜びに溢れた表情をするはずだった。

だが、今の彼の顔からは、『喜び』は見られない。

カラン……

リバース・クロスがクロスに変わっていく。持ち主、キャロル・ヒ

ソップは目の前の光景に言葉を無くしていた。

ソニカも動けない。言葉が、でない。

季節館に血の池が出来上がっていく……。

NO・7 確信とこぼした言葉（後書き）

自分の中にいる、もうひとりの自分をどうコントロールするかはその人次第ですが、

ティアラ達のように、目の前に現れ、戦いを挑まれたら私はどうするんだろう……と真剣に考えたRueでした。

では、またお会いできることを祈りつつ……

Rue

NO・8 消滅した花 (前書き)

助かる可能性があっても、己の命を犠牲にしますか？

NO・8 消滅した花

「おい、何してんだ、おいてくぞ っておい！なんで？！」

ディックが振り向いた時、ティアラ達4人が2人になろうとしていた。

「本当に、時期がきたみたいだ」

イングルらしき声がそう呟く。

蒼い光の中で。

「性別が決まる 」

黄色い光の中でクリスが続く。

白い世界に赤い血が花を描き、それに続いて蒼い花、黄色い花が加えられる。

「大丈夫、側にいる」

同時に、全ての花がはじけとび、白い世界に3つの人影が残される。

もう、蒼、黄の花は見当たらない。

赤の花 鮮血の花は残っていても。

2つの人影が消え、先ほどまでいた、もう2つの人影はそのまま残った。

何が起こったかわからなかった2つの影は、ペタンと力が抜けたように座り込む。

「……とり、のこされた……」

か細い声がタムラソウ中で木霊した。

錯覚だと分かっている、そう思えて仕方ない……

ドサッ……

血まみれの姿で、1人の人物が崩れ落ちる。

「おい……おい！なんで、お前意識なかった……なあ、ケイン・カメリアー！」

ようやくスイッチが入ったソニカは、息絶えそうなケインの元へ走りよる。

キャロルは確かにセラフィンを殺そうとした。

なのに、セラフィンは全くの無傷。

その理由は、ただひとつ。

ケインが己の意志で、瞬時にリバー・クロスに飛び込んだ。

「なあ、こうなること、わかつ……わかるはずだろ……？　なんて馬鹿なこと、すんだ……？　ケイン、なあ、何で……？」

ソニカの服に血が染まっていく。

ケインは彼の腕の中で、血を流し、苦しそうに息をする。

額に汗が見られる。体が冷たくなっていく……

「おまえには……わかんねえよ、ソニカ……理解できたと、言っても……」

お前にキチンとわかるはず、ねえ……」

言葉が、よく聞き取れない。

そして、ケインの言うことが理解できない。

「どういう……………てか、喋るな！」

咄嗟にソニカはセラフィンを起こそうとした。

彼女なら、助けられる そう思ったから。

二ドト

タチアガレナイ、ヨウナキズヲ、

ココロニ、キザンデシマッタ……………？

ふと、そんな考えが脳裏をよぎる。

もしも、セラフィンが助けられなかった場合、自分はどう責任をとればいいのか。

確かに彼女は薬作りの天才。

だが、天才だって出来ることと、出来ないこと。そして失敗と成功を持ち合わせている。

可能性は十分にあるのだ……………でも！

汗をかいた拳をまた強く握る。

そして

「例え1%しか可能性なくても、俺はそれにかける！」

キャロルを睨み、今度こそセラフィンを起こそうとした瞬間。

「ソニカ、頼む……やめてくれ」

とどめの一言をソニカは聞いた。

「お前は、ひとり……おれたちは、違う……」

ソニカの腕の中でケインが息を引き取った。静かに、そして穏やかに……。

彼の顔に、苦しみと言う文字はない。

「なん、でそんな顔できるんだ？そんな顔が……！」

泣きながら、ソニカは問う。

答えが返ってくるはずのない亡き人に。

ケインの姿が静かに消えていく……

ソニカの腕の中には、もう、誰もいない。

最後まで笑っていたあの笑みは、二度と見る事が出来ない。

「何故そんなことをした…？ケイン・カメラリア」

驚きを隠せない、キャロル・ヒソップ。

「お前かて、生きたいはずだろうに……何故…？」

先程までと全く違う表情。

全く違う顔色。

小刻みに身体が震えているのは、目の錯覚ではない。

今にもキャロルは膝をつきそうだ。

「貴方に分かるはずないですね。貴方に私達の気持ちは、
わからない。」

例え、何百年……何千年たとうとも」

突然、聞き覚えがある声がキャロルの耳に響き、彼を現実引き戻す。

声の主は、ティアラ・ジプソフィラだった

「 決まったようね」

冷たい言葉が暗闇の中で響く。

まるで焦点が合っていない少女、崎原蓮華の声だった。

「花が消えたんだもの、当たり前でしょ」

何が嬉しいのやら、蓮華の妹、楓伊里はとても楽しそうだ。

伊里がベッドの上から飛び降り、リバース・クロスを部屋の一角に向ける。

「ルーリ、フラム。いつでもできる？」

向けられた方向から2つの声が返ってきた。

「いつでも、いいぜ？」

「問題はない」

ルーリ・アキレアとフラム・ルドベキアの声が。

2人は、とうに死んでいるはずの花天使達だが、伊里がリバース・クロスで蘇らせ、

この世に降臨させたのだ。

「ところで、フラム」

伊里の後ろから、蓮華が顔を出しフラムに尋ねる。

「何故、ディック・クローバーを蘇らせたの？」

その目の力にフラムは逆らえなかった。

いや、彼だけではない。

伊里を含め、蓮華の目に宿るパワーには逆らうことが出来ないのだ。

蓮華と伊里。

もともと1人だった人間が2人に分裂し、蓮華は『光の心』、

伊里は『闇の心』を持って生きることになった。

本来なら蓮華はここにいるべき人間ではない。

が、2人の中に流れる血が彼女を呼び寄せた。

「あいつは俺が倒す……ただそれだけだ」

一言そう言ってフラムは姿を消した。

「おーおー今日もフラムご乱心つと。俺休んどくな」

「時期にキャラルもくると思う。それまでだから」

ルーリの声に返答する伊里。

彼女はルーリが消えたのを見て、蓮華に問う。

「誰が、残ったと思う？貴女の『サポートするべき者達』は」

蓮華の表情に変化はない。

彼女は目を閉じて一言だけ言った。

「全ては運命。逆らうことは、できない」

まるで何もかも見透かしたような言葉。

この言葉に伊里は返す。

「それもそうね」と、ただ一言だけ。

ベットがあり、本棚が2つ。椅子とテーブルが一組ある自室でフラムは、あのときのことを思い出していた。

そつ、ディックが血をなくしたときのことを。

「俺は……お前に死んで欲しくなかっただけ……ただ、俺以外の誰かに殺されるなんて、許せなかったただけだ」

そう言って、目をつぶる。

記憶が鮮明に蘇る

『死ぬな!』

フラムはディックに心の中で、懸命に叫び続けた。

何度も何度も、繰り返し叫んでいた。

自分のスピードはこんなに遅かったかと感じたくらい、彼は焦り、飛ばした。

「っ……着いた……頼む、こいつを生き返らせてくれ」

フラムは汗を垂らしながら、息をしないディックを地面に寝かせ、呼びかける。

彼の生まれた場所に咲く『四葉』に。

花天使は『性別が決まっている者』なら蘇ることが可能だ。

ただし、『生まれた場所』と『誕生花』が咲いているところだけで

蘇ることは1度のみ、死後30分以内の者だけしか蘇れない。

「コイツは、今死ぬべき奴じゃない……! お前達は、わかるだろ?」

直後、四葉は紅い光を放ち、ディックは目を覚ました。

『フラム ？お前』

礼を言おうとしたディックの口を塞ぎ、

「また勝たせてもらっ」

そっぴい残し、彼はディックの側を離れた。

行きは、あんなにきつく感じた道のりが、帰りはものすごく楽に感じたのをよく覚えている。

「僕達の決着はついていない……早く来い、ディック」

彼は瞳を閉じ、時がくるのをひたすら待ち続けた。

シャリンシャリン……

呼び出しの鐘が狭い部屋に響く。

「 キャロルが帰ってきたか」

ゆっくりと起き上がり、足を床につけ、ドアへと向かう。

「僕は、いつでも闘えるぜ？ディック・クローバー」

この言葉を最期に、フラムは暗い廊下へと姿を消した。

消し忘れた明かりが部屋を照らす。

フラムが寝ていたベットも、そのベットにちょこんと置いてある四葉とルドベキアも

NO・8 消滅した花（後書き）

ちよこちよこと変えてみました。

…………… 本当にちよこつとだけですが。

これを編集するには、かなりの時間を費やしそうなので、ご勘弁を
（土下座）

第3部で頑張りますので。

では、又お会いできることを祈りつつ……

R
u
e

NO・9 真意と目的 (前書き)

静止の声をかけられて、あなたは制止できますか？
目の前で、仲間を傷つけられているのに……

NO・9 真意と目的

「ティアラ」

キャロルが目丸くして、啞然としたように彼女の名を呼ぶ。

視界には彼女しか映っていない。

だから他の声がした時、心底驚いたのは事実。

「『大地の叫び』！」

キャロルの周囲の地面が裂かれる。

木の根が身体にまとわりつく。

「クリス・サンフラワー?!」

「貴方はティアラとクリスではなく、故意にイングルとレミを生かそうとした。」

でも、そんなことしても誰も喜ばない! 当の本人達さえもね」

ディックの声は落ち着いている……落ち着いているが、完全に切れていた。

目が、今にも襲い掛かりそうな光を帯びている。

紅の十字架を握る力が半端じゃないことも、手に取るように分かる。

クリスはクリスで、次の攻撃を仕掛けようとしていた。

「『大木の
』」

「やめな、クリス」

だが、2人はできなかった。

小さな声と、細く長い十字架に阻まれたから。

「……やめな、クリス。ディックも」

所持者は、ティアラジプソフィラ。

ティアラはクリスとディックの前に立ち、十字架で通せんぼするよう仁王立ちしたのだ。

クリスもディックも、その場にいる者は全員驚きを隠せない。

ティアラの行動もそうだが、彼女が今一番落ち着いているからだ。

落ち着いた声で、目で繰り返す言葉。

『やめな』と一言だけを繰り返す。

言つとおりにしないといけないわけではない

無視すれば、『どけ』と言いいないわけでもない。

でも、出来なかった。

誰ひとり、この時のティアラに齒向かえなかった。

「……クリス。戒めを解いて」

先ほどから変わらぬ態度で、声音で彼女は言う。

淡々と。

「は？ティアラお前」

「闘うべき時期じゃ、ない」

変わらぬ態度で静かで小さな声。

だが、有無を言わせない声とオーラにぞっとするクリス。

思わずディックの後ろに隠れてしまう。

だが、これではつきりした。

ティアラの言動の真意が。

「……あーつまり、お前もブチ切れてるわけか」

クリスは根の戒めを解き、館内にあいた穴にキャロルを落とす。

「君は何を考えているんだい？ ティアラ・ジプソフィラ」

キャロルの問いにティアラは答えなかった。

だが、彼女のオーラには身の危険を感じた。

「怒っているのか、ティアラ・ジプソフィラ」

やれやれとでもいうように、キャロルが問う。

だが、ティアラは仁王立ちしたまま、答えない。

口を真一文字にして、堅く喋らないように務めていた。

「じゃ、またいずれ……これは君達の運命を決める闘いだ。」

光と闇、そしてプリメットの運命を賭けた、大きな闘い」

そう言い残し、くすつと笑いながら身を翻し 消えていった。

季節館から、音もなく姿を消した。

住人達は、それを見送った。

何も、言わずに。

「へえ……結構減ったのね。キャロル」

伊里が楽しそうに声を出す。

「でも、『裏』の人格ばかりね」

対照的に蓮華は冷たい視線を投げかけ、ため息をつく。

『予定と違う』というように、肩をすくめて。

それでもキャロルは不快な顔を見せなかった。

「あの者達の絆は想像以上だ、蓮華。闘えば、きつとわかる」

そう言うときキャロルは椅子から降り、自室に向かおうとするが不意

に足を止め、蓮華を振り返る。

「蓮華、ちょっと手伝ってくれないかい？」

キャロルは不思議な微笑を彼女に向けた。

その微笑を見た途端、蓮華はその場から動けなくなる。

そして、逆らえなくなった。

彼の目の光から、逃れられない……

「私で、よければ」

気づくと蓮華はそう返していた。

「んー……そうだね。ケインの言う通り、ソニカにはわからないだろうね。はい、どうぞ」

キャロルが姿を消してから数分間、彼等は何も喋らず、何も問わず

……

ただただ、己の思いにふけていた。

だが、それもあまり続かない。

何しろ意なの季節館は、血の匂いが充満していたのだから。

流石にこれ以上、重い空気には耐えられなかったのだろう。

ディックが無言で掃除道具を取りに行くと、つられて皆、重い足を運び出し、

掃除に取りかかったのだった。

そんな掃除も1、2時間で終わり、休憩を取った席でソニカは全てを語った。

ケインが消えたということ、何故そうなったかという経緯をソニカが話すと、

ハーブティーを入れながらセラフィンは、少し困ったように答えたのだ。

「俺が何で分からないわけ？俺だけってどうということだよ……ありがと」

反撃しながらも、ちゃっかりお茶を受け取るソニカにカップを持ったジルが答える。

「ソニカは、『人間』だったろ？性別は元から『男』だったろ？だからさ」

「は？」

目を点にして間抜けな声を出すソニカ。

顔には『意味わからん』とかいてある。

リビングには、全員が集まっていた。

ティアラ、クリス、セラフィン、ハンス、リリー、ジル、クルル、ディック、

そしてソニカの計9名の生存者が。

しかし、リリーとクルルの身体はイングルとレミのように透けてきている。

彼女等が消えるのも時間の問題だ。

2人を心配しているからか、リビングは静かで無駄口叩く馬鹿者はいない。

そんな中、疑問符だらけのソニカにディックが問う。

「ソニカ、お前は経験したことがないだろう？」

自分の中に『もう1人の自分』がいて、『男』とも『女』とも決まらないまま生まれてくるなんて」

この言葉に『そりゃそうだ』と言いかけて、ソニカは口を閉じた。

『あーそう言うことか』と納得できたから。

「そりゃ、確かにわかんねえよな。お前達は『2人で1人』が当たり前。」

いつ性別が決まるかとビクツキながら生きてきた。

一番身近にいた『もう1人の自分』を失った気持ちは何年たっても俺にはわからない」

ソニカの言葉にハンスが言う。

「まあ確かに。でもソニカ『身近にいた人を失う気持ち』はお前にはわかるだろう?」

この言葉で脳裏をよぎる顔は、彼の妹の顔。

ソニカは、妹を目の前で失っていた。

それも、2度も。

「ああ、それは分かるよ」

上を向いてソニカが答える。目に、涙が溜まっていく。

「ねーえ。ソニカって属性が『光』なんだよね?」

ティアラが突然聞いてきた。

今までの空気を吹き飛ばすかのように、明るい声で。

まるで先程のオーラが嘘のようだ。

戸惑いながらも、どうでもいいことを何故聞くのかと思いながら『そうだ』と答える。

ごく普通の調子で。

「
どう思う？セラ」

ティアラがセラフィンに視線を送る。

「断定は出来ない、けど。考えは皆と同じだと思っよ」

そう言ってセラフィンは同意を求めた。

「てか、そうじゃないと説明つかないし？」

「納得できないよな、そうじゃなきゃ」

ハンスとクリスが順番に意味不明な言葉を交わす。

「???なにが？」

首を傾げるソニカにディックが答えを教えてくれる。

「プリメットの創造主はキャロル・ヒソップ。」

でも、あいつの性別は『男だけ』だろ？

俺達みたいに、『違う性別』をあいつは持っていないんだ、初めから」

ゆっくり、一言ずつ説明するディック。

話し方から重要なことなのだと知らされる。

確かに、ソニカもそれは感じた。たとえ戦闘中でも彼は見抜いた。

光の心をもって話し掛けてきたキャラルと闇の心をもって話し掛けてきたキャラルを。

「キャラルがどうやってきたか分からない。

知らされている事だって推測にしか過ぎないこと。けどな、はっきりしていることもある」

ディックは、しっかりとソニカの目を見てこう言った。

「『光』のリーナスってのは、普通はもてない。

創造主しかもてない力……キャラル・ヒソップしかもてないはずなんだ」

ソニカは、きょとんとディックを見る。

「え……？じゃ、俺はなんで」

「……考えられることはひとつ。キャロルに変わってプリメットを治めるため」

ティアラは低く、小さく呟いた。

NO・9 真意と目的（後書き）

真剣モードのティアラを書くときは何故か笑えます。
地が地ですからね。

というか、ソニカの役割が重要になったのは計算外でした。

では、又お会いできることを祈りつつ……

R u e

NO・10 挑戦状（前書き）

肉親を……自分自身を疑えますか？

NO・10 挑戦状

「ここは？」

冷淡な顔で、冷淡な声で聞く蓮華。

彼女はキャロル・ヒソップを見上げる。

焦点の合っていない目で。

「見ての通り、プリメットだよ。十字架背負う花天使達が集う場所の入り口さ。」

光の心を持ちし者、崎原蓮華」

そう言つて蓮華の手をポケットに入れさせ、彼女だけが持つことを許される物、

『クロス』を触らせた。

「君がサポートすべき者達に、君は未だに守られているようだね」

その言葉が言い終わらぬうちに、蓮華はクロスを取り出し、まじまじとクロスを見ていた。

その目は、焦点のあわない目ではない。

彼女本来の目の光を取り戻していた。

「ここにいれば、普通に会話できるようですね。

プリメット創造主、キャロル・ヒソップさま」

につこりと蓮華は笑いかけた。

「君がこれほどクロスを使いこなすとは正直思っていなかった。

なにしろ、闇の世界でクロスに守られている者は、そうはいないからね。演技力も抜群だし」

キャロルも蓮華に笑いかけ、彼女の頭に手を乗せる。

子供を扱うように、クシャクシャと頭を撫でる。

「この扉に描かれている花が何かわかるね？蓮華」

ふとキャロルが手を止め、真剣に扉を見つめると、蓮華も反射的に扉を見て答える。

「はい。そして、言い伝えが真実だったということがはっきりとわかりました」

キャロルの問いに、はっきりと答える蓮華。

目は扉に描かれている花を見つめ、口はキャロルに確認する。

「429年間……貴方は待ち続けていたのですね？キャロルさま。彼等の存在を、ずっと」

蓮華の視界に入っている花は、7つ。

左右に3つずつ、そして一番上に1つ。

花の形は良く見えなかったが、何が描かれているのか簡単に予想はつく。

それだけに、蓮華は胸を締め付けられる想いをこめて呟く。

ふと蓮華は悲しげな瞳で。

「
彼等なら、貴方の意図に気づくはずです。

そしてきつと、笑顔で週末を迎えられます、キャロルさま」

キャロルに向かって素直に笑いかけ、一礼し、キャロルの元を去った。

蓮華のめは再び焦点を失い、冷淡な声を出す少女になっていた。

そして、同時にキャロルも『闇の心』に支配されていた。

「……そうだと良いんだけど。運命ってのはわからないから」

淋しげな顔でキャロルが遅い返答をしたことに、蓮華が知る由もない。

「帰ったわ」

蓮華が無表情で帰りを知らせる。

リビングは暗さを増していたが、彼女は気にしなかった。

手探りで椅子を探し出し、蓮華は足を休めるために静かに座る。

不覚にも、うとうとと寝ていたらしい。

どれぐらい寝ていたのだろう。

耳を澄ますと、彼女の後ろで伊里達が今後のことを話していた。

何を話しているのか気になった蓮華は、次の瞬間、我が耳を疑った。

「　　しかし、伊里。そこまでしなくてもよくね？」

あいつはもう、俺達の仲間だぜ？リバー・クロスがあいつを守ったんだ。いくらなんでも」

ルーリの驚いたような声がする。

「でも、所詮は『光の心』を持つ者……いつ寝返るか分からない。

花天使達を殺すまでに殺してしまわないと、面倒なことになるに決まってる。

だから、殺すの……崎原蓮華を」

ワタシヲ

クロス ? ?

耳を疑った。

大声で、叫びたい。

だけど身体がゆつことを聞かなかった。

『分からないの？本当に』

「いい？今言った内容を忘れないこと。そして、蓮華に知らないことが条件よ？」

伊里がルーリとフラムに指示を出している。

『こんなに近くで、発動しているのに』

「了解したよ」

「へーへー。わかりましたよ。にしても、もう1人の自分だろ？よくそんなことができるよな」

フラムとルーリが伊里に話し掛けている。

「お前は、痛くないのか？伊里」

「フラム、言ってる意味わかんないよ。じゃ、お先に寝るわ」

伊里が寝室へと向かい、続いてルーリ、フラムの順でリビングには私だけが残った。

全身から、力が抜ける。

「私が『光の心』を失わずにいれたのは『クロス』のお陰。ありがとうね、クロス」

ポケットにささやくと、私はまた冷淡な少女になっていた。

「さて、と。布団に入るつかしら」

「はあっ！」

勢いよく足を蹴り上げる。

だが、その蹴りは空をきるだけだった。

「まだまだだな『紅乱剣』！」

ディックの両腕から紅乱剣が標的目掛けて急降下。

「『天の大洪水』！！」

標的となっているハンスが紅乱剣目掛けて、宙に川を作る。

かなり大きい範囲の水が宙に浮かんでいた。

川というより、海のように。

「そうきたか、ハンス」

「紅乱剣は燃える剣！火を消してしまえば、単なる剣だからな」

少女のような顔立ちに、細い腕で彼はディックと練習試合をしていた。

彼等だけじゃない。

ガキイーン！

ぶつかり合う十字架の音。

「もらったあ！『木々の戒め』！！」

ソニカは十字架を十字架で受けるのに慣れていない。

キャロル戦では素晴らしい受け方をしたが、それが『まぐれ』だということとは本人もわかっていた。

ソニカは受けた時、隙だらけになるのだ。

「ぐっ……『ひ、光の鏡』……！！」

空に淡い光が広がり、その光は鏡のような働きをした。

『あべこべの空間』を生み出す光。

「なっ！」

あまりにも強烈な光にクリスの動きが止まった時

シュッ！

ソニカが目の前に現れて十字架を振り下ろす

季節館IN実験室

外も暑いが、それ以上に実験室は暑かった。

その中で薬草作りをしている2つの影。

「セラフィン。赤バラ煮込めたぜ？」

ジルがセラフィンに告げると彼女は無言で少しすくい、マウスに飲ませる。

元気いっぱいのマウスは3分後には息絶えた。

「うん、上出来！後は甘草入れてっ」と

にこにこしながら、セラフィンは甘草を取り出しに行く。

目を点にしたジルが慌てて尋ねる。

「赤バラだけでなんでマウスが死ぬんだよ」

「んゝ私が改良栽培したからかなあ」

楽しそうに話すセラフィンを見て、どっと疲れが出るジル。

『どんな改良したんだよ……ってあのバラ毒草?!』

汗が余計にでてる。

「ジル、毒草じゃないよ？マウスにはきつかったみたいだけど。ちやんとした薬草になるよ。多分、毒消し効果が大きくなるはず」

甘草を籠いっぱいに入れてきて、セラフィンは教えた。

汗をダラダラかいて固まっている人は、大抵、間違った認識をしている。というのを彼女は心得ていた。

「さあ、ジル。甘草切ってくから、赤バラの中に入れて煮込んでくれる？あ、火は極細で」

そう言つて彼女は鼻歌交じりに甘草を細かく切っていく。

ジルが甘草を入れる時に時計が目に入った。掛け時計が、もうすぐ昼だと教えてくれる。

「時間が経つので早いねえ……ジル」

セラフィンがジルに呼びかけた。

長針と短針が12時を告げる

「12時か。そろそろ帰ろっかな……っとお！」

ティアラが地上の見回りを終え、時計が12時を告げたので帰宅しようとした矢先に彼等はやって来た。

「死ねえっ！」

「あいつを殺せえ……！」

ズドドドドドド……

「帰れそうもないなあ」

ため息をつきながら空を見上げる。

男女関係なく、刃物などを持ってティアラに向かってきた。

その目は尋常の目の色ではない。

殺意の目……己の心の闇に負けた者の目をしている。

「はっ！」

カキンカキンカキン……

彼女専用の細長い十字架で、時には武器を払い落とし、また時には破壊していく……

四方八方からの攻撃を全て避けながらの行動。

特別力を使っているというわけではない。

慣れたのだ。ティアアラが『闇に支配された人間のパターン』に。

ゴスツとティアアラの回し蹴りが炸裂する。

回し蹴りの反動で後ろに飛び、踵落とし、肘当て……その他もろもろを容赦なくくらわすティアアラ。

「せやつ！！約6時間も同じことやってんだ！いい加減諦めろつての！！」

ティアアラが空高く飛び上がる。

「ティアアラ・ジプソフィアラが汝等の罪、引き受ける！クレスト！！」

十字架から蒼い光が放たれ、一瞬のうちに人間達は浄化された。

骨の一本も残ってはいない。

「あたし等は花天使で、人間をクレストしてはならないけど……もう、過去にってしまった……」

目を閉じながらティアアラは喋る。

誰も聞いてはいないのに、彼女は話し続ける。

「そして、今回の源も人間。花天使の血を引こうが、花天使のような力を持つてようが……人間にかわりない」

静かに十字架を収めるティアラ。

季節館へと身体を向ける。

「あたし等は、これ以上被害を出さないために、ここにいるんだから」

6時間前

「全員、起きろ !!!!!!!」

大声が季節館の各部屋まで響きわたる。

「どおしたのお？ハンスウ……」

双子の妹、セラフィンが兄に向かって欠伸をしながら問う。

「って、他のメンバーは？」

「これくらいで起きる神経してるわけないでしょー」

ハンスの質問に目をこすりながら答えるセラフィンの頭上が不意に

暗くなる。

「俺等は起きてるっての」

ジルとディックの2人だった。

「起きてこないのは、いつもの面子だろ？」

ジルはそついうと、素早く起きている全員に耳栓を渡す。

彼等はジルがなにをするかわかり、耳栓を文句いわずに入れた直後。

起きてこない3人組の部屋に、黒板を引っかく音を頭の中に送り込む。

「「「うぎゃー！ー！ー！ー！」」」

耳栓はこの声を聞かずに済む役目を果たしてくれた。

「ハンスがリビングに下りてきた時に、ごく丁寧に机においてあったわけだな？」

ディックがハンスに確認する。

首を縦に振るハンス。

「しつかしまあ、本当にご丁寧なことだな。『プレラ』の中に楓を入れるとは」

ディックは肩をすくめて呆れたように言う。

「それが、『プレラ』かディック」

ジルがまじまじと見る横でセラフィンが呟く。

「その中に入れられたシーナの血が、伊里と蓮華さんに入っているなんて未だに信じられない」

「まあ、とにかく聞いてみるか。伊里の伝言。静槍流『風槍』」

ハンスが楓を真っ二つに切り落とす。

そして、楓の中から伊里の映像が映りだす。

『お元気かしら？まあ、元気じゃないわけではないと思うけど。』

まあ、時間無いから用件だけ言うわ。

明日の朝6時に、プリメットで決着をつけましょう」

それだけ言うと楓は静かに消えていった。

NO・10 挑戦状（後書き）

本当に心底嫌いです、ユザナ。

勝手に暴走してくれますし。

少しはリメイクしたんですよ、初期版から。

でも、殆ど出来てません（ため息）

では、又お会いできることを祈りつつ……

R
u
e

NO・11 不本意なゲーム (前書き)

全ては、それぞれの勝手な判断から生まれた……

NO・11 不本意なゲーム

「ソニカっ！！」

クリスがソニカに手を伸ばしても無駄なことだった。

彼は見えない力で、大きな扉の一番上に叩きつけられ、同時に気を失った。

そして、ソニカのことを引き寄せたのは他でもないキャロル・ヒソップ。

「ソニカに万が一のことがあつては私が困る……何故だかはわかるだろ？」

「貴方は『永眠』するつもりなんですね？全てのことに疲れたからキャロルの視線を真っ直ぐ受け止めたジルが挑むような目で尋ねる。」

『全てに疲れたから死ぬ』

『だけど自分が造ったプリメットを壊したくない』

『なら、守ってもらおう花天使（俺達）に』

「勝手じゃないですか！」

セラフィンが声を張り上げる。右手を勢いよく振り上げて、キャロルを睨みつけた。

だが、キャロルは笑って聞いている。

『何を今更』という顔で。

「君達だって同じだろう？『これ以上被害を出さない為』に重大な過ちを犯したはずだ。『人間を殺す』という重罪をね」

皆、言葉に詰まった。そう、彼等は人間をクレストしていた。

ひとりやふたりではない……数え切れないほどの人間を。

『これ以上被害を出さない為』ということ的前提に、死ぬほどでもない罪をもつ者、まだ何も知らない子供を、十字架で。

「着いた早々……嫌な気持ちにしてくれて礼をいうわ」

両拳を堅く握り締め、下から睨むようにティアラが言った時。

背後から、嘘のような言葉が投げつけられる。

「なら、早く始めて私達を殺すことね。光の心をもつ者も救いたくは」

背後にいたのは、音もなく現れた伊里、ルーリ、フラム。

その顔に不気味な笑みを浮かべて、彼等はこちらを直視している。

「どういう……」

「上、見ろよ」

ハンスの言葉は、小さな少年、ルーリの声によってかき消される。

条件反射で上を見上げた彼等の目に映ったのは

空に逆さづりされた上に、血まみれになった崎原蓮華の姿。

「蓮……さん？……蓮華さん！」

ティアラが急上昇して蓮華を助けようとしたが

バチバチバチっ！！

見えないバリアが電流を放つ。

「っ伊里、あんたなんてこと！蓮華は貴女の、いえ、蓮華さんと貴女は2人で1人の人間なのよ?!」

睨みつけるティアラの言葉に伊里は何の反応も示さなかった。

彼女はただ一言、「やるの？やらないの？」と尋ねてきたきりだった。

「安心しろ。蓮華はかるうじて生きている。もって55分というところか」

フラムが冷淡な声音で花天使達に告げる。

「つまり何もかも55分で終わらせろっていうわけか」

「55分内にキャラルも倒せっていうんだろ？伊里！」

クリスに続きジルが、十字架を抜きながら喚くように確認する。

「よく分かっているじゃない」

これが闘いの合図となった。

『じじ、どこだ？？？』

ソニカはひとり、光の洞窟を通っていた。

とても眩しい光が放たれているというのに、彼はごく普通に歩いていく。

『てか、さっきからいろんなところで映されてる映像は何の映像だ？？』

ソニカは洞窟のあらゆる場所に一瞬だけ映る様々な映像に目を奪

われる。

見ようとしても、消えてしまう映像。

我慢できなくなつてついに口から出た言葉。

『ストップ!!』

すると、本当にそこで映像は止まった。

消えかけてた映像も、ソニカが近寄ればキチンと見ることが出来る。

『そーいや……俺プリメットにつくなり、引き寄せられるように何かに衝突したっけ』

ひとつの映像にソニカは近づいた途端、驚愕の事実を目の当たりにし、何も考えずに突っ走る。

『ちつくしよ……! 出口、どこだよ!』

右も左も、前も後もわからない。

自分が出口に向かっているのかもわからない。

『正しいルートなんてあるのか?!』

『正しい出口は存在するのかよ!』

心の中でそう怒鳴りながら走り続ける。

『さっき見た映像は未来か？！それとも、今か？！どっちにしても胸くそ悪い！！』

知らずのうちにソニカは声を出していた。

ソニカは走る。

じつとなんてしてられない。

自分が光のリーナスだからなんだ？花天使に、変わりはない！

『光弾砲！！』

ソニカは十字架から大砲の弾を連射する

『俺がいるべき場所は、ここじゃない！！』

「うおらあああっ」

クリスがルーリのみぞおちを思い切り蹴っ飛ばす。

小さな身体のルーリは壁を4、5枚突き破って全身スタボロの状態。

辛うじて息をしているといったところか。

「『風雷鳥』（ふうらいちょう）！！」

すかさず、ハンスが風と共に雷鳥をルーリへと向かわせる。

風によって雷鳥は迷わずにルーリにたどり着き、自らの命をルーリにぶつける。

「甘いぜっ……おりゃあっ」

ボゴ……！

鈍い音と同時に、ハンスがぶっ飛んだ。

軽く壁を5、6枚貫通し、ピクリとも動かない。

「ハンスっ！」

「どこ行く気だよ？」

行く手をルーリが塞いでしまう。

2人は無言で睨みあい

「『電撃・衝撃・落雷スマッシュ』！！」

「『ひまわりの守り』！！」

ルーリは電気属性。

対して、クリスは大地。クリスが有利に見えるがルーリの動きはとにかく速い。

あらゆることから、電気のボールを放ってくる。

バシュッバシュッ……バシュッ

ボールの動きは速くなる一方。

流石のクリスも動けない。防御を取るだけで精一杯のようだ。

「なんだなんだ？すっげーよえーな、お前」

心底楽しんでいる、ルーリの高笑い。

クリスは未だ、動けずにいるようだ。

一歩も動いていない。

ただ防御をとるだけ。

バシュッバシュッ！！

そう、汗もかかずに……防御する。

「楽しそうなところ、悪いんだが」

ルーリの頭に影が出来る。

「お前……！なんで？！」

彼の首に十字架が食い込む。

「お前が攻撃してたのは俺の誕生花のサンフラワー。簡単に言うと『ひまわり』。ひまわりは俺の形を作ってたんだ。幻影のようにな」

淡々とクリスは話す。

その割には、目が完全にきれていたが。

ルーリの首に当たった十字架が黄色い光を放つ。

クリスの十字架を握る手が汗ばんでいた。彼自身、汗だくだったが、手はそれ以上といって良いかもしれない。

「てめーの十字架、このクリス・サンフラワーが引き受ける、クレスト……！」

黄色の光が空高く伸びていく。

「てめ………な、んか、に………」

普通だつたら当にクレストされているはずなのに、しぶとく生きているのは流石と言うべきか。

だが、クリスとて、今ここで十字架を離すつもりはない。というか、離せない。

「さつさと……地獄に落ちやがれええ！」

懇親の力をこめて、クレストしようと試みた時。

彼は確かに見た。今は亡き者の姿を。

「レ、ミ……？」

口は草動いたはずなのに、音が出ない。

何度やっても同じことだった。

レミは自分のことが見えていないのか、ルーリしか見ていないのが分かる。

彼女は、躊躇わずに真っ直ぐ左胸に腕を突っ込み、勢いよく引き戻す。

「う、わ、わ……」

ルーリの身体が完全に消える気配が伝わった。

このチャンスを逃すほどクリスは馬鹿じゃない。

「うおおおお！逝って来いやあっ！」

クリスの懇親の叫びが響き渡る。広い空へと。

同時に、ルーリ・アキレアの姿は完全になくなった。

何も、残ってはいない。残されるはずがない。

「レミ、ありが……レミ？レミ？」

一息つくと、彼は先ほどまでいたはずのレミ・サンフラワーを探したが彼女の姿はどこにもなかった。

「……これをアイツはなくした為に、抵抗できなくなったわけか」

ルーリをクレストして残ったものが、ひとつだけあった。

それを手にとりながらクリスは苦笑する。

クリスが手にとったのは、ルーリ・アキレアの心臓。

彼がルーリから奪い取った為、唯一残ったもの。

まるで、今でも動きそうな心臓だった。

「あゝ！ハンスのこと忘れてたっ！！」

凝縮カプセルにクリスは心臓を入れてハンスの元へ走り出す。

残り時間 40分：勝者 クリス・サンフラワー

NO・11 不本意なゲーム（後書き）

やはり、戦闘シーンは向いてないな。とドドンと思いました。
それでも、十字架³ではもっと頑張れているはずです。

又お会いできることを祈りつつ……

R
u
e

NO・12 再現に下される審判（前書き）

どんな形であれ、決着はつけなければならないのか……

NO・12 再現に下される審判

「『紅炎』！！」

プリメットの一角で炎の海が出来る。

「『紅つめ草の導』！『炎弾連射』！！」

その中から更なる炎が大砲の弾となり、相手に向かっていく。

「やはり考えは同じのようだな！」

燃え盛る炎の中からどこか楽しそうな声が聞こえる。

「僕が折角生き返らせてあげたんだ……少しは楽しませてよ？デイツク」

この状況を当人達は楽しんでいた。

戦いの最中だと言うのに、2人の顔には不思議と心地よい笑みがある。

「後悔させてやるよっフラム！」

デイツク・クローバーとフラム・ルドベキア。

2人は今度こそ決着をつけようとしていた。

全ては100年前に中断された、あの日の戦いの再現。

その戦いに幕を引こうとしているのだ。

互いの気持ちをぶつけ合い、信じる気持ちを疑わぬように、本当の正義を決める為に……

長いこと中断されていた、あの日の戦いが2人の心を支配する。

空を紅く染める炎。

それを生み出しているのはディック・クローバーとフラム・ルドベキア。

2人は前回同様に空で決着をつけようとしていた。

そして、2人が使うリーナスも

「『紅炎波』!!」

前回同様に『炎』だった。

「『炎風波』!!」

燃え盛る炎の中でディックとフラムの闘いは、更に熱い戦闘をくり

だしていた。

フラムが自分の周りの炎を集めた『紅炎波』を放てば、やや遅れ気味で防御技、『炎風波』でしのぐディック。

「っちい！紅乱剣！」

カキンッ

涼しげな音をたてて、ディックが放った紅乱剣が彼の手元に戻ってくる。

「紅月剣、か。フラム」

ディックの十八番、紅乱剣をいとも容易く返せるのはフラム・ルドベキアの紅月剣だけ。

本当かどうかは定かではないが、ディックはそう思っていた。

それだけ紅乱剣に自信があり、そしてフラムの紅月剣の威力も心得ているからだろう。

「ご名答。短時間でよくそこまで腕が動くようになったねディック。これはまた、予想外だな」

笑みを見せるフラムには余裕が見える。

「 全ては100年前の再現……」

フラムが静かに笑いかけ、紅月剣を正眼に構える。

「俺は、いつでもいいぜ？」

ディックもニツと笑いかけ、血を拭い十字架を脇へ構える。

ドドドドドド……

大地が割れていく音が響く。

その振動も、半端じゃない……まるでプリメットが崩壊していくような音。

崩壊はオーバーかもしれないが、とにかく凄まじい衝撃がハンスを襲う。

「しまっ……！」

ハンスは足場をなくしたため、風を操り宙へと浮かぶ。

「 おい、おい！止める！クリス！おい、聞こえてんのかっ？
！」

ハンスはめいっぱいの声で元凶のクリスに叫び続ける。

だが、見開かれたクリスの瞳は異様に血走り、異形な光を放っていた。

シュツ！

クリスが岩を持ち上げ、ハンスに投げ飛ばす。

岩は近づく連れて、溶岩と化しハンスに襲いかかる。

「『水の海壁』！！」

咄嗟に水の壁を作り、すぐに場所を移動するハンス。

彼の主に使うリーナスは『風』。対してクリスは『大地』。

はつきりいつてハンスが分が悪い。

『どこを狙えばいいか、わかるのに』

歯ざしりするハンスの視界からクリスが消える。

あまりにも速い動きだったのでハンスは見失ってしまった。

「どっくに……！？」

必死に探すハンス。

『！！』

背後に感じたリーナス。それはまさしくクリスのもの。

だが、クリスは彼を振り向かせる時間を与えなかった。

「ぐっ……がぁ、あ……」

言葉とはいえない音がハンスの口から出てくる。

クリスがハンスのことを力いっぱい締め付けていく。

元々、体格差も力も2人は違う。

クリスは178・8cm、ハンスは164・5cm。

そして当然のことだがごく普通の力もクリスのほうが圧倒的に上だった。

『う、で……ちぎれ……る……』

外には聞こえないものの、ハンスの体内から嫌な音が聞こえている。

このままだと本当にハンスは殺されるだろう。

うめきながらも、ハンスは首を動かしてみる。

彼の目に入ったのは、クリスの顔。

正確には、クリスの十字架の傷があるべき場所。

クリスの顔にあるべき傷は見当たらない。

代わりにあるものはルーリ・アキレアの心臓だった。

「なかなか面白いことを思いつくじゃないかフラム……最も」

カキンッ！！

「俺も、同じこと考えてたけどなっ！」

ディックがフラム目掛けて飛び掛り、それをまっけたかのように

フラムが顔色一つ変えずに紅乱剣を受け止める。

ギギギギ……

両者一步も譲らず、互いを睨みあつ。

「『嵐炎』！！！」
らんえん

「『爆炎』!!」

片手で剣を支えてディックが嵐炎を、フラムが爆炎を放つ。

互いの顔に向かって。

普通ならくらって黒こげになっているはずが、この2人は違った。

片手で剣を支え続け、もう片方では嵐炎、爆炎を放っている。

「ふっ……以前と同じく紅乱剣を支えきれなくなってきたぞ?」

「そう言うお前は……爆炎が弱まってるぜ?」

2人の顔には、未だに笑みがこぼれていた。

100年前と同じように。

「俺を、俺だと思ってたら勝てるものも勝てないぜ?」

ディックはそういうと、両手にあらん限りの力を入れる。

「『紅乱剣500』!『大嵐炎』!!」

「!?!お前……その技は下手すりゃ……」

勢いを増した紅乱剣に嵐炎は、明らかにフラムの紅月剣、爆炎をしのいでいた。

フラムの声はディックに届いていない。

だが、フラムは思わず叫んでいた。

「この技のコンボは危険だっ！お前、死にたいのかっ？！」

何故自分が叫んだかわからない。

だが、言わずにはいられなかった。

「お前を、倒せば、俺はいい」

まるで時が遡ったようだった。

今の言葉は、かつてフラムが聞き、フラムが言った言葉。

「お前の相手は、俺しか出来ねえ……ティアラ達にはお前を倒す力はまだないからな。」

それに、あいつらはプリメットの未来を築く者達。お前に邪魔はさ

せねーよ」

汗だくになりながら、ディックはそう言うと、更に紅乱剣、大嵐炎の力をあげていく。

彼の目に迷いはない。

「　　なあ、１００年前の再現は、もうやめよう」

穏やかな声でフラムが言う。

しかし、声音には悲しみが含まれていた。

フラムの紅月剣、爆炎の力強さを改めて知らされるディック。

「くっ！」

「　　ありがとな、ディック。思い出させてくれて」

フラムの呟きは、ディックには届かない。

「俺は『正義』というものを、１００年前にどこかに忘れてきたよ
うだ」

フラムは笑う。悲しそうに。

「お前の『正義』、貫き通せよ？」

フラムの紅月剣、爆炎が同時に失われた。

「！！おまつ！なにやって」

紅乱剣はともかく、大嵐炎まで制御する体力はディックには残っていない。

フラムは炎の嵐の中に飲み込まれる。

この中に入るのは至難の業だ。

例え、ディックが万全の体力をもっていても屍となって出てくる確率90%。

大嵐炎は全てのものを焼き尽くす。

「……フ…フラム？」

ようやく大嵐炎が収まった時、ディックの目の前にあるものは心臓。

紛れもなく、フラム・ルドベキアの心臓だった。

無二の親友だった者だけが分かる。

最後に心臓に託された言葉が。

ディックは迷ったが、フラムの遺言として実行した。

十字架を、心臓にかかげる。

「我、ディック・クローバー……フラム・ルドベキア。汝の最後の

願いを叶えよう

クレスト」

心臓は、あっけなくクレストされた。

ディックの目から、大粒の雨があふれ出す

「……ラム………フラム　　！」

もう、言葉を返してくる親友はいないのに、ディックは叫ぶ。

空に向かって、親友に向かって叫び語るかのように。

NO・12 再現に下される審判（後書き）

もう少し、フラムとディックの攻撃を詳しく書くべきですね。
戦闘シーンは必ずリニューアルした時に直そうと思います。

又お会いできることを祈りながら……

R u e

NO・13 悲しみを越えて……（前書き）

大切な人を目の前で失ってしまった時、
あなたは受け入れられますか？

NO・13 悲しみを越えて……

ザバア……

突然、薬品の大雨がクリスに降りかかりハンスはクリスの腕の中から脱出することに成功した。

もがき苦しむクリスを見ながら、彼は上に問い掛ける。

「おい、セラ！殺さないだろうな？！」

双子の妹、薬品作り大好き天使セラフィン・カメリアに問うハンス。

その声は怒鳴り声になっていた。

あまりにも言葉で表現できないほどの不味さと、痛みが原因だ。

「クリスが、こうなってるのは」

「あーもうっわかってるよっ！その、妙なへんちくりんの心臓らしきもののせいでしょう？これ、ぶっ掛けたから大丈夫だよ！」

セラフィンは兄に向かって、怒鳴り散らし、「さっさと心臓とりだして！クレストする！！」

と兄に向かって命令する。

「……わーっ たよ」

しづしづ十字架で取り出すハンスは、風を操って心臓を固定した。
何故兄なのに妹の言いなりになっているのか追及してはいけない。
常に、主導権は、彼よりセラフィンが握っているのだ。常日頃から。
クリスはというと、風の上に寝かせてある。

セラフィンの計算では、後5分ほどで目を覚ますはずだ。

「汝の十字架、我、ハンス・A・ポイ……」

「！？ハンス！どうしたの？」

クレストする寸前、ハンスは動かなくなってしまった。

だが、リーナスはきちんと伝わってくる。

疑問に思ったセラフィンは、ハンスにかけより、状態を見ようと診察し始めるが

「大丈夫だよ、セラフィン。ハンスはじきに元に戻る」

そうセラフィンに言ってきたのは、ハンスの対の存在リリー。最も身体はもう消えかかっていると云っていいが。

「長年、共に暮らしてきた人に消えるところは見せられない」
リリーはそう言うとルーリの心臓を見据え「『静槍流……浄化！』」

と一声叫ぶ。

常人だと手の動きは見えない。

静槍流を会得している者で無いと見えないう。一度振っただけのように見えたのに、

彼女の手の動きが止まった時には、ルーリの心臓は微塵切り以上の姿となった。

「リリー……貴女まさか」

「そのまさか。じゃ、ばいばい」

リリーは、明るく微笑むと己の心臓に十字架を当てる。

優しい顔で、声でリリーはセラフィンに応えた。心からの笑顔で。

リリーの目の前にはルーリの心臓の肉片が散らばっていた。

それをできるだけ自分の近くに引き寄せたリリー。

「やめ……！やめて！」

「我の力と共に消えるべし！自己クレスト！！」

2人の声は同時だった。

そして、ほんの数秒の違いで結果は出てしまった。

セラフィンの目の前が真っ白な光に包まれる。

目が開けられない。

「なんで、なんで……死に急いだの？リリー……！」

目から涙がこぼれ、しばし放心していたセラフィン。

ハンスとクリスが意識を取り戻すと、しっかり兄の胸で泣きじゃくる。

「つらい、場面に立ち会ったんだな、セラフィン……大丈夫、大丈夫だから」

双子であるハンスには、セラフィンの体験したことが流れ込んでくる。

全て鮮明に。

「…………リリー」

クリスが空を見上げる。セラフィンとハンスは何も言わなかったが、こういう時に泣く衝撃内容といえば、ひとつしか思いつかない。

「…………大丈夫だから、な？」

クリスがセラフィンの背に話しかける。

根拠のない言葉。

だが彼にはそれしか言えない。

そして、自分もまた、その言葉を繰り返し、言い聞かせるしかない。それでも答えることが出来ない。彼女は、泣き続ける。

その頭を静かに撫でるハンス。

彼も悲しくないわけではない。無言で、クリスに向かって微笑みかけた目。

そこから流れ落ちる涙は、とても透明で綺麗だった。

残り時間：25分

2つの人影が、倒れていた。

ひとつの人影は地にはりついた状態で。

もうひとつの人影は、宙にはりつけられていた。

「十字架を背負う者達が、十字架にはりつけられている感想は？」

冷たい目で、ふたつの十字架に問い掛ける楓伊里。

「あんたが、ここまで強いなんて、計算外もいいところ」

宙に浮かびし十字架にはりつけられているティアラが、頭から血を流しながら目を閉じて言う。

血を流しすぎたのか、彼女の顔色はとても悪い。

息も乱れている。

「だがな……はつきりしていることは、あるぜ？」

ジルが頭を無理やり動かすと、たちまち地面に血が流れ始める。

彼は腹部に穴があいていた。そこがわずかに異臭をはなつ。

「「負けんのは、あんただ！楓伊里」」

ティアラとジルの口元がわずかに上に上がる。

確信に満ちた顔で。

「もうじき、クリス達も帰ってくる。ルーリとフラムをぶっ倒してね」

「あいつ等が帰ってきたとき、お前に勝ち目は……無い」

自信に溢れたこの言葉。

一体どうしてここまで信頼できるのか。

どうして言葉に出せるのか……不思議で仕方が無い伊里。

「残り25分となった今、よくもそんなことが」

「あまり、俺達の絆を甘く見ないことだな」

先ほどとは違う強い口調で、ジルが伊里に言い放つ。

「後で泣きを見るのは、貴女って決まってる……！『運命』という名の元にね」

静かにティアアラが伊里に返した。

ティアアラは自覚していた。自分の視力が落ちてきていることに。

下にいるジル、伊里の姿がぼんやりとしか見えない。

ティアアラは静かに目を閉じた。

「……………」

無言でハンスとセラフィンの傍にいるクリス。

セラフィンは、まだ泣いている。

そんな彼女に優しくハンスが話しかける。

「リリーは、自分で分かってたんだ。『消えることを』。そして自ら願ったんだ『命を絶つことを』」

「それにしたって！全てをひとりで背負わなくても」

ハンスの優しい言葉に、セラフィンは反論するがハンスは穏やかに笑う。

「もし、お前だったら、どんな行動をとってるというんだ？」

穏やかな笑みを崩さず、ハンスは妹に問う。

答えは、分かりきっているのに。

セラフィンが言葉に表そうとする。

だが、やはり目をそらし、口をつぐんでしまっていた。

当たり前すぎて、言葉に出来ない。

言葉に、することが、怖い

NO・13 悲しみを越えて……（後書き）

自らの命を絶つ、と言つ割にはあっさり片付けてしまった気が……
ジルとティアラの状況も、もっと描写が必要ですね

では、又お会いできることを祈りつつ……

R
u
e

NO・14 待ちに待った集結（前書き）

全ての状況を把握できていても、正気でいられますか？

NO・14 待ちに待った集結

『まだまだああ！『光魂』連射！』

十字架から溢れ出す光魂は、光弾砲で空けた穴を徐々に広がらせていく。

ソニカは水を被ったように汗をかいていた。

だが、力尽きていく感じはない。

むしろ、技を使えば使うほど、力に満ちていく感じがする。

『どうやら、現実になったみたいだ……ティアラ、ジル…何とか持ちこたえてくれ』

ソニカには感じとることが出来た。

リアルタイムで見ているような感じで、映像が頭の中に滑り込んできく。

ルーリ、フラムを倒したことも、クリスが洗脳されたことも、リリ―が自らの意志で死んだことも。

全ての出来事を把握していた。

『後、少し……！』『光磨砲』！！』

光の洞窟に巨大な穴が見事に空けられる。

歪んだ空間が視界に入った。

『 真の道を1度で見つけなきゃいけないみたいだな』

歪んだ空間を見つめながらソニカが呟く。

何故そんなことがわかるのかと思うだろうが、それは目の前の光景を見ればわかることだった。

姿を見せては、消えていく魔物達。

魔物達は歪んだ空間に造られた道を歩いていく。

が、皆が同じ道を歩いているわけではない。思い思いの道を歩き進んでいる。

だが、少し歩いたと思えば魔物は消されていった。

一歩でも間違えれば、十字架の制裁を受ける……そういう仕組みになっているようだ。

『 どうするべきか……って え？』

ソニカが握っていた十字架が光りだす

「何を…何をいきがっている！？ティアラ・ジプソフィラ！」

リバーズ・クロスを右胸に突き当てる伊里。

小さくうめくティアラ。

「……あ……たは何に怯え、てる？あんたの心は乱れてる……あたしとジルの言葉によって。今のあんたは隙だらけなんだっ！」

出せるだけの声で叫ぶティアラ。

己のリーナスでリバーズ・クロスを弾き飛ばす。

目の前にいるはずなのに、伊里の姿を見ることが出来ない。

「言いたいことは……それだけかつ！」

再度伊里がリバーズ・クロスを突きたてようとする　　が！

「『太陽の光壁』！」

リバーズ・クロスが伊里の手を離れる。

「！」

小さな声を漏らし、伊里が手を伸ばすが

「『風の召集所』！」

「『緑の砦』！！」

その呟きも、一瞬の遅れで無駄に終わる。

四方八方から聞こえてきた声は、どれも聞き覚えがある声音。信じがたかったが、ティアラとジルの言う通りとなっていた。

「まさか、本当になるとは、ね……」

苦汁の表情で睨む伊里。

リバーズ・クロスは手元に無い。

ハンスの風でリバーズ・クロスが手の届かぬところへいき、セラフインの緑の砦で取り出すことが不可能となっている。

「どうやら、相当、世話してくれたようだな、伊里」

ティアラとジルの姿を見て、十字架を一振りするディック。

「こっから反撃させてもらっぜ！『紅炎』！！」

伊里に向かって炎が放たれる。

紅炎は伊里を追いかけて回す。普段はしないやり方。

彼、ディック・クローバーが炎を操っているのだ。

瞬きせず、伊里を追いかける。

その間にセラフィンがジルとティアラの回復を試みる。

ハンスとクリスも手伝っていた。

伊里のことを炎が飲み込もうとした時、第三者の声がある場にいた。

全員の耳に届けられる。

「『光魔弾』！」

光は伊里を守り、炎を消し去った。

「私のことを忘れちゃいけないですね。さあ、ここからが本番ですよ」

キャロル・ヒソップがにこやかに呼びかける。

残り時間：16分

NO・14 待ちに待った集結（後書き）

信じる気持ちは、いつももっていないといけないと思います。
一度でも疑ったりすれば、それは脆く崩れ去ると思います。

では、又お会いできることを祈りつつ……

R u e

NO・15 窮地・待ち人（前書き）

仲間が窮地に立った時、あなたは動揺を隠し切れますか？

NO・15 窮地・待ち人

光り続ける十字架をソニカは、見ているだけだった。

彼の十字架は元から光を放っていたが、ここまで強い光を放ったことは初めてだった。

『なにがしたい？お前は何を教えようとしているんだ？』

己の十字架に心の中でささやく。

その瞬間、十字架は彼の手から離れ、宙を浮く。

風も無いのに光を放ちながら十字架は歪んだ空間の道の上に踊り出る。

『ついてこいつてか？』

そう言つてソニカは光の元へと歩き出す。

彼の十字架は、ソニカをひっぱるように誘導していく。

『どうやら、俺に手伝ってほしいことがあるようだな』

十字架の後を追う足取りは、とても重い。

だが、ソニカは足を止めずに懸命に追いかけていく。

一刻も早く、ここを抜け出し力となる為に。

風が吹く。

風はまるで透明な壁のような働きをする。

十字架を背負う者達と、闇の心に支配されし者達の間に来る壁。

簡単に手を伸ばせる距離なのに、両者共じつと睨みあっている。

不意に風の壁がなくなった。

あっけなく。

「『蒼い……雷!!』」

「『ひまわりの戒め』!!」

ティアラの前方からの攻撃と後方からのクリスの攻撃をくらう伊里。

この2人、犬猿の仲のわりには、戦闘時のみ息があっている。

「……っ」

伊里は身体にまとわりついた、ひまわりを取ろうともがく。

が、もがけばもがくほど、ひまわりの数は増え、息がしにくい状況

に落ちる。

「てめえ……まだ万全じゃねーだろ?!」

クリスが怒鳴った相手は伊里ではない。ティアラだった。

しかも、かなり凄んでいる。

頭に四つ角マークをでかかと貼り付けて、ティアラに怒鳴るクリス。

今にも飛び掛りそうな勢いだが、それも仕方ない。

蒼い雷は気持ちひとつで殺せる技。

まあ、蒼い雷に限らず他にもそうだが、ティアラが繰り出す蒼い雷は、その気になれば骨までをも焼き尽くす。

ティアラはそのつもりで、蒼い雷を放ったに違いない。

なのに。

なのに、伊里に放った蒼い雷は、彼女に致命傷どころかかすり傷ひとつに終わっていた。

「……え……あ、なんでだろ………?」

本人も不思議がっている。

攻撃タイプのティアラが攻撃を外すということは珍しい。

というか、クリスだけではなく、ジル達もこんな彼女は見たことがない。

舌打ちしながらも、伊里を捕らえたままティアラのことを観察し始めるクリス。

獣並に目がいいので、離れていても彼には見えるのだ。

【クリス、ひまわりの戒め絶対にとくなよ？】

そんな時、頭の中に滑り込むひとつの声。

その主は、真っ先にティアラに近づいたジルのもの。

【ティアラは目が完全に見えていない……】

嘘の様な言葉が滑り込み、反芻する。

だが、なんとか顔色変えずに伊里を捕らえていた。

その中で説明は続く。

【頭を深く怪我してる……そこからの大量出血……致命的だよ】

そうやってきたのはセラフィン。彼女の声は、かすれていた。

治療専門の彼女が言うのなら、疑いようもない。

本当のことなのだ。

目の前が、真っ暗になった気がした。

だが、ここで動揺を見せたら確実に負ける。

「ティアラ・ジプソフィラ？どうかしたんですか？貴女が攻撃を外すなんて、まるで目が見えてないようだ」

大げさな声で伊里に届くよう喋るキャロル。その目は笑っていた。

快感という表情をして、この事態を楽しんでいる……そんな顔。

「へえ。そうなんだ？ティアラ・ジプソフィラ。いーこと聞いちゃった」

満面の笑みで伊里は言った。幼児が、玩具を見つけたように無邪気な目で、ティアラを見る。

ひまわりの戒めに囚われている身であると言つのに。

「『炎上』!!」

「『熱風400』!!!」

ディックがキャロル目掛けて炎を放ち、続いてハンスが熱風で炎の勢いを増大させる。

「この程度で、私を倒そうとしているのかい？」

『やるだけ無駄だからやめれば?』というニュアンスで声を出すキャロル。

「駄目で元々!やらないよりましだ!!」

ディックとハンスの声が重なった。

『

』

ソニカは固まっていた。

前方にある人影の正体を知って。

『何で、ここに……？』

そう呟きながら、彼はひとつの答えを導き出した。

『どーりで、貴女だけ情報が入ってこないはずだ』

ゆっくりと歩き、近づくソニカ。

はつきりと人影の顔が見えるようになる。

『俺のこと、待ってたようですね、崎原蓮華さん』

ソニカの目の前にいるのは、蓮華だった。

「やっと来ましたね、ソニカ・アイリスさま。キャロル・ヒソップ
さまの後を継ぎし方」

蓮華は深々とお辞儀をした。

「え？え？！俺は、そんなつもり……」

後ず去るソニカ。だが、蓮華は気にせず続けた。

「『光のリーナス』を扱える者が、プリメットを継ぐのです。必ず
しもプリメットの者がならなきゃいけない、ということはありませ
ん」

蓮華は少し早口で、そう告げる。

「時間が無いので、手っ取り早くお話します。というか、見るだけで理解できるはず……右の方を見てください。扉があるでしょう？」

蓮華の言うとおり、右には扉が見えた。

少しくらいが、左右に3つずつの花。頂点にもひとつの花が刻まれているのが確認できた。

「
」

驚きのあまり声が出ないソニカ。

「刻まれている花には、役目があります。もう、お分かりだと思いますが……」。

ですが、そう簡単に、全ての花が同時期「に揃うことはありません。それでもキャロルさまは待ち続けました。

このプリメットを創った429年間、ずっと……」

蓮華は静かで、それでいて、早口だったが、内容はきちんと把握できた。

一言一句、残さず全て。

ソニカの背中を汗がつたう。冷や汗という名の汗が。

「お話はここまでです。その扉を開ければ十字架背負う者達と合流できます。さあ、早く行って下さい」

苦しそうな蓮華の声。

今気がついた。自分と話している蓮華は、よくできた『映像』だということが。

「おい！、どうして！」

「いけば、わかります……ああ、キャロルさまからの伝言がありました」

そういつと蓮華は苦しみを耐えるように伝える。微笑しながら。

「『最後で迷うな』」

聞いた瞬間、扉が開く。

押してもいないのに、自動的に。

「お、お……ちょっと待て」

ひたすら彼は落ちていく。

彼の目には扉は、もう映らない。

NO・15 窮地・待ち人（後書き）

本当に今更なんです、場面が飛び飛びでわかるでしょうか？
ティアラが好きなので、彼女を中心に書いていますが
ご了承を下さい。

では、又お会いできることを祈りつつ……

R
u
e

NO・16 反撃開始！（前書き）

ありえないと思うことは、結構現実には起きるものだと思いますか？

NO・16 反撃開始！

「『点火』！！」

伊里を捕らえていたひまわりが、一気に燃え尽きる。

「おわっ」

クリスは慌てて、手を引つ込めた。

その間に伊里は緑の砦に向かう。

「この程度で、リバーズ・クロスを取り上げた気でいるわけ？」

セラフィン、ハンスの方を向きながら、呆れたように尋ねる伊里。

「何がしたいの！？」

セラフィンが食って掛かると

「簡単なことよ。『リバーズ・クロスよ我手に帰るべし！』」

伊里が左手を伸ばしながら、緑の砦に言い放つ。

直後、みるみるうちに緑の砦は壊れていった。

セラフィンの目が丸くなっていく。

「……私の、みどり、のとりで……が」

「ボヤボヤしてんな！セラ！」

驚きで動かないセラフィンを抱え、逃げるハンス。

伊里から異様なリーナスを感じて振り向くと、伊里がリバー・クロスを振り下ろすのが目に入る。

「『炎の渦』！」

伊里の放った炎の渦は巨大化してくる。

それが幻影なのか、本物なのかわからない。

ディックでさえ、答えが見つからない。

「――！！蓮華さんが――！！」

ハンスの叫びに、素早く反応したのはジル。

蓮華は半死状態で、宙に浮いている。逆さづりで。

「遅い！」

伊里は笑いながら渦をコントロールする。

「伊里の奴、計算づくか？！」

テレポートするジル。

「心流『魂心刀』（こんしんとう）――！」

蓮華を包んでいた光の玉を両腕で挟むように動かし、ぶっ潰すジル。念のリーナスを主に使う彼だからこそ、使える技。『心流』（しんりゅう）。

己の心で全てを把握し、相手の弱点を見る技。

リーナス消耗もかなり激しいので、滅多に出すことはない。

「つつ！何つつ電流だ……よかったギリギリ、息があ、る……」

蓮華をなんとか引きずり出し、抱えたジル。迷わず、テレポートを試みるが

息があがって、テレポートできない。

『……滅多に使わねー、心流だからか……？消耗、はげし……』

迫ってきた炎を、何とか確認したジルは、ひとつのことを決意した。

「ジル！」

「きさまごと、焼き尽くしてくれる――！行け――！」

ジルの目の前に炎が迫る。

『……蓮華さんだけでも……！』

ジルの決意。

それが、蓮華のみをテレポートさせること。

だが、仲間は知らない。

彼の決断に。

「……………いつけえ！」

ジルは叫び、テレポートさせる。

蓮華のみを、テレポートさせた……蓮華のみをテレポートさせるはずだった。

シュッ

ブオオオ！！！！

彼が仲間の元に帰ってきた時と、炎が先ほどまでいた場所を飲み込むのは同時。

「え？」

呆然とするジルと、ぐったりとした蓮華が仲間の元へ戻っていた。

「驚かせんなよ」

「もう駄目かと思った……」

ハンスとセラフィンが安堵する声が聞こえる。

「俺、俺は　蓮華さんだけを助けようと……」

目をパチクリしながらジルは『何が何だかわからない』と言つ顔をしていた。

そんな時、伊里の声が遠くから降ってくる。

「ジル・パーシカリア。姑息な手を使うわね」

何を言っているのか分からなかった。

次の言葉を聞くまでは。

「姑息、な手???どういうことだよ……?!」

ジルは、伊里を睨みつけるが、その声は震えていた。

怒りのためか、それとも別の意味でかは分からない。

「最後に言ってた言葉、教えてあげるわ。

『貴方は死なないで』ですって!あんたが考えたんでしょ?」

可哀想な子……でも、馬鹿ね。貴方の言いなりになるなんて、馬鹿
げてる」

伊里はそういうと、キャハハハと笑い続ける。

今の説明で、分かった。

伊里が誰のことを言っているのか。

何故、自分が震えているのか。

だが、あえてジルは確認を取った。

「…………お前が言ってる『馬鹿』な奴って、クルルのことだな?」

声が震える。

それとは全く違う声音で伊里は楽しそうに肯定する。

飛び切りの笑顔で。

「ええ、そうよ！あの子、必死になって貴方のことを庇ったのよ？
信じらん無い！自分の命を捨ててまで、どうして貴方を救ったのか
が！」

キャハハハッキャハハ！

キャハッツキャハッハハッハハハハハハ！！！！

狂ったように笑い続ける伊里。

「あんのやろっ！！」『大地の……』

クリスが伊里に向かって攻撃しようとした時

「や、元気かい？十字架背負う者達よ」

瞬時に、にこやかな笑顔のキャロルが飛び出してきた。

リバース・クロスが光り輝く。

「じゃ、ばいばい『光魔砲』！！」

至近距離から、光魔砲が彼等に向かってくる。

「消え去れ！十字架を背負う者達！」

「私も参加っ！『渦潮』！」

光魔砲を押すように渦潮が働く。

「全て、消え去るがいい！！」

砲弾のような光魔砲が渦潮をとりまいて、彼等に近づき

ドチュッー

ン！！

2人の目の前には何もない。

何も、残っていない。

「何も残さずあの世に逝ったわね……キャハッハッハ！」

伊里が再び笑い出す。

「そりゃ、前には何も無いだろうねえ」

伊里の笑い声がピタリと止まる。

キャロルも表情を一変させた。

「何故」

おそろおそろ振り向いたキャロル。

そこにいたのは、ソニカ・アイリス本人。

「俺、以前も言ったよな『俺のこと、忘れてません?』って」

ソニカが十字架を正眼に構える。

その後ろには、完全回復した蓮華とティアラの姿があった。

「ラスト7分23秒……勝たせてもらっつー!」

今、ここに十字架背負う者達が全員集結した。

NO・16 反撃開始！（後書き）

サブタイトルはソニカ登場にあわせるか、ジル達の怒りを書くか迷いました。

サブタイトル、どうやって決めてますか？

では、又お会いできることを祈りながら……

R
u
e

NO・17 ふたりでひとり (前書き)

人は、善人と悪人に分されない。

ただ、善の心を使うか、

悪の心を使うか、それによって運命が決まるのだ

NO・17 ふたりでひとり

そこには、たしかに緊張感が漂っていた。

見えない恐怖もそこにある。

それだけ互いの境界線は深いもの。

「
どうやって帰ってきたというんだ？」

それに、何故そこまで使いこなせる？光のリーナスをお前が」

キャラルは一気にまくしたてる。彼にとっては都合の悪いことだった。

自分が永眠につき、プリメットを守るのは『光のリーナスを持つ者のみ』

ソニカ・アイリスは、彼の後を継ぐ者。だから、彼にはむやみに攻撃できない。

伊里と2人で他の花天使達を攻撃してしまえば事は早い。

だが、ソニカがそれを阻止することは目に見えている。

下手したら彼を殺してしまいかねない。

「キャラル！」

「光磨砲!!」

伊里とソニカの声が同時に届く。

考えをめぐらせていたので反応が遅れた。

ソニカの放った光磨砲がキャロル目掛けて伸びてくる。

「光魔……」

「『光の刃』!! 遅いよ、攻めるの」

キャロルが打ち返そうとした瞬間、ソニカの刃が振り落とされる。

怪我也負わせることが出来なかったが、今のソニカにとっては丁度いい。

ウォーミングアップとして。

「はあっ!!」

カキンツと金属同士のぶつかる音。

光磨砲、光の刃を放ったソニカは間髪いれずに、十字架を振り落とす。

流石と言つべきか、キャロルは連続コンボをくらいながらもソニカの十字架を防いで見せる。

ソニカは小さく舌打ちをするが、その顔に焦りの色は見えない。

「……『リーナス』は『心』にひどく反応するはず。」

『守りたい』という『心』が強ければ、年季なんて関係ないっ!』」

十字架を離さずに、身体で宙に弧を描くソニカ。

体操競技の鉄棒のように、宙を舞いキャロルの後ろにつく。

「下段蹴りい!!--!」

ソニカの蹴りがキャロルの太股をえぐる。

血が、飛び散り、ソニカも血を浴びた。

「キャロル……お前がこの程度でやられるとは思ってないぜ?」

余裕の笑みをうつすら浮かべるソニカ。

「さあ、かかってこいよ」

ソニカの目が細く鋭くなっていく。

「あれま。ソニカってば、いい目してんじゃない?」

少しずつ視力が回復してきたティアラが笑う。

「ティアラ、動かないでよ。……それにしても、ソニカ凄いわ。一瞬触っただけで、ここまで回復させるなんて」

ティアラの視力を戻そうと頑張っているセラフィンが感心したように言う。

その隣では完全回復した状態の蓮華が目をつぶっていた。

なにか、迷っているように。

【 答えは見つかった？蓮華さん】

ジルの声が頭の中に入ってくる。

反射的に目を開け、振り向く蓮華。

だが、ジルはそ知らぬ顔をして蓮華を見ようとしもしない。

【 俺達は、どうすればいい？】

声と同時に伊里の気配が近づく。

「『渦潮の鎖』……!」

伊里がりバース・クロスを振り上げ、勢いよく下ろす。

地面にりバース・クロスを刺すかのように。

ティアラ達の周りにある空気の数秒動きを封じ、瞬時に彼等を渦潮の中に引き込んでいく。

「逃れようとしてごらん……バラバラに見えるこの渦潮。

ほんとはひとつなの……流れに逆らう者がいれば、全員逝く仕組み。ただひとつの境目を切らない限り、ね」

冷たい目で伊里が淡々と話す。

「どうしようかなんて考えても無駄なだけ！キャハハハッハハアハッハ」

などと伊里が高笑いする中、

「ケホッケホッ！うゝ海の味がするよお」

セラフィンが咳き込みながら兄に訴える。

「渦潮だから当たり前だろ？俺的には、やっぱり温泉の方がいいんだけどね」

「俺、川がいい。温泉は熱いし、海は塩っ辛いし……やだ」

ハンスの言葉にジルが食いつく。

「あたしや、なんでもいいわ。楽なところなら」

ティアラがグルグル回りながら、のほほんと発言し

「てめーは寝てえただけだろーが！」

と鋭く突っ込みをすかさず入れるクリス。

「まあまあ、クリス。カナヅチだからってひがむなよ」

それを楽しそうに煽るディック。

『ひがんでねえよ！』と赤くなりながら反論するクリスだが……どこか間違っている気がする。

彼等の顔や行動は、この緊張感のあるところの会話ではない。

ごく普通の日常会話。

自分達が死ぬかもしれないというのに、そんなことを感じさせない。

「……あ、貴方達………私を馬鹿に」

「彼等に頼んだだけよ、伊里。驚くことじゃない」

蓮華は顔を伊里に向け、右手で渦に向かって十字架を切る。

静かな声とは対象的に大きな音をたてて消えていく渦潮の鎖。

声の主は、**崎原蓮華**。

光の心をもつ者。

もうひとりの楓伊里であり、蓮華の闇の心が実体化した人間。

「蓮華が頼んだ？フフツ……アハハ！キャハハハハ！あんたに何の力がある？何の力もなく、さっきまで死にかけてた奴に！」

リバーズ・クロスを投げつける伊里。

周りには電流が走っているのがよくわかる。

蓮華は目を閉じ、両手で小さなクロスを持ちながら叫んだ。

「『今、真の姿を見せるべし』！」

「さあ、感電死しな！」

全てが一瞬のできごとだった。蓮華と伊里を白い光が包み込む。

ドテッ

「イテッ」

「どわっ！」

ズドンッ

「わっわわ！」

渦潮の鎖が解き放たれた途端、地面に落ちる花天使達。

たいした高さではないが、痛いものは痛い。

「つつ……成長したのはソニカだけじゃあなかったんだね」

頭をさすりながらセラフィンが呟くとディックも同意した。

「だな。見直したよ、あの2人」

「とにかく、俺達はしばらく待機か」

立ち上がりながらクリスが上空を見る。

「そうなるな。でも油断しないようにしないと」

クリスにならない、ハンスが言う。

彼等が見上げる青空には4つの人影が確認できる。

「さあ、いわれたとおり、手出しはしない。呼ばれるまでね」

自分達の力、見せ付けなさい。いえ、見せ付けて、私達に」

ひとりだけ座りこんでいるティアラがささやくようにいう。

そう、全ては計算どおり。

ティアラ達が、伊里のもつリーナスに気づかないわけがない。

そして、反撃せず、術中にはまるわけがないのだ。

「……さ、蓮華さん。思う存分、暴れなよ」

ジルが微笑みながら、空へと言葉をかける。

『自分自身に、負けないように……』

ジルの十字架をもつ手に力が入る。

目は、瞬きをせぬよう、見開いて……空を見続ける。

2組の闘いを、見過ごすわけにはいかないから。

カキンツカキンツガキンツ！！

十字架とリバース・クロスが交錯する音が鳴り続ける。

2、3度打ち合いしたら両者押し合いになり、同時に離れて、また2、3度の打ち合い。

これが何回繰り返されているのだろう。

「なあ、どーして、そんなに慌ててんだ？何故本気で俺にぶつかってこない？」

ソニカがキャロルの腹に十字架の先端を素早く押し付ける。

「ぐはっ……！」

キャロルの整った顔が歪む。

それもそのはず。

ソニカは十字架を押し付けた反動で、またもや宙に弧を描きキャロルの背を蹴っ飛ばしたのだ。

「まあ、あなたの心が乱れるのも無理は無い、か」

ソニカの呟きを、キャロルは否定する。

「私は、手を抜いては」

「俺が死ぬとあんたは都合が悪い。あくまで『あんたは』だけどな。『炎光弾』!!」

キャロルの腹に十字架を押し付けたまま炎光弾を放つソニカ。

素早く側から離れたが、キャロルが倒れる気配はしない。

「俺はプリメットでできることをするだけ。」

あんたの操り人形には絶対ならない。……そのために俺は闘うんだ。俺だって花天使なんだから!」

ソニカの姿が消え、キャロルが気がついた時には彼の十字架が降って来た。

「『光凍剣』!」

音は聞こえなかった。

だが、キャロルの左腕を切り落としたのは事実だった。

しゅっぱーん！

妙な音をたてながら、リバー・クロスは伊里の元へ弾き返された。

「な！」

絶句する伊里。対して蓮華は落ち着いていた。

「貴女の持つリバー・クロスが大きいなら、クロスも同じように大きくなると考えなかった？」

蓮華が自然体でクロスを握る。

クロスは淡いピンクの光を放ち、その光は蓮華を包み込む。

「全ては、ルーリとフラムを召喚した時から始まった。貴女は『自分だけで召喚した』つもりでしょうけど。」

貴女は私で、私は貴女。2人でやっと、1人の人間だってこと、忘れたの？ 貴女の罪は、私の罪……」

蓮華は間合いを詰め、クロスを伊里の喉に突き立てる。

瞬きしている間に、伊里に詰め寄ったのだ。

伊里は完全に動きを封じられたようなもの。

「だから、一緒に罪滅ぼししよう？ 貴女は私の心にかけている存在。誰でも持っている人間の『弱さ』の実体化したもの。一緒に無くならないとおかしいよ」

蓮華の頬を涙がつたう。

NO・17 ふたりでひとり (後書き)

対の存在というテーマからそれたような気もしますが。
伊里と蓮華の闘いによろやく手が出せました。

ここも、もっと描写が必要ですよね……

では、又お会いできることを祈りつつ……

R
u
e

NO・18 赤い霧雨（前書き）

勝者と敗者

それは、技や身体能力でも決まるかもしれない。

でも、もっと大切なことがある気がする。

NO・18 赤い霧雨

ズドーン！！

音と共に空の一角が黒くなる。

ブリメットの空が、一部分、黒く染められる。

かといって、ティアラ達に動揺は見られない。

あくまで冷静だ。

冷静に、状況を見守っている。

「『黒弾』、か」

空を見上げながら呟くディック。

「でも、蓮華さんも負けてないよ」

返すティアラの言葉通り、蓮華が『白刃』を手に持ち伊里に切りかかる。

長さはざつと1・5 m、太さは直径5 cmといったところか。

本来肉眼で見えないことが、ティアラ達に見えているのは、

両眼2・0のセラフィンと魔術師と唄われるジルの透視能力のお陰だ。

ただ、音声ばかりは届かない。

まあ、音声なんぞ、彼等に入らない。

とにかく状況を把握で切ればいいのだから。

ティアラ達が観察しているのも気づかずに、蓮華と伊里の闘いは続いていた。

どちらも、いい動きをしている。

「貴女の罪は私の罪。だから、私も消えなければならぬ！
罪を償う為に！」

ビュンと白刃を素早く振り落とす蓮華。

だが、白刃は空を切るだけに終わる。

コンマ何秒かの差で、伊里は蓮華の後ろへと移動したのだ。

「はっ！笑わせてくれる。そうは言っても、あんたは私を殺そうとしてるじゃない。」

あんただけ生き残るつもりなんだってことがバレバレだよ」

ガキンッ

蓮華は振り向くと同時に白刃をふるった。

白刃とリバース・クロスがぶつかり合い、動けなくなる2人。

「あんた、本気でそう思っているの？私達は同じ血が流れてると言うのに…何も感じる事が出来ないわけ」

ギギッ、ギッ……

空中で押し合うのも、白刃を使うのも蓮華には何もかもが初体験。

力のコントロールなんかできない。

一発一発を全力でぶちかます……それしか出来なかった。

体力、精神力がともに低下していく。だが、蓮華は弱みを見せないようにした。

それが喋るという行為に走っているのだろう。

「私達は『シーナ・クロバー』の血を受け継ぐ者……血は何も教えてはくれないの？」

ゴフッ

蓮華が伊里の腹を蹴っ飛ばし、上空へと飛ぶ。

「『白刃乱舞』！」

一本しかない白刃は蓮華に投げられたとたんに何百という数に増え、

伊里に向かっていく。

「くっ……なめんな！『黒刃乱舞』！」

身体中に怪我をしながらも、伊里は反撃に出る。

「少しでもかすめてごらん！黒刃は、スズランの毒を塗り固めてできたもの。じわじわと死の恐怖を味わうといい！」

伊里が容赦なく黒刃を投げつける。

空から地上へ赤い雨がパラパラと落ちてくる。

霧雨のように、赤い雨が降り注ぐ

ポタン…ポタン……ポタン………

ゆっくりと空から降る血の雨。

赤い血の雨。

誰のかなんて、考えなくともわかる。

今、一番リーナスが弱い者の血なんだから。

「やるべき、か？」

静かに口を開くディック。

視線を全員になげながら彼は、もう一度聞く。

「俺達は、動くべきか？」

でも誰も何も言わない。動かない。

ディックの問いに対しての答えがこれである。

ディックは、どこかホツとしながら再び腰をおろす。

血の霧雨は、まだやまない。

だが、ティアラ達は動かない

ひゅるるるるる

ドサッ

まぬけな音をたてながら、空から腕が降って来た。

「……どーやら、ソニカも頑張ってるみたいだね」

セラフィンの一言に、彼等の顔は和らいでいく。

目を、蓮華達からソニカ達に移動するセラフィンとジル。

どの顔も、ほころんでいる。

不安と言う文字は、全くない。

「フフ、フハハハハハハ！まだまだひよつこの癖に、ここまで私をてこずらせるとはね。誉めてあげよう。ただし、ここまでだ」

左腕を失ったキャラルの表情が明らかに変わっていく。

ソニカの目の前で。

ティアラ達の元に落ちてきた腕、それは正真正銘、キャラルの左腕

だったのだ。

戦闘の中で、ソニカの成長ぶりが思う存分、発揮できていた。

完全に発揮できているわけではない。

ソニカは今、発展途上。

もっと時間があれば、彼は恐ろしい力を出すに違いない。

一方のキャロルといえば、確かに声も太く、幾分、大きくなっている。

178のソニカと2mを軽く越えているキャロル。だがそんなもの関係ない。

結果的に必要なのは、リーナスが上か下か、そして心の問題なのだから。

「巨人と小人」

他人事のように呟くソニカは、急上昇して

「『金光刀』！」

十字架を金光刀……簡単に言えば光る刀にして、一気に急降下していく。

「おらああ！」

懇親の力をこめて、キャロルをぶった切ろうとしたソニカだったが。

「言っただけだ……『誉めるのはここまでだ』と。『光手刀』!!」

キャロルの右手がソニカの十字架を粉碎する。

一瞬で。

この事態をソニカが理解するのに時間を要した。

ついさっきの、キャロルのように。

「『風光弾』（ふうこうだん）!」

キャロルのリバーズ・クロスによっていとも簡単に、ソニカは吹っ飛ばされる。

ビュオン!! ゴ ン!!!

ソニカが何かに激突した音が、プリメットに響き渡る

NO・18 赤い霧雨（後書き）

効果音、ちょっと違うかなと思ったRueです。
ティアラ達を休憩させ、的を絞ってみたんですが、いかがでしょう。
では、又お会いできることを祈りつつ……

Rue

NO・19 償い（前書き）

自分自身の醜いところから目をそらさないのは、
受け止めるのは、とても勇気がいるのだ。

NO・19 償い

プリメットを象徴する時計台に激突するソニカ。

正確には、時計台の鐘に激突したのだが。

ずるずると落ちるソニカは辛うじて、時計の針に服がひっかかり命は助かった。

だが、当の本人は完全に気を失ってしまっている。

「ソニカ!!」

痛みも忘れ、蓮華は伊里を残しソニカの元へと駆け寄ろうとする。

だが、そうさせてくれないのが現実だ。

「何をしにいくんだい？蓮華」

太い声が頭の上から聞こえてくる。

言わずと知れたキャロル・ヒソップの影で蓮華が黒く染まってく。

「言わなきゃわかんないわけ？」

全身傷まみれで顔色の悪い蓮華は見上げもせず、キャロルに小馬鹿気味の返事を返す。

話したくない、という気持ちが彼女をとりまいてるように見えたのは、キャロルの目の錯覚ではないだろう。

黒く染まっても、信念を希望を捨てない者の底力とはそういうものだから。

彼女の目は、まだ生きている。そして、怒りに満ちているのが明白だ。

「『ラナンキュウスの豪花』！！」

蓮華がキャロルに向かって放つ花、ラナンキュウスはかぶれ等の原因となる。

少し触ったりするだけならまだしも、ずっと触りっぱなしだと、ものすごく痒く、皮膚は腫れあがる。

「あんだでさわらなくても、私が思う存分触らせる！全身痒くなるくらいにね！」

リーナスを上げる度に全身の血が抜けていくのを蓮華は感じとっていた。

そして、今ここで集中力をとぎらせてしまえば、確実に死がまっているということも。

「くっくっくっ！」

キャロルにとりついたラナンキュウスを懸命に取れないようにする蓮華。

彼女はこれをする事で精一杯だった。

だから、気づくのが遅れたのだ。

背後にいる人物のことを……。

今まで戦ってきたものが誰なのか、完全に頭から抜けていた。

「『降魔弓』……」

シュパツと静かに音をたてた1本の弓。

キャロルの影で、彼女もまた身を黒く染まらせて吐いたが、手に持つ弓は鋭さが分かるくらい光っている。

「え……………」

蓮華は何が起きたのか把握できなかった。

そして、自分を背後から弓を放った者が誰なのか、考える余裕もなかったのだ。

赤い血が、流れ落ちていく。

そして数滴、矢を放った者の顔に飛び散った。

「……………」

他ならぬ楓伊里の顔に、蓮華の血が滴り落ちる。

狙いは勿論、最初から蓮華を狙っていた。

だが、どこか表情はさえない。

「見事だ」

キャロルは何事もなかったように、ランキウスを取り除きながら伊里に声をかけた。

だが、伊里は無表情で、蓮華を受け止め、見つめる。

闇のように黒い目から、透明の滴が顔をなぞる。

伊里の腕の中で、蓮華は動かない人形と化していた。

ゴローーンゴローーン……………

鐘が鳴り響く。

5分たったという合図の鐘が。

「俺達の、勝ちだな」

キャロルが下にいるティアラ達に笑みを見せる。

「
いいえ。貴方は負けるわ、キャロル・ヒソップ」

何が彼女を戻したのか……はたまた今まで演技をしていたのかはわからない。

ただ、だが、ティアラ達の見た伊里は、目に生氣を取り戻しかけている。

蓮華を担ぎ、キャロルに弓を放っていく。

シュツシュツ、シュツ……！！

降魔弓の連射。

それら全て粉碎しながら、後退するキャロル。

あまりにも早いので、キャロルは防戦一方だ。

「伊里！」

「蓮華が言ってた……私達は2人でひとりの人間だと。」

そして、シーナ・クロバーの血は何も教えてはくれないのかと」

無表情の伊里から出ていた声ではない、今までとは違う熱い声。

本来の彼女の声がプリメット上空に響き渡った。

伊里の目が完全に生氣を取り戻した。

「降魔弓を放っておいてなんだけど……蓮華の言うとおり……私達は2人でひとりの人間。」

血が教えてくれる……私のすべきことを！蓮華がしたかったことを！『黒魔爆炎拳』！」

至近距離から放たれる伊里のリーナス。

巨体のキャロルでさえ、身動きがとれなく程の力。

その隙に、本当に少しの隙を見つけ、ソニカ・アイリスの元へと駆け寄る伊里。

「蓮華がやろうとしていたことは……血が教えてくれた！」

ソニカの頬を叩く伊里。

誰にも殺されたくなかった。

自分の失くしていた、光の心を。自分自身を。

だからこそ、自分のことは自分でケリをつけたかった。

自らの手が血で染まるのは仕方ない。

自分と蓮華で一人前。

なら、自分の取る行動は、ひとつだけ

「起きて！……起きやがれ！！あんたがいないと勝てるものも勝てないでしょーがあー！！」

伊里は時計の指針からソニカを引っぺがし、ブンブンと身体を揺らす。

茶色のショートカットが、少しばかり妙な色に染まっている。

そんな髪が、ソニカを揺らす度に揺れている。

「信じらんねえ……あの伊里だぜ？」

クリスの声にハンスが力強く頷く。

「実は『蓮華』だったり？……あーうそです、うそ」

隣で大きくため息をつく妹、セラフィンの行動が目に入ると、ハンスは冷や汗をかきながら即座に意見を否定する。

「ティアラ」

兄を冷やかな目で見ると、無視して目の前にいるティアラに声をかける。

呼ばれたティアラは、ニツと笑うとすぐに立ち、弓を構えた。

待ってました！といわんばかりに。

「GO！」

狙いを定め、1本の矢を放つティアラ。

矢は、どんどんスピードを上げていく

「さあ、皆。そろそろ用意だよ！」

ティアラの声を合図に十字架背負う者達が動きだす。

力強い光に宿しながら……

「『光手刀』！」

キャロルが伊里に向かって手を思い切り振り上げる。

「っ」

条件反射で身を守ろうとした時、彼女は失念していた。

蓮華を担いでいたということ。

自分と、蓮華、そして尚且つソニカを護るには、両手を使うのは当たり前。

ましてや、自分達だけならまだしも、ソニカは護らなければならぬ。

キャロルがいくらソニカを殺したくなくとも、自分達がいる以上、下手に動いたらソニカを殺してしまう確率が高い。

だから、両手を前へと突き出し

「しまった！」

自動的に蓮華は下へ落ちて行き

ビュン！！

1本の矢が下から迷わず飛んできて蓮華の心臓を貫いた

キャロルと伊里の間に静寂が訪れる。

伊里は動けなかった。

「……………う……………そ……………」

力が抜けていく。

だけど蓮華から目を離せない。

離しては、けない……

ヒュ……………

音をたてながら落ちていく蓮華。

風を切りながら、まっさかさまに落ちていく。

それでも、伊里は動けなかった。

「1度も2度も同じだろう……………光の者は肉片も残すわけにはいかない！『光凍剣・暴走』！！」

キャロルのリバース・クロスが技名どおり、暴走しながら蓮華に向かっていく。

ドシュッ……

そんな音を立てながら、蓮華は真つ二つになるはずだった。

血の虹が空にできあがってもおかしくないはずだったのだ。

だが。

「『銀河峰』!!」

久しく聞いていなかった声と共に、『光凍剣・暴走』は消えうせた。

「なに俺抜きで暴れてるわけ？ キャロル・ヒソップ」

蓮華を抱え、伊里を護るように、彼、ソニカ・アイリスが立ちふさがる。

NO・19 償い（後書き）

ちよこまか変更しながら書いてるので、益々意味不明に（落ち込み）
久しぶりの更新。

参照数が増えていることに嬉しさを感じます。

辛口評価で、評価コメントを頂けるとなによりです。

……情景描写からなにからないのは分かってますが；

では、又お会いできることを祈りつつ……

R
u
e

NO・20 救世主様（前書き）

怒りと悲しみで心がいっぱいの時、笑うことが出来ますか？

NO・20 救世主様

フシュウウウ……

防御しながら、信じられないという顔をするキャロル。

白い靄が大量に発生し、少しずつ消えていく。

そしてその瞳に入ってきたのは、先程まで気を失っていたソニカ・アイリス。

「銀河峰……だと？何故、お前が扱える?!」

「驚かなくてもいいと思うけど。だって俺は、あんたの代わりなんだから」

キャロルが一步後退する。

ソニカは平然と言葉を返す。両者、一步も譲ることもない会話。

風は冷たく、彼等を包む。

晴れているのに太陽の熱さを感じさせない。

木々がざわめく。

そのざわめきは、次第に大きくなっていく……。

時を止めない限り、木々のざわめきとはまらず、太陽の熱さも感じないだろう。

「『黄バラの包帯』!」

シュルシュルシュル……

キャロルの身動きが封じられる。

「驚かなくてもいいだろうが、キャロル」

「例え、銀河峰が上級リーナスの技だとしても、ソニカ・アイリスに、あんたはプリメットを託したんだから」

伊里とソニカにたたみかけられるキャロル。

ソニカに氣をとられていたキャロルは簡単に黄バラに取り付かれる。

勿論、操っているのは伊里だ。

「確か黄バラの花言葉は『さようなら』とか『我々はお互いに忘れよう』といった『別れ』の花言葉が含まれてたよね……」

不気味な含み笑いをする伊里。

「今のあんたにぴったりの言葉だな
こうとう(?!?)」

『銀河光刀』(ぎんが

キャロルに十字架を振り落とすソニカ。

十字架が銀色の光を放つ。懇親の力でキャロルの脳天に狙いを定めて

「うおりゃああ………！」

叫びながら、懇親の力を持ってぶち当てる。

手ごたえは、あった。

銀色の光は伊里とソニカの視界をも遮ってしまう。

肩を上下に動かすソニカ。

まともに呼吸が出来ない。そこまで彼はリーナスを使い込んだのだ。

もう、まともに戦えなどしない……回復するまでは。

「じゃ、君は今隙だらけってことか」

突然、ソニカの目の前にキャロルが無傷で現れる。

黄バラの刺の跡も、銀河光刀の後も見当たらない。

「なん……で……」

キャロルは微笑むだけで答えない。力尽きているソニカの胸倉を掴む。

「今から私は十字架背負う者達を始末しなければならぬ……終わるまで君は、ゆっくりと休んでいたまえ！『豪風』！」

左手を切り落とされているというのに、キャロルは全く苦にしていない。

彼にとって、左腕損失というのは、ハンデのようなだろう。

ソニカを掴んだ右手から、放出される風。

抵抗することができはらずに、ソニカは凄まじい風に身を任せ

ドバツシュッ！！

やはり凄まじい力で身体を打ち付ける。

音速で、行き着いた場所は見覚えのある扉。

1度しか見ていないが忘れることの出来ない扉。

蓮華が見せてくれた扉。

その扉の一番上に、ソニカ・アイリスは貼りつけられた。

『 やっぱり……ここが俺の場所なのかつ 』

声を出したくても出すことが出来ないことに腹が立ち、内心、悪態をつくソニカ。

なんとか動こうと試みるが無駄に終わってしまう。

冷たい風が彼の顔を撫でていく。

ソニカは扉の絵を思い出す。

左右に3つずつ刻まれた花々。それは彼が知っている者達の象徴。

『この扉をキャロルは開けようとしているんだろうか……』

キャロルは、プリメットを治める者。

それを引退しようとしている今、彼はどこにいてこうしているのか。

「永眠するだけなら、大人しくクレストされりゃいいのに……ってあれ？」

本音がスムーズに声に出る。

困惑している彼に、とどめといわんばかりの出来事が同時に起きた。

「『春・夏・秋・冬、花吹雪の結界』！！」

見慣れた花々が下から突き上げてくる。同時に噴射している者達の姿も。

何もかもが、キャロルを包囲する。

「あ……危ない！やめろ！」

「そんなこと言っても、止める人達じゃないでしょう？」

夢中に叫んだ言葉は、柔らかな声に受け止められる。

信じられない、といった顔つきで目の前に現れた声の主を凝視するソニカ。

2人の間で時間が止まったようだった。

「一刻を争いますので、すぐに離して」

「教えてくれないか？この扉は何のためにあるのか……そして、キャロルはどこに行こうとしているのか……崎原蓮華さん」

冷静さを取り戻したソニカが真っ直ぐ彼女、崎原蓮華を見つめる。

何故、死んだはずの彼女がここにいるかも不思議だったが今はひとまず置いておく。

今聞くべきことはそんなことじゃない。

もっと大切なことが現にあるのだから。

『ソニカは気づいていない。自分自身が変わっていくことに』

そう判断し、蓮華は軽くため息をつきながら、最初に言った。

「急速に覚醒していますね、ソニカ・アイリスさま。キャロルさまを超えるリーナスの持ち主ただけはあります」

微笑する蓮華。

それに対して答えないソニカ。

「この扉は『永遠の迷宮』（とわのラビリンス）。プリメツトを再生するための扉。

ですが、開くためにはいくつかの魂が必要……魂を力として開く扉。

時空のゆがみに繋がっている唯一の扉。時空のゆがみには魂が集う。ここまで言えば、おわかりですか？」

「ごく丁寧にどうも」

皮肉っぽく話されたので、ソニカも同じように言う。

もう一度、ソニカは彼等を見る。

「俺は大切な人達を守りたい。プリメットを守るよりも、大切なんだ。」

だから！だから、俺はキャロルの思い通りにさせない。扉は開けさせない！絶対に！」

ソニカの瞳に映っている者達をしっかりと視界に入れる。

「刺し違えても、俺がクレストすればいいこと！キャロルだけが時空の歪みにいけばいい！」

「いつまで持つか分からない……でも、これしか方法はない。異論は？」

ディックの言葉に首を横に振る花天使達。

もう、覚悟は出来ている。

今回の出来事は予想済みだったのだから。

彼等はプリメットの未来をただひとりの者に託すことにした。

そのためには、キャロルの動きを封じることが第一条件。

「！ソニカ！！」

「……これが、『永遠の迷宮』」

「

今の今まで鮮明に上空での出来事を全て見ていたティアラ達。

無言でみていたが、流石の出来事にジルとセラフィンの声が重なった。

「それ以外ないからな。にしても、無茶させるなキャロルは」

ディックが呆れたように口にする。

キャロルはソニカに、プリメットを託そうとしているのだ。

もう少し捕らえ方にも気を使っていいと思うのは、彼等だけではないはず。

だが、キャロルは豪風で強引にソニカを永久の迷宮に張り付けたのだ。

ディック達が呆れるのも無理はない。

白く、大きな扉。左右に3つずつ花が刻まれていて、頂点にソニカがはりつけられていた。

「……意識は、あるようだな」

「そりゃ殺せないさ、キャロルには。自分の後を任せる者なんだから」

ハンスとクリスの言葉が飛ぶ。

ほんの少しの間が出来て、先ほどより静かにな花天使達。

思い思いに、自分達の今までを振り返った。

もう、2度と出来ないことだろうから……

「……皆、準備はOK？」

ティアラの声に、無言で目配せしあう花天使達。

どの顔も、真剣そのもの。

しかし、どこか悲しそうな微笑が伝染する。

「『春・夏・秋・冬、花吹雪の結界』！！」

赤・青・黄・緑・紫・白という眩しい光が、そして彼等の誕生花が
キャロルを完全に包囲した。

「上昇！」

ディックの一言で、宙に浮き、キャロルの位置まで上昇する6人。

だが、彼等にキャロルを押さえ込むことは止めることは無い。

そして、この結界は各々の力が均等且つ、揺ぎ無い気持ちからでき

ている。

誰かひとりでも力を弱めたり、動揺すれば、簡単に結界はなくなり、しばらく戦闘不能となる技。

だからこそキャロルの顔には焦りが見えないのだ。

「いつまで、こんな強力な結界を張ることが出来るんです？ たった6人の、貴方方の力で！」

動きは封じ込んでいるもの、キャロルに疲れはみえない。

憎たらしい口を動かし、彼等を動揺させようとしてくる。

心理戦に持ち込むつもりだ。

「キャロル！ あんたの私情で造られた『対の存在』の魂が時空の歪みで待ってるわよ！」

「かなり重度な二重人格だということには同情するけど！ 克服するしかないでしょ！？」

「俺達を苦しめたい気持ちも分からないでもない……けど違っただろ？」

「てめーは楽しいかもしれねえな！ 自分と同じ思いを俺達にさせて！ でも……俺達には悲しみしか残らない！」

「俺達6人だけのリーナスじゃないぜ？ ここにはプラス6人分のリ

ーナスが集まってる！

お前によって消された俺達の対の存在がここにいる！」

バチッ……

バチバチッ、バチッ！

火花が散る。

小さいものが大きなものへとなって。

「私達のフルパワー……受け取んな！キャロル・ヒソップ！」

バチバチバチ……ブチイイイ！！

火花がどんどん散る。勢いを増して、キャロルの周りの空気がなくなっていく。

青ざめていくキャロル。

それでも、ティアラ達は結界を張り続ける。

全員の怒りと悲しみの入り混じった力が、見事に均一し、且つ心は揺らない。

「来るまで、はっとくから……！」

「早く、き……て……！」

ティアラとセラフィンの表情は苦痛を語っていた。

「……う……っ……」

真っ赤な血を吐くハンス・A・ポインセチア。だが、手を休めることは無い。

「『魔光剣』！」

一筋の光が、結界を破壊し、花天使達を解放させた。

結界を破ったのも、花天使達を解放させたのも、キャロルではない。

「おいっ……！」

ソニカ・アイリスが、ようやく駆けつけてきた。

彼がやったことだった。

後ろには蓮華と伊里がついてきている。。

両者共、真つ黒にこげながら彼等を見ていた。

「 なんか……俺なんかに未来を託すな！」

ソニカが叫ぶ。

風は、彼のことを冷たく包んだ。

「 よお。救世主様」

誰かが、そう呟いた。

NO・20 救世主様（後書き）

やっぱり、ちょこまかいじりながらの投稿は無理がありますね。
辛口評価で評価していただけますか？
では、又お会いできることを祈りつつ……

R
u
e

NO・21 表裏面（前書き）

もし、ただひとり残されたら、どうしますか？

NO・21 表裏面

声がする。

待ち望んでいた声が。

はつきりと……風と共に我の耳に運ばれる

バチバチバチッ…バチバチッ……バチイイイ…！

火花は散り続けていた。

キャロルは苦しそうにもがいているが、花天使達はもう結界をはっていいない。

正しく言えば、はれなくなった。

6人全員、息を乱し、血を吐き、怪我もしていないのに血は噴き出し続ける。

これが、結界の代償。

誰もかもが、宙に浮きながら戦闘不能に陥っていた。

なのに、どうして自分なんかには話しかけられるのだろう。

息をするのも辛いことは、素人目でもわかるのに……。

「 やつと……き、た」

「……げんか……い、おそいつ、て」

宙に倒れる花天使達が自分への罵倒を口にするが気にしない。

バカだのトンマだのアホだの……それはそれは罵る言葉ばかりのオンパレードなのに。

怒らない、怒鳴らない……『出来ない』。

目の前の花天使達は、口を動かすことが限界だということがわかるから。

心地よい風が吹いているにもかかわらず、ここは異様に暑かった。

蒸し風呂か何かのように暑く、自分は今きたばかりなのに、汗が全身から噴出している。

止まらない出血、吐血……そして整わない息。

……それを涼しい顔して傍観しているキャロル。

これが、彼の目の前の光景。

苦しいのに、それを隠すために動かす花天使達の口。

隠すための柔らかな彼等の微笑。

「　　んで、なんでこんなことしたんだよ！自分の首を締めるよ
うな」

悲鳴のような声を上げ、泣きそうにな顔で、声音で問わずに入られない。

答えが返ってくるとは思わなかった。

返す力なんてあるとは思わなかった。

だから、驚いた。

「　　『そのために』いること……『そういう駒』であること
を理解してんだろ？」

ディックの優しい声が届けられた。

だが、当の本人は、困惑の表情をするだけ。

まるで、いつもと変わらないような口調で、答えが返ってきたのだ
から当たり前かもしれないが。

そんなディックの言葉を継いで、セラフィンが微笑みながらソニカ
に教える。

「……対の存在がいたでしょう？対の存在はね……一部の記憶を閉
じ込める働きもしてたんだよ」

「 対の存在が消えたから、俺達は全てを理解した。キャラルの本性、狙い……そして俺達の役目を」

渴いた声で笑いながら声をだすクリス。

「あたし等は永遠の迷宮を開くための駒。でも、最後まで思い通りに動かせるのは、性に、合わなくてね」

ほどけた長髪を再度ポニーテールに結ぶティアラ。手は、血で塗られていた。

が、彼女はまるで平気な顔をして答え、振舞う。

「お前の負担を少なくすることで、最後の最後で反乱起こしてみたんだよ」

ティアラとハンスの声は明るい。内容は辛いことなのに、彼等はそれを微塵も見せない。

と、今まで動かなかったキャラルが、ゆっくりと動いた。

反射的に立ち上がる花天使達。

その手には、しっかりと十字架が握られている。

「?!おい、まさか!」

目を見開いてジル達を見、声をかけるソニカ。

手を伸ばし、腕を掴もうとしたが軽々とジルはソニカの前から抜け

出した。

「俺達は納得いくまで……反乱を続けるっ！」

ジルは早口で言うつとキャロルの懷に攻め込む。

「『心流

』『心魂弾』！！』

ジルの両手が素早く突き出され、キャロルの腹に穴をあけた

誰もが……もといソニカだけがそう信じた。

目の前からジルが消えていくまでは。

ヒュンツと彼の顔を横切った風。

後ろに何があり、どんなことになっているか簡単に想像できる。

だが、振り返ることは出来ない。

信じたくない。

「『風の鳥』！」

「『草々の刃』！」

流石は双子。少しもずれずに声をそろえて攻撃するセラフィンとハ

ンス。

鳥の風が、毒草を切っていき、キャロルにぶつかっていく。

皮膚から毒を回そうとしたらしいが……失敗に終わった。

キャロルはパチンと指を鳴らしたただけなのに。

たったそれだけで彼等の攻撃を回避してしまったのだ。

ヒュンッヒュンッ

両頬を撫でるように風は通り過ぎていく。

「信じられない、という顔ですね、ソニカ・アイリス」

伊里が静かに声をかける。

「でも、花天使らしいですね。己の信じる道を進むって感じで。

決して立ち止まらず、迷わない心。どんな障害があっても彼等は信念を貫き通す」

蓮華が意味ありげな顔でソニカを見上げる。

だが、ソニカは返事を返さない。

目を見開き、目の前で繰り広げられている戦闘を目に焼き付けてい

た。

十字架を持つ手に力がこもる。

「貴方は、彼等に応えなければなりません……彼等は死ぬ覚悟で、戦っているのですから」

「
応えるのは、義務ですよ」

ヒュンッ

風に肩を叩かれた気がした。

思わず、後ろを振り向いたソニカ。

「
開きかけてる……永遠の迷宮が……」

ソニカが見た時、丁度、サンフラワーが……つまりクリスの魂が扉に吸い込まれていくところだった。

「クリス！」

遅いと分かっているにもかかわらず彼は叫ぶ。

一瞬のことなのに、彼の目にはスローモーションのように映ったのだ。

「『激流波・絶対零度』!!」

単なる水がキャロルに近づくたびに白くなっていく。

「『紅乱剣』 2刀流!!」

ディックが勢いよく投げつける。

右からはディックが、左からはティアラが攻撃する。

2人で挟み撃ちを試みるが

「どこを……攻撃してるんだい？」

穏やかな声が2人の背後から聞こえ

ヒュンッヒュンッ

風が髪をなびかせる。

目の前には、キャロル・ヒソップただひとりとなっていた。

「もう、奴等は逝った……後はソニカ・アイリス、君だけだ」

キャロルがリバー・クロスを突き出し、またもや豪風をソニカに打ち込む。

咄嗟のことで身体が思うように動かないソニカ。

目をつぶり、十字架を離すまいと握りしめた

NO・21 表裏面（後書き）

花天使達、消えました。次回はソニカとキャロル対決ですね。ああ……描写がない……

では、又お会いできることを祈りつつ……

R
u
e

NO・22 ラストゲーム開始（前書き）

光と闇の気持ちは誰にでもあるもので

どちらを使うかはその者の意志である。

NO・22 ラストゲーム開始

グギギギッギギ……

「な……？！」

「え？！」

ソニカもキャロルも目を疑った。

豪風が止められていたのだ。 崎原蓮華と楓伊里の力で。

「いくらなんでも忘れられちゃムカツクわ」

「つかせない……！永遠の迷宮にソニカは行かせない！！」

リバース・クロスとクロスが重なる。

相容れないクロスとリバース・クロスがソニカの目の前で交差していた。

そして、相容れないクロスとリバース・クロスは共鳴を起こしているような音を奏でていた。

その音は澄んでいて、聞くもの全てが心を奪われる音。

だが、キャロルは違ったようだ。

彼には、この音は澄みすぎているらしい。

今、光の心が完全でない、彼の耳には地獄のメロディーに聞こえるのだろう。

「何故！何故邪魔をする？！だいたい何故お前達の力で私の力が防げる？！」

キャロルはわめき散らす。

そうすることで音を聞かないよう努力しているようだった。

身を守るために。

全ての声を、音を、視界を……感じないようにする為にあがいている。

だが、相手は今現在の花天使の長。

あがいていても、業を使わないわけがない。

「…………『重孔弾』！！」

「ソニカが目え覚ますまで、しのぎきればいい！」「」

キャロルの攻撃と伊里達の声が重なった。

だが、結果は知れたこと。

当然のように弾き飛ばされる伊里と蓮華。

蓮華の長髪が広がった。

伊里のショートヘアまでが揺れ、2人は宙に叩きつけられる。

重孔弾は重力を利用した超ヘビー級の技。

蓮華と伊里の周りの空気を、重孔弾で重力を操り、2人を四方八方から締め上げた。

最期に叩きつけたのは、キャロルの怒りからだろっ。重孔弾に、叩きつける力はない。

「蓮華さん！伊里！」

ソニカは駆け寄ろうとした。

少し遠目だが、大体分かる。2人の状態が。

血は流れていないが、軽く肋骨にヒビが入っているはずだ。

助けたいが、ソウは問屋は降りてくれないのが現実。

「お前達は黙っていても、自然消滅するんだが……」

私に逆らった褒美として、先に逝かせてやろう……『銀河峰刀』！
「！」

リバース・クロスが2人に向かって振り下ろされる。

黄金の光が超速で2人に接近し包み込む

当然のように蓮華と伊里の姿は影も形もなくなった。

どこを探しても何も無い。

それを確認したキャロルの口がわずかに緩みだし、大きな笑い声と化する。

彼の目に映るのは曇ることの無い青い空、白い雲。

そして、耳を通して聞こえるのは……

「俺、迷ってたんだよ……キャロル・ヒソップ」

背後からの声。

その声は、静かで小さくて……

キャロルの笑い声にかき消されるはずなのに、ピタと笑うことを止めさせた。

「あんたを倒すことに。あんたはかなり重度な二重人格者だけど、……少しでも『光の心』が残っているんじゃないかって思ったから、さ。」

俺は同じ光のリーナスを持つ者としてサポートするべきだって…そう、思ったんだ」

黄金に輝いた十字架がキャロルの首筋に当てられる。

冷たく、身体の内から凍らせるような感触。

それだけではない。

ソニカの抑揚の無い言葉は、キャロルの身体を縛り付けていく。

「だけど、大きな間違いだったようだ……あんたは今ここで殺さなきゃいけない……それが俺に出来る恩返し」

十字架を素早く自分のほうへ引く。

しかし、キャロルは予想済みだったらしく一瞬早くソニカから離れた。

「エンジンかかるの遅くて迷惑かけたな」

独り言のようにソニカの口が動く。

キャロルに言っているのではない……ソニカの視線はやや後方を見ていた。

「私達に謝る前に」

「さつさと片付けて下さい……それがきつと嬉しいはずですから」

髪をかきむしる伊里と、穏やかに笑う蓮華達。

伊里と蓮華は真っ直ぐ永遠の迷宮に向かった。

「ソニカ、やってくれたね」

苦々しそくに呟くキャロル。

後を追いたい気持ちだが、未だに上手く動けない。

「よおやく迷いも無くなった……退屈させんなよ？ キャロル・ヒソップ」

ソニカ自身は気づいていない。だが、他者達には見えた。

彼の黄金の羽は神々しく、澄んだ淡い青色の目。

彼のことをとりまく光は多彩な光が入り混じっていた。

「さあ、ラスト・ゲームの始まりだ」

ガキイイイイン！！！！

リバース・クロスとクロスが激しくぶつかり合っている。

ガキンガキン、ギギギギ……………

青い空に白い雲がプカプカ浮いている。

そんな中、金属の音がプリメットに響いていた。

「　　　つち！」

舌打ちと共に、思い切り十字架を押して、後ろへ吹っ飛ぶソニカ・アイリス。

「カ比べは私の勝ち、かな？」

茶化すように問う声は、プリメットを治める者、キャロル・ヒソップ。

光と闇の人格の持ち主。だが、今は闇に支配された者。

彼は自分自身の病氣　　『かなり重度な二重人格』に疲れ、プリメットを去ろうとしている。

彼と対峙しているソニカ・アイリスは、2代目のプリメット統治者何故、この2人がバトルをしているのか……それは意見の相違といえる。

シュッ

キャロルがリバース・クロスを素早く横に動かす。

「くっ……」

ソニカの右頬が軽く切れる。赤い血が頬を伝う。

「離れてんのに……流石だな！こつでなきや、面白くないっ！」

血を拭ったと思った時、すでにソニカの姿は見えなかった。

リーナスも感じられない。

「くっ！こざかしい！」

キャロルは全神経を集中させるが

「いかなるときも、隙を見せたら、おしまいだぜっ！せやつー！」

突然目の前に現れ、十字架を振り下ろすソニカ。

気づいた時には、キャロルは額から血を流していた。

十字架の先端はキャロルの額を貫こうとしているかのように、グッサリと入っている。

醜い声を出すキャロルに、ソニカは手加減しない。

「やっぱり勝負は……真っ向勝負だろっ!!」

ドス!

重い音が、プリメットに響くはずがないのに、響いたように聞こえた……

NO・22 ラストゲーム開始（後書き）

ども、Rueです。

遂に次回は2の最終回となりそうです。

では、又お会いできることを祈りつつ……

R
u
e

NO・23 最大の供養を（前書き）

歩いていこう？

どんなに辛くとも

生きている限り、
気持ちは継がなくちゃいけないから

NO・23 最大の供養を

一体いつ十字架を持ち替えたのか、キャロルには見えなかった。

気づいた時には、腹に小さな穴があいていた。

彼が遅いのではない。

ソニカのスピードが尋常ではなかったのだ。

全身に痛みが走り、思わず声を漏らしてしまう。

だが、彼は連続して驚くことになる。

「
?!」

声が出ない。どんなことをしても、出したくても出せない。

口は確かに動いているが、傍目には金魚のようにパクパクとしか見ることが出来ない。

トンッ

そんな静かな音が似合いそうな感じで、ソニカは着地し、キャロルに振り向く。

「セラフィンから前貰った『音無し』さ。穴あけるときに全部使った……声がでないのってどんな気分？」

ソニカの声は感情がない。全ての感情はキャロルにぶつけられている。

一刀一打に全力で立ち向かう。

「……心流……『心竜』！」

シュダンッ

奇妙な音が一度だけ聞こえた。キャロルの悲痛の声は聞こえない。

2人の間に白煙が舞う。

キャロルの腹に、でかい穴があいていた。

骨も、肉も何も無い。腹を通して向こう側が見れる。

「おーよく見える……つとお！」

ガキン！

キャロルの動きがスローモーションのように見えるソニカ。

迷わず、リバース・クロスを頭上でしっかり受け止める。

ギギギギギ……しばらく押し合いになるかと思った矢先。

ソニカが十字架を引き、横に振る。

すると、目の前にいるキャロルが消えていく。

残ったのはキャロルの人形。ひとがた

シュツ

真つ二つに人形を切るソニカ。

人形も切られると自然に消えていった。跡形も無く。

「入れ替わったのは、腹に大穴をくらった直後か。俺が、気づかず、昔のまま攻撃をうけるとでも？」

ゆっくりと振り向くソニカ。彼の周りの空気が鳥と化す。

確かに十字架を受け止めることをソニカは苦手としていた。

受け止めるだけで、精一杯になって次への対応が素早くとれない。

だが、今のソニカは受け止め、次への対処をとっていた。

でも、キャロルがそれを許すはずが無い。

リバース・クロスがソニカの心臓を貫こうとするのと

「『風の鳥』！」とソニカが叫ぶのは同時……いやキャロルの方が早かった。

その証拠として、ソニカの心臓を貫いている。

血も流れ、動かない。

青い空に白い雲がプカプカ浮いている。

その中で、ソニカは静かに血を流す。キャロルは、顔面蒼白だった。

「っごほ！……っごほっごほっ！！」
うえがはっ

肩で息をしながら、ようやく声が出るようになったキャロル。

動かないソニカを見上げる。

「　　こんなつもりじゃなかった……！こんなつもりじゃ……」

搾り出すように声を出す。

今のキャラルに以前の風格は感じられない。

目の前にいるのは、絶望に突き落とされた老人。

先ほどまでつやのある肌、茶色い長髪で、ソニカと戦っていたとは思えない姿。

彼にとって、ソニカ・アイリスは殺してはいけない存在だった。

永遠の迷宮は開きかけているが、頂点の花に『生きているソニカ・アイリス』を入れなくては、意味が無い。

ソニカを入れることで、プリメットは滅びることはないし、治める者にも心配は無い。

キャラルは、心置きなく永遠の眠りにつけるというものだ。

「そ、それを、私は……私の立てた計画は……自分、自身で駄目に……」

手が震える。

血塗られた手、そして、リバー・クロスをこわごわと見つめるキャラル。

『この血塗られたリバー・クロスを、ソニカの心臓に……この手で！』

受け入れたくない現実。

だが、受け入れなければいけない現実。

「これが、私の運命というわけですか……ならいつそのこと……！」

リバース・クロスを自らの心臓につきたてる。

「自己クレ」

「させるかあ！ 回し蹴り！」

ごふっ……！！

キャロルは我目を疑った。

すでに音無しの効果は消えている。

だから、痛いものは痛いと言えた。

だが、やはりどうしても解せない。

蹴られた左頬は痛いが、そんなことは些細なこと。

未だにわからない。

何故、心臓を貫かれていて、生きているのか。

「自己クレストされたら、俺が困るんだよ！ お前は俺が倒す

んだから！」

血まみれになりながらも、ソニカはそんなことおかまいなしに十字架を振り回す。

自分の血が流れているのに気がつかないのか。

右に左に、上に下。時には背後から、そして時には真正面から。

キャロルは身体を硬直させ、攻撃できない。

己の恐怖と目に映る事実に縛られていた。

十字架とリバーズ・クロスがぶつかり合うことは無い。

ソニカが十字架をキャロルに振り下ろし、その後すぐにリバーズで攻撃。

その速さ、正確さは常人の目には追いつかない。

キャロルもなんとか目で追い、交わしているに過ぎなかった。

「うおらっ！『紅乱剣』！」

放つと同時に同時に、その姿は消える。

予測しなかったところから姿を見せるソニカ。

キャロルは、十字架の攻撃とリバーズ攻撃を同時に防御しなければならぬ。

だが、それを許さないのがソニカ・アイリスだった。

「はっ！」

十字架を首にぶつけるソニカ。

もがくキャロル。

ソニカは目をつぶり、キャロルの頭上目掛けて左手をかざし

「『蒼い雷』！！」

溢れんばかりの雷をキャロルに落とす。

文字に出来ないほどの衝撃音が響きわたる。

プリメットの空に、ひとつの蒼い光が一瞬輝く。

ソニカは、最後の力を振り絞り、十字架を両手で持ち直す。

そして、大きく、はつきりと声に出した。

「我名、ソニカ・アイリス！汝の罪、我が引き受ける！クレスト！
！」

十字架を引くソニカと最後の最後まで、もがくキャロルの視界は白い霧に包れた。

ソニカは頬を伝うしょっぱい水を、プリメットに数滴落とし眠りに

落ちる

どのくらい横たわっていたのだろう。

ソニカが気づいた時には、ふわふわの雲の上に寝かされていた。

重い瞼をボケ　と半分開けながらソニカは考える。

「あ、おきられましたか！よかったです」

右のほうから、聞いたことのある声が入ってきた。

「……………蓮華さん。無事で……………って、あ！キャロルは？！」

全ての記憶が蘇り、ガバツと起き上がるソニカ。

傷も手当てされていた。痛みも無い。

彼の問いに答える声は、左から聞こえてきた。

「キャロルは、貴方がクレストしてこの世に存在しない。大量出血しているというのに暴れすぎ」

伊里だった。彼女の顔には『困ったもんだ』とかかかっている。

「まさか右に心臓がある方だとは思いませんでしたよ。左胸刺されたときは、どうなるかと……………」

蓮華が芯から安堵した顔をする。

どうやら蓮華も伊里も戦いが終わると同時に、大急ぎで手当てやら看病やらしてくれたようだ。

真っ黒くこげた2人の服には、べっとりと血がついていたし、ところどころに傷があった。

「あのさ、ありが」

「
してください」

「は？」

お礼を言おうとしたソニカの声を遮ったのは蓮華だった。

正座をし、真正面からソニカに頭を下げる。

続いて、伊里も蓮華と同じようにしながら、ソニカに訴えた。

「クレストするなら、私だけで！蓮華は関係ない！」

「何言ってるの？私と貴女は、2人でひとりの存在よ？！」

「私は『闇の心』の持ち主！どう考えてもクレストされるのは私ですよ！」

自分の目の前で姉妹？喧嘩されるとは思わなかったソニカは、ひた

すら目を点にするしかなかった。

かといって、このまま放っておくのは気が進まない。

ソニカは静かに、2人に聞いた。

「そんなに、クレストされたいの？」

この一言は、効果抜群で蓮華も伊里も黙り込む。

ソニカはそれを見て真剣な顔で、立ち上がった。

「2人とも、立ってくれる？……目をつぶって」

低い声音に、たじろぎながらも蓮華と伊里は、ゆっくりと立ち上がる。

お互いの手を握り締めて、ぎゅっと握る互いの手。離すまいと握りしめる手。

ソニカは、この様子を見て自分自身に問いかける。

『俺は、新しいこの国の主……なんだよな』

十字架を握り締める力が強くなる。

ソニカは心の中で、十字架に語りかけた。

『お前は、俺の考えがわかるよな？俺は、間違っていないよな？』

光り輝く十字架を蓮華と伊里に振り下ろすソニカ。

「ソニカ・アイリスの名において、この2人の運命を導きたまえ」

十字架から黄金の光が放出し、蓮華と伊里をやさしく包み込む。

ポンッ

音がすると、2人は黄金の光に包まれる。

そして数分後には蓮華も伊里も生きて出てきた。

「へ？」

「なんで??」

驚く2人にソニカは、当然だといわんばかりに

「確かに源は蓮華さん達さ。でも、芯からの悪党じゃない。新しい人生を歩けて事」

ソニカの説明に口を開ける2人。

開いた口がふさがらない、とはこのことだろう。

笑いをこらえたソニカが、2人の後ろを指差す。

「その証拠に、ほら後ろを向いてごらん」

目に入ってきたのは、十字架だった。

「君達は、たった今から『花天使』なんだよ」

ソニカが嬉しそうに笑う。

2人がそれぞれの十字架を手にした時、遠くから何かが崩れる音がした。

「……まさか」

「永遠の迷宮？」

蓮華と伊里が交互に言うと、ソニカがそれに答えた。

「だろうね……あの扉があっても、用はない。俺は使わないし」

言ってる間に、形を無くしていく扉。

それを見守る3人の花天使達。

6つの光が扉から飛び出し、あっという間に消えていく。

一瞬で消えたのに、彼等はまだ空を見続けていた。

「プリメットが、滅んでいく……」

空を見つめながら口を動かす蓮華。

「そうだね」

のほほんと空から目を離さないソニカが肯定する。

「じゃあ、この国の名前は、なんていうの？」

伊里が空を眩しそうに見ながら尋ねる。

「
ネリネってのはどう？」

しばらく考え込んでいたソニカが、にこやかに口にする。

「ネリネ？」

「確か花言葉は
」

伊里と蓮華が一生懸命、頭の引き出しを探っていく。

「花言葉は『また会う日まで』さ」

風が優しく吹いている。

太陽の暖かさが身にしみる。

髪を風に任せて、なびかせながら蓮華と伊里は笑顔を見せて二重奏。

「「異議なし！！」」

彼等は笑う。

彼等に『終わり』という文字は無い。

どんなに辛くても、十字架背負う者達は前に進む。

残り少ない可能性がある限り、彼等は立ち向かう。

そして、平安をもたらすのだ。

それが、十字架背負う花天使。

人の闇を浄化し、罪を背負い、生きる。

赤の他人の罪を、背負い生きるのが運命。さだめ

それを拒むことは許されず、また、拒むことはしない。

終わり無き明日へと、彼等は足を運ばなくてはならない。

それが犠牲になった、花天使達の供養である。

しかし、いつまでも供養してられない。

それが十字架背負う花天使達の使命であり、さだめ運命であり、最大の供

養なのだから。

「さて、これからのサポートよろしくな？蓮華、伊里」

ソニカが言い終わらないうちに、2人はソニカに飛びついた。

十字架背負う花

天使達・2 END

NO・23 最大の供養を（後書き）

というわけで、十字架2も終わりました。

描写がなくて本当にすみません。リメイクでは必ず直します（遅い）！

さて、この話は三部構成となっており、つまりはまだ続きがあるのです。

現在執筆途中で、かなり描写を頑張って？書いてます。十字架3で完全解決させたいなあと思ってますが
そう上手くことが運ばないですね。

とにかく、十字架2が終われるのも、読んでくださり、且つ評価をしてくださった方々のお陰です。

ありがとうございます！

では、又お会いできることを祈りつつ……

R u e

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4701a/>

十字架背負う花天使達・2

2011年1月19日03時31分発行